

APU

立命館アジア太平洋大学 誕生物語

世界協学の大学づくり



世界から学生が集う グローバル大学

「留学生30万人計画」への
ロールモデルがここにあった

中央公論新社 定価 本体 1150 円(税別)

APU

立命館アジア太平洋大学誕生物語
世界協学の大学づくり

APU誕生物語編集委員会

中央公論新社



立命館アジア太平洋大学 誕生物語

世界協学の大学づくり

APU誕生物語編集委員会

中央公論新社

はじめに

立命館アジア太平洋大学 (Ritsumeikan Asia Pacific University / APU) は二〇〇〇年に、立命館学園創立一〇〇周年を記念して、日本で初の本格的な国際大学として設立されました。二〇一〇年には創立一〇周年を迎えようとしています。

現在、APUには大学院を含めて八七カ国・地域から二八一五名の国際学生と三一五三名の国内学生 (二〇〇八年一月一日現在) が学んでいます。世界各国から学生を募集し、多文化キャンパスを創ることはAPUの基本構想でした。世界各国・地域からの学生がキャンパスに集い、同じく多くの国々からの教員・研究者のもとで、職員に支えられて、ともに学ぶこと、これを私たちは「世界協学」と名づけました。

二十一世紀はアジア太平洋地域の役割が一段と高まる時代となり、国際的に活躍できる人材を育てるための本格的な国際化された大学が必要であると考え、私たちは一九九四年

にAPU創設の第一歩を踏み出しました。

この書は、APU創設に向けて第一歩を踏み出した一九九四年から開学を迎えた二〇〇〇年四月頃までの時期と、さらに一期生、二期生を中心とする学生たちが開学後の困難を克服しながら、APUが描いた理念の実現に向けて活躍した立ち上げ期の物語です。

それは夢を構想に変え、構想を大学設置の計画に具体化し、その課題を一つ一つ解決していった歴史です。さらには、構想を実現するための、立命館学園におけるリーダーシップの発揮や教職員が協働した奮闘の歴史であり、なによりも、APUに入学した学生一人ひとりの夢の実現に向けた挑戦の物語です。

また、地元大分県、別府市を始めとして、国内外の多くの人たちの協力と支援の物語でもあります。この物語は、APU創設に寄せられた多くの方々や政府機関、大学、学校、企業、各種団体、組織からの支援に感謝を込めて作成しています。

冒頭に述べたように、現在、キャンパスには八七カ国・地域からの学生が集い、勉学、研究、課外活動に励んでいます。学生の交流はスポーツや踊りなど言葉を超えた交流から始まり、学術文化活動や地域活動へと広がっています。生活習慣の違いや発想法の違い、ひいては文化の違い、そこで生じる葛藤や知的刺激がまた新しい活動を生み出しています。

日本の大学にはなかった多文化と多言語の社会、それがAPUのアカデミック・コミュニケーションです。各界の指導者やアジアのリーダーが、二十一世紀にはこのような大学が必要であると、APUへの共感を寄せてくださいました。これらの方々は、APUを支援するためのアドバイザー・コミッティやアカデミック・アドバイザーなどの支援組織に名を連ね、あるいは、APUの教壇や講演の壇上において学生に語りかけ、APUへ支援を寄せてくださっています。なによりも、経済格差の大きなアジア太平洋地域からの学生の受け入れにあたって寄せられた経済支援と就職支援はAPUの誕生には欠かせないものです。

卒業生は、国内学生も国際学生も、ともに「別府に帰る」と言い、大分や別府が第二の故郷になっています。大学が地域や社会と連携することで、学生は大学で学び、地域・社会に貢献し、実践力のある人として育っていくことができます。APUは、このように国際化と地域貢献を二つの柱としています。

大学がいかに大分県や別府市と連携し、学生が地域の中で活躍しているか、地域によって支えられているか、それもまたこの物語の重要なテーマです。

この書は、以上のようなAPU誕生の多面的な活動を、通史としてではなく「物語」と

して描こうとしたものです。

書名のサブタイトルは冒頭で述べた「世界協学」の精神からとったものですが、この物語の編纂を通して、私たちは、改めてAPUの誕生と成長が多くの方々との協力と支援に学びながら進められたこと、APUの創設それ自体が「世界協学」であったことを想起し、今後引き続き国際的な大学であるとともに、地方の大学として発展することを目指して、次の一〇年に向けた歩みを進めたいと決意を新たにしています。

はじめに 1

第1章 夢から生まれた卵…………… 19

九〇年代に描いた夢 21

国際化の先端を切り開くのだ／やってきた、大分県からのアンケ
ート／平松知事、BKCに感動／新大学設置を答申

夢の卵がふ化し始めた 35

天空の城、十文字原に決定／アジア太平洋学とは

アドバイザリー・コミッティの設立へ

42

世のため、人のため、日本のための大学／平岩外四氏の果たした貢献
／世界的なアカデミック・アドバイザー／天正遣欧少年使節団が出
発した浜辺

第2章

あらゆる挑戦……………53

新大学開設体制整う

学生を確保せよ 56

アジア経済の危機到来／大学間協定の拡大／文部省でしぼられた／
「よく来てくれた」——国際学生に感謝／明礬みょうばんから上がるように
——日本人学生の確保、親を説得せよ

二言語教育への挑戦

66

日本で最初のシステム／二言語教育はシンガポールで、最終決断／多文化キャンパスの実現

教育・教学のコンセプト作りは、手探りの闘い

74

設置する学部を選択／時間割／科目配置はまるでガラス細工／成績評価に「何回でも来る」国際学生のクレーム／教室で多文化交流／「アジア太平洋地域理解」演習／講義の仕方も国によって違う／言語ウィークでは国際学生の芸達者が日本人を圧倒／学習・授業のインフラ余話／謝る国、謝らない国／一年目はうわさで振り回された／国際寮／APハウス／就職で失敗できない／創立一〇〇周年・開学式典

世界へ 学生募集

101

海外にも事務所が作られる

モデルだからこそ苦闘した韓国オフィス

103

信じてもらうのにひと苦労／アジア太平洋時代の高校教育の展望を語る／国際化に突き進む韓国高校教育

教育制度の違いを超えて 中国

109

学生募集は国家の仕事です／協定が実を結ぶ／広がるネットワーク

ネットワークが生きたインドネシアチーム

115

まず訪問先の開拓／最大の困難は奨学金

A P U への期待をこめて——タイ 119

私宅に事務所の看板を掲げて

インド学生募集創世記 122

日本文化の理解者ヴァルマ教授

学生がやってきた 124

世界から学生がやってきた

別府事務所の取り組み 127

最初の仕事が事務所探し／立命館大学の学生も協力／A P U からの
提案／住居の確保

「よくぞここまでやった」の土木建設 135

残土を持ち出さない工事／徹底した環境対応

第4章

世界から集まって学ぶ、世界に羽ばたく…………… 139

異文化渦巻くAPハウス 141

真夜中のお出迎え／異文化のサプライズ／「花祭り事件」

APUの特訓演習 150

死に物狂いで勉強するAPU学生

早期卒業。パイオニア 153

新しいがゆえにつきまとなった苦勞／APUの伝説を築きたかった

グローバル市民への第一歩 157

グローバル社会への準備／ベトナムでアパレルブランドを起業／研究者を目指して

学長、副学長の卒業式 163

学生たちからの卒業証書

第5章

実録…APU的キャンパスライフ…………… 167

サークル活動開拓史 169

真つ黒なチューバ／国際学生と「和太鼓」／悩みに悩んだ学園祭

第6章

——イベントスタッフの濃い青春／サッカー部、外国人枠に苦しむ
——公園での練習から海外遠征！／放送部をつくる／「いっしょに
あ」／We can do it!／サークル連合の成立

イベント花盛り

185

世界学生サミット／世界歴史教科書博覧会／One's 1、そして世
界学生サミット／国際交流スポーツイベント

多文化食生活を支えたカフェテリア

198

生協スタッフの異文化交流が始まる／パン騒動／日本のお行儀を
教える

いたるところで地域交流……………

203

地域に出かけて

205

武家屋敷に泊まり込み

感染症対策ではトップクラスに

208

地元での説明会から委員会が発足

カンボジアで「ハッターかました」JCメンバー

209

APUを地元で紹介しよう

亀川も異文化の街に

212

「楽しく英会話」／異文化教室

二〇〇二年のサッカー・ワールドカップ、
あの中津江村で

214

ケチャクメンの事故死

大分へ “ 帰る ” とみんな言う

216

どつぷり、入湯貸間、コミュニケーション能力／地域連携ネットワーク型大学

APUな別府市民のみなさん

220

田中俊一さん（ホストファミリ）／筑浜直さん、大久保智さん（別府市役所清掃課職員・当時）／佐竹建一さん（城島後楽園ホテル料飲マネジャー・当時）／安心院久徳さん（山口コーポ・亀の井自動車学校）／近藤研二さん、好優さん（美容室「ぽにいてーる」）／アフジャー・バルティーさん（別府でインド料理店を経営する卒業生）

ホームステイの感動

230

ホストファミリ募集

第7章

APUは成長する……………

233

モンテ・カセム学長は語る――

235

マルチカルチュラル&エデュケーション・コミュニケーション・ハウス／学生が真剣に学習する大学Ⅱ APU／APUの次の飛躍を目指して／APUのDNAを引き継ごう

おわりに

242

資料

立命館アジア太平洋大学開学宣言

244

世界からAPUへ（国際学生の国・地域別数）

245

開学時のアドバイザリー・コミッティ名簿

248

装幀／中央公論新社デザイン室

立命館アジア太平洋大学誕生物語

——世界協学の大学づくり——

第1章

夢から生まれた卵



大学正門とシンボルであるツインタワー

二〇〇九年一月のある深夜。APハウス（学生寮）のシェアルームに住む日本人学生と国際学生。

明日のプレゼンの準備をしている日本人学生が

「ねえ、悪いけどこの英語の表現見てくれない？」

レポートを書いていた国際学生は目を通すと、

「Perfect!」と笑った。

「ありがとう。明日、授業でプレゼンしたら、批判や議論をバンバンぶつけられるから、負けずに応戦するつもり。授業がすんだらカフェテリアでエスニック料理を食べようね」

こんな光景は日常茶飯事。

立命館が九〇年代に描いた夢から、世界八七カ国・地域の学生が集うAPUの多文化の風土が生まれている。

九〇年代に描いた夢

国際化の先端を切り開くのだ

一九九〇年代に入って、時代は大きな転換点を迎えていた。ちょうど今の大学生が生まれた頃だ。日本では、少子高齢化社会の到来が叫ばれていた。ということは、これから先、一八歳人口が確実に減少していくことだから、どこの大学もその対応を迫られている。大学のまち・京都では九四年に京都のほぼ全大学が加入して「大学コンソーシアム京都（当時は京都・大学センター）」が発足し、単位互換制度を実施している。

世界情勢の変化はすさまじかった。それまで、世界の枠組みとなっていた米ソの冷戦が、九〇年の東西ドイツの統一、九一年のソ連崩壊によってガラガラと音を立てて崩れ去ったからだ。再構築される世界。アジアも大きく変貌へんぼうしつつあった。アジア経済の成

長は著しく、中国経済はこの時期、初めて本格的に世界市場へ登場してきた。人件費が安い国々の市場参入によって価格破壊が起きた。

一方、日本経済はそれまでの勢いを失い、ゼロ成長へと移行していた。八〇年代の日本は国際競争力が高く評価され、科学技術に裏打ちされた工業製品の輸出という方向へ国全体が突き進んでいたが、九〇年代はバブル崩壊、金融のグローバル化の激しい嵐に襲われ、どこに活路を見いだせばいいのか、苦しい、とまどいの時代が始まっていたと言える。

そんな時代に、後の立命館アジア太平洋大学（ＡＰＵ）へつながる構想の芽生えがあった。九一年に立命館は朝日新聞社の後援を受けて「国際学術シンポジウム」を開催し、立命館からの提案として、地球市民宣言を行なった。大南正瑛総長（当時）の基調講演は、国際化、情報化、人間化、開放化を通して、「世界に通用する大学Ⅱベスト・ユニバーシティを創ろう」という呼びかけであった。ここから、「ベスト・ユニバーシティとは」の論議が常任理事会や学内の会議で繰り返し行われていった。

立命館が創立一〇〇周年記念事業を考え始めた一九九四年は、そういう未来を自分で考えてつかみ取らねばならない時代であった。そんな中で立命館の一〇〇周年記念事業は検討されていた。

「一〇〇周年記念事業は、お金がいくらかかるとか考えたら大きな夢は描けない。お金のことは置いて、まずは事業計画を考えてほしい」。当時の川本八郎専務理事（九五年一月より理事長・現顧問）は言った。その真意は、単なるセレモニーで終わらせてはいけない、一〇〇年後に次の二〇〇周年を祝う人たちが、一〇〇周年でやってくれたことを感謝するような、そういう事業をすべきだという、壮大な構想への期待であった。

川本専務の言う「夢」は、主として四〇代、五〇代の教職員たちに託された。一九九四年五月、「新二十一世紀学園構想委員会」が結成され、「二十一世紀の立命館はどうあるべきか」というテーマで徹底した討議が行われ、自由に、また白熱して、イキイキと夢が語られたのだった。夢に勢いをつけたのは、「改革のエネルギー」だった。八〇年代に始まった「大学改革」を二十一世紀にどう結実させるのか。

大学も企業も国家も、組織は定形に固まってしまったとき衰退が始まる。常に作り上げたものの姿を点検し、改革していこうとする「革新」のエネルギーこそが、活力を生むのだ。「踏み止まるな、安定に甘んずるな」。

新二十一世紀学園構想委員会では、国際化を視野に入れた意見が多く語られた。国際化の中心となるものは「アジア太平洋の時代」という認識だった。八九年にAPEC（アジ

ア太平洋経済協力）が発足し、立命館が新大学の論議を始めた九四年は、翌年に大阪でのAPEC首脳会議を控える、アジア太平洋がクローズアップされた時期だった。

二十一世紀はアジアの時代だ。未開発の豊かな資源、多様な文化と人口に恵まれたアジアは、今後の世界の中で最も活力を生む地域だ。アジアに限定せず太平洋地域にまで広げて日本はその将来の指導者、専門家を育てる人材育成に力を注がなければならない。会議で出されたさまざまな意見の中に共通認識としてあったのは、二十一世紀の立命館は「アジア太平洋地域を軸にしよう」「真の国際化を前進させるべきだ」ということだった。

では、大学においての、真の国際化とは何か。日本と留学生の関係について根本的な問題意識があった。日本の国が発展途上国の人材育成にどれだけ協力してきたか、ということである。それまでの日本では教員が海外大学と交流したり、学生が単発的に留学したり、少数の留学生を受け入れたりしていたが、本当に日本という先進国の高等教育として、世界の教育にどれだけ貢献してきたのだろうか、という反省点と、もう一つは日本人学生がどこまで異文化を体験できているのか、という疑問があった。

例えば、アメリカにしてもオーストラリアにしても、多民族の社会に生まれて、いろんな文化の中で大人になっていく。アメリカの企業は海外に進出したときに現地の人や文化

に自然に溶け込むのに対し、日本企業は失敗してしまう例が多い。原因はやはり、多くの国が自国内にいろんな文化を持ち、小さいときからさまざまな衝突にも鍛えられてきて、国際的な場でも通用するものを持っているからだと言えよう。APUが今日創り出した環境は、日本人学生がわざわざ海外に行かなくても、半数が留学生という中で一緒に学べば、国際的に通用する力を付けられるのではないか、という発想が基にあったのだ。

立命館大学でも、留学生受け入れは熱心に取り組んできた。しかし、国内で留学生を募集することには限界があった。すでに日本に関心のある学生が日本語学校で日本語を習い、大学に入っている。そういう学生数は限られているため、留学生受け入れは進まなかった。日本政府は留学生受け入れ一〇万人計画を進めてはいたが、交換留学生を含めて三万人程度で低迷していた。海外から本格的な留学生受け入れを進めない限り、国際化は進まない。そうした事情を踏まえて、活発な意見が交わされていた。

アメリカでの大学生活を経験した教員は言った。アメリカではキャンパスは二四時間開いていて、学生は勉強に集中している。日本でも本当に学生が勉強をする大学を作らなくてはいけない。そのためにも、大胆に留学生を受け入れ、多様な文化の刺激を受けてこそ創造性も発揮される。また、国際化された環境で「アジア太平洋学」を学ぶカリキュラム

を提案した教員もいた。構想委員会の委員、アドバイザーとして参加した人、委員会が実施したアンケートに答えた教員など、構想作りに参画した教員は一四〇名に及んだ。構想委員会の活動は、立命館の二十一世紀を切り開く構想作りの場であったが、将来の学園のリーダーを養成する場でもあった。

やってきた、大分県からのアンケート

こうした新二十一世紀学園構想委員会の論議を活気づけたもう一つの新しい動きがあった。それは大分県の新大学設置構想である。立命館が二十一世紀の新大学像を模索し始めるちょうどその頃、大分県からアンケートが届いた。

「貴大学は、他県に学部ないし新大学を移転あるいは創設する計画をお持ちでしょうか」
当時、大分県は平松守彦知事が提唱する『一村一品運動』で全国的に名を馳せていた。

平松前大分県知事は「二十一世紀には地方は過疎化、高齢化社会になる。大分県もその例外ではない。若者の定住には大学誘致がいちばん役立つ。そこで自然環境に恵まれているわが大分県に学生数三〇〇〇人から四〇〇〇人規模の大学を誘致したいと考えていました。企画総室参事（当時）の溝畑宏君に言ってアンケートを全国の大学に出させたんで

す」と振り返る。

溝畑宏君とは現・サッカーJリーグ大分トリニータを擁する大分フットボールクラブの溝畑社長である。「平松前知事の意志で大学誘致を模索し始めたのが九〇年からでした。県庁内は、この時期に大学誘致なんかムリだという意見が大多数でした」。そして九四年に全国の大学に向けて出されたのが前述のアンケートだった。

このアンケートに対して「わが校は県外に移転・創設する意志がある」という返事がいくつかの大学から寄せられた。その一つが立命館だった。立命館は、アンケートを提出して一カ月後の二月に、大分県を訪問するという積極性を見せている。川本専務と甲賀光秀常務理事（当時）が調査に訪れたのだ。「担当の学園幹部がわざわざ来県するとは、これは相当本気だな」と大分県側は思ったという。平松知事は溝畑参事に命じ、別府市や玖珠^{くす}地域を案内させた。

平松知事は語った。「一九七九年に就任以来、通産省出身の知事として、キャノン、ソニー、NEC（日本電気）などハイテク産業を港湾、空港背後地に誘致してきました。しかし、内陸地域や工業立地に向かないところには、大学を誘致し、若者の定住や地域活性化を図りたいと構想しています。大分市にはすでに国立大分大学や大分医科大学（当時）、

私立大学もあり、臨海工業地帯には大型企業も立地していますから、大学を設立するのは企業誘致をしていない、また環境のいい地域と考えているのです」。

川本専務は、平松知事の迫力にひそかに驚いていた。「大学というところは、言うならば閉鎖的な社会ですから、世間的にどの県の知事が有名とかそんなこと知りませんよ。平松知事が提唱された一村一品についても私はほとんど知らなかったんです」。

平松知事は名産のカボスを入れた麦焼酎のお湯割りを勧めながら、「一村一品運動」について次のようなことを語った。焼酎なんか置いたことのない東京の高級料亭に大分の麦焼酎を持参してPRした結果、大分県は今や九州各県の焼酎生産県を抜いてシエアがトップになったこと。海外では、都市と農村部の所得格差に悩んでいる国の共鳴があり、農村を貧困から脱出させることに腐心している中国の上海市長、マレーシアのマハティール首相、フィリピンのラモス大統領などが直々に来県し、一村一品の現場を視察されたこと。自分も韓国大統領、上海市長や東南アジア各国に呼ばれて交流を進め、農村地域の知事や農業婦人団体への講演をしてきたこと、などなど。立命館側は、九州の大分県という地域で、活発な地域間国際交流が行われていることを初めて、つぶさに聞いて驚いた。

平松知事、BKCCに感動

それから二カ月後の九四年四月、今度は大分県から平松知事と溝畑参事が立命館大学の衣笠キャンパス（京都市北区）を訪れた。溝畑社長によれば、このときは大分県側がプレゼンテーションをしに行ったのだという。立命館側は、大南総長、坂本和一副総長（後のAPU初代学長）、川本専務、甲賀常務が顔を揃えて出迎えた。しかし、これは特別なことではなかった。地方自治体による大学誘致の申し出はあちこちから度々あったからだ。

溝畑社長によると平松知事は「大分県がこれまで中央アジア、東南アジア各国と地域間交流を果してきたこと。地域と地域、人と人との親しい交流が真の世界平和を築くのだということ。大分県政の重要テーマは人づくりだということ。未来の日本やアジア各国の役に立つ、開かれた国際大学を設置したい。経営に力のある立命館にぜひ新大学設置をお願いしたい」というような内容で、一時間にわたる熱いプレゼンを行った。大分県の問題意識の高さを感じてもらったためだった、と溝畑氏は言う。

雄弁に語られる話が、すでに実践してきた裏打ちとともにぐいぐい迫って来た。東京から遠い地域でも、志を高く持てばグローバルに活動し、世界各国と影響し合うことができ

る。東京ではできないことができる。国際化の鍵は、百の理屈より、行動し道を切り開く力にあるのではないか。平松知事の話は立命館学園の一〇〇周年記念事業に新大学設立を鼓舞しているように聞こえた。

聞き終えて、立命館側がこう言った。「立命館は、びわこ・くさつキャンパス（BK C）の開設、理工学部拡充移転を終えたばかりですから、新大学を創るとすれば、これまでの日本にない、よほど新しい大学の創設でもない限り、学園のエネルギーが湧いてこないと思います」。すると、平松知事がさかさ尋ねた。「では、どのような大学だったら、日本初のユニークな大学と考えられるのですか？」

立命館側はこう答えた。「今、文部省は留学生受け入れ一〇万人計画と言っていますが、実際には目標の半分にも達していません。留学生が多い大学といっても学生比率はほんの数%、高くても一〇%少々です。この際、学生の半数五〇%を留学生にする大学を考えたら、これは確実に日本初ということになりますね」「なるほど、なるほど」。平松知事は感心したときのクセで、口をぐいと引き締めて何度も大きくうなずいた。

プレゼンの翌日、立命館側は平松知事と溝畑参事をBK Cに案内した。前日のプレゼンでは、平松知事が立命館側をうならせたのだが、この日は、平松知事がBK Cにうなづいた。

「朝九時頃でした。校門に立つて見てみると、バイクに乗った学生たちが、次々と入ってくる通学ラッシュの風景でした。街が若者の街になり、見るからに活気があふれていました。大分県のどこかに若い学生が集まる大学を創れば、それだけで街の空気が若やく。こういう大学を創りたいと思いました。」

それからもう一つ、感銘を受けたことがあります。大学用地を造成する際に発掘した、その土地の古代の遺跡を埋蔵文化財として陳列してあるのです。新大学建設にあたり、その地の古い遺跡を保存することは、地域と大学のアイデンティティを強くします。地域の歴史、人情を理解して新キャンパスを開設した立命館の姿勢にいたく感銘しました」

この後、大分県と立命館はどのような大学を創るかを話し合うことになった。大分県は新大学建設に全面的に協力する、という。土地、建設費の一部を大分県・地元自治体が負担するという申し出である。何よりも平松知事の話には熱意と迫力が感じられた。「この人は本気だな」と感じさせるものがあつた。こうして、大分県との「大型公私協力」の話が始まった。

新大学設置を答申

この大分県との公私協力の動きにより、新大学設置の可能性が出てきたことで、国際化の新しい次元での議論が可能となり、活気ある議論がさらに進むことになる。

こうして、答申文書「二十一世紀の立命館学園」が異例のスピードでまとめ上げられた。「立命館は一〇〇周年事業として、日本初の本格的な国際大学を創設する」。この壮大な構想が一九九四年一〇月に、常任理事会に提出された。

新大学建設はあまりにも大きな計画だった。立命館としては慎重の上にも慎重を期してことを進めねばならないと考えた。もちろん、大分県としても誘致する相手は立命館で良いのか十分に検討したことだろう。

大分から京都へ、京都から大分へと担当者の行き来が繰り返された。大南総長も大分県を訪問し、平松知事と意気投合、話し合いはさらに具体化していった。地歩は着実に固まりつつあった。

一九九四年の一二月には、立命館大学の衣笠キャンパス以^い学^{がく}館^{かん}一号ホールで平松知事の特別講演会が開かれた。平松前知事は当時を振り返って、「新大学設置は教授会の満場一

致が条件だったので、講演会的时候は、学生や教職員のみなさんに向かつて、気合を込めて話しましたよ」。

「特別講演会・大分県平松知事来る！」の大垂れ幕が以学館の屋上から下ろされた。建物に垂れ幕を下げるということは、あまり例がなかったもので、「立命館と大分県の間に何かあるのだろうか」とキャンパスで話題になった。大垂れ幕を見た平松知事は後にこう書いている。——「反権力の気風を誇る立命館のキャンパスに『平松知事来る』の垂れ幕で歓迎され、『やった！』と思った」（『グローバル知事平松守彦 その発想と実践』西日本新聞社刊より）。

その後立命館では、一九九五年四月には「大型公私協力による新大学設立の基本構想案」が常任理事会に正式に提出された。いよいよ形になってきたのだ。そして、六月には「新大学構想具体化委員会」を発足させている。

一方、平松知事には七月にフィリピンから手紙が来ていた。グローバルにしてグローバルの知事にしてもアツと驚く内容だった。アジアのノーベル賞と言われるラモン・マグサイサイ賞の政府部門に選ばれたという通知だったのだ。八月三十一日、フィリピンのマニラで授賞式が行われた後、マラカニアン宮殿でラモス大統領と再会したが、そのとき記者

会見で、平松知事は、マグサイサイ賞財団から出された副賞の賞金を基金にして、新しいアジア太平洋の国際大学を大分に創りたいという構想を発表した。

川本は新大学を大分県にした理由をこう語る。「国際大学を遠い九州の大分県に開設する？ 学生がそこまで来るかと、誰だつてためらいますよ。常識的な感覚なら、そりゃムリでしょうということになります。だからこの事業は常識的ではないのです。逆に言うと、常識にとらわれない発想を持つてやれる大学や地方自治体は日本に少なかったんです。一般的には、改革の実践活動の経験と訓練ができていないですよ。ところが大分県は一村一品運動という新しい哲学を持つて世界に広めようとしてきた希有な自治体、立命館はよそがしないような附属高校の設立やBK Cの開設という改革を行つてきました。双方とも改革・改善に全力投球してきた組織だったんです。単なる出会いではない。懸命に取り組んできた苦しみと充実感を知る者どうしだから、また新しい事業を起こしたいという願望をそれぞれの組織の中に生んだのです」。大分県と立命館は、まったく新しい改革・改善に全力投球で取り組んできた組織どうし。これまでの経験と訓練による自信があつた。

夢の卵がふ化し始めた

天空の城、十文字原に決定

A P U は今、「天空の城」と二期生が呼び始めた、海を見下ろす別府市十文字原じゅうもんじばらの丘の上に建っている。この天空の十文字原も、決してすんなり決まったわけではない。十文字原になるまで、候補地はいくつもあった。湯布院町ゆふいん（現・由布市）、塚原高原、日出町ひじなど数カ所の土地が提案された。しかし、時間が経つうちに、国際観光温泉文化都市・別府市のどこかが似つかわしいということになっていった。

一九九五年六月末、井上信幸市長（当時）が別府市長に当選して二カ月後のことだった。平松知事から会いたいという連絡があり、訪ねると、実は別府市に国際大学を誘致したい、ついでには土地を提供してほしい、という話だった。井上市長は長く別府商業高校の教師を務めた経験から教育には関心が深く、大学誘致の考えを以前から持っていた。観光施設に行政が手を出して巨額の負債を抱えて失敗する例がいくつもある、作るのなら博物館や美

術館、大学など、将来にわたって永く役に立つ施設だというのが持論だった。

井上市長は考え抜いた末に「お受けしましょう」と答えた。そして助役と企画部長を呼んでこの話をし、誘致に向けて最大の努力をするよう、県への働きかけを指示した。その後、井上市長はBKCを視察、助役たちも立命館に何度も足を運んだ。

フィリピンでのラモン・マグサイサイ賞受賞後の記者会見で平松知事が「新国際大学」設立の話をしたのがその二カ月後であった。

ところで、その国際大学は別府市のどこに建設するのか、場所を早急に決めなければならない。「『別府市ではどこを希望されますか』と立命館側に尋ねると、川本専務も目のつけどころが違ふよ。当初、ゴルフ場はどうですか、と。いや、あそこは会員権を持ったメンバーがいるからダメです。すると次に、市内の公園はどうですか、ときました。いくらなんでもあそこはダメです。国から借りている土地が半分ありますから。じゃあ、どこがありますか、となったから、こちらが提案したのは、奥別府の高原の一九八ヘクタール、十文字原の四二ヘクタール、高崎山の裏に民有地一四八・五ヘクタールがあります、ということだったんです」と井上前市長。

これまで、たくさんの土地を見てきて、いよいよ候補地を内定しなければならぬとき



グローバル市民がここから誕生（APUの教室棟）

にきていた。川本専務は、別府市十文字原を訪ねた際、ここが良いなと感じた。その理由は、歌の心のようなものだった。「国際大学は海の見えるところがいいと考えたんです。遠く祖国ふるさとを離れてやってきた学生たちは、自分の国につながる海を見てふるさとを想う。そりゃ海のないヒマラヤの山々に囲まれた国もありますけど、ふるさとにつながる普遍的原理は海です。海を見るとき祖国ふるさとを想う。ふるさとを想うとき母を想う。人間、母を想うとき、一生懸命になるものです。困ったときは誰でも母親を想うものです。母親の愛はどの子の頭の中にもしっかりと刻み込まれているんです」。

海を見下ろす十文字原の大地が、APU建

設予定地の第一候補になった。そして九五年九月二五日、京都と大分の二カ所で学校法人立命館、大分県、別府市の三者で記者会見し、「立命館アジア太平洋大学」の創設を発表したので。

「それからが大変でした」と井上前市長。市議会では「市長独断で決定して、市の土地四二ヘクタールを無償で貸与することなど、自分たちに何も知らせなかった」「四二億円もの巨額の支援を議会に諮らなかった、議会軽視だ」「十文字原の土地を掘削すると温泉の泉源に影響が出て大変なことになる」「あそこは貴重な在来植物の宝庫だ」と野党の議員たちが抗議し、九月議会では三三名の議員のうち二十数名がAPUについて質問するという騒ぎになった。

井上市長は一貫して「神社仏閣、学校学園は時間が経つにつれて価値が上がる。過去の歴史を紐解けば一目瞭然だ」という考えを答弁で述べた。「ましてや国際大学だ。ここに集う若者は、青春を別府で過ごし、生涯の思い出を心に刻むだろう。母国に帰っても他国で働いても、彼らは、世界に別府を売り出す大いなる観光の使節団になる。今、別府を知らない人たちが増えている。観光地としての別府の危機なのだ。この大学誘致は、一〇年、二〇年後、いや二十一世紀のものすごい大きな別府の宝になると確信する」——市長はそ

う主張し続けた。

「議会が大騒ぎ」ということは市民の間にもデマや中傷のうわさがいっぱい、ということだった。この「不穏な空気」を吹き払い、APUの本当の姿を知ってもらうための取り組みを進めた。一〇〇〇人の聴衆を集めた『二十一世紀の別府を語ろうフォーラム』などが開催され、APUの開設備を支援し、別府市の教育文化水準の向上ならびに産業経済の発展に寄与することを目的とした立命館アジア太平洋大学設置期成同盟会（会長・友永文月別府商工会議所会頭、当時）も設立された。

アジア太平洋学とは

坂本APU初代学長は言う。「アジア太平洋学というものは、APUの教育を支える学問のバックグラウンドが必要だということと考えたんです。『アジア太平洋の時代』ということを念頭においてAPUを創りましたのでね、実際にアジア太平洋地域の人たちが集まって、アジア太平洋の時代を創る、責任がある。そのときの研究をどうまとめるか、ということであジア太平洋学というのを考えました。

アジア太平洋については、すでに研究している人がいっぱいいるじゃないかと言われる

かもしれませんが、APUの考えたアジア太平洋学の特色は、アジア太平洋から集まってくる人たちの手でアジア太平洋の学問を創ろうという考え方なんです。なぜそんなことを言うかというと、日本のアジア太平洋研究は日本人だけが集まって、悪い言い方をすればアメリカ経由かヨーロッパ経由で入ってくる情報をまとめてアジア太平洋を研究していると言う人もいて、アジア太平洋からダイレクトに情報を集めることを重視する必要があると考えました。そこで、アジア太平洋出身の人たちが集まって、自分たちの地域を発展させるための学問を実際に創る必要があるというのがAPUのアジア太平洋学なのです。だから、APUの場合、先生方も多国籍です。多国籍の人たちが集まって自分たちの地域を創ろうという学問なのです。

それが新しい二十一世紀のアジア太平洋地域を創ることになると思います。『アジア太平洋人による、アジア太平洋のための、アジア太平洋学』とくは呼んでいます」。

平松前知事は、こう語る。「大南総長が school of excellence とついでと言われた。excellence とは卓越した英知という意味でしょう。そしてこの大学は、アジア太平洋学の確立を使命としている、と。かねがね私は地域学ということに関心を持っていて、ヨーロッパがキリスト教をベースにEUという一つの政治・経済統合体になったんですが、ア



国際色豊かな授業風景

ジアの場合はいろんな宗教がありますから、宗教を中心にして一つにまとまることはできない。多様な文化、民族からなっているアジアを一つのまとまった文化圏にするためにはどういう勉強をしていったらいいのか。アジア学、あるいはアジア太平洋学という地域学を、私はアジアとのローカル外交をしていく中でいちばんに考えていたので、知事を辞めたらAPUの大学院に入って勉強して博士論文を取りたいと、どこかに書きました。最近日本貿易振興機構（ジェトロ）とかアジア経済研究所の人などがこの大学の先生になって、それぞれの地域の一村一品運動を通じて、それぞれの地域の特色、あるいは民族文化を含めた地域学の研究が進められています」。

アドバイザー・コミッティの設立へ

世のため、人のため、日本のための大学

新国際大学の設立をマスコミに発表して、特に地元別府で大きな反響を呼んでいた一九五五年、立命館の関係者は「留学生の募集」と並行して「企業による経済的支援」を求める仕事に入った。それがAPUの社会的支援組織であるアドバイザー・コミッティ（AC）の設立である。日本で初めて創られる国際学生の比率が五〇％の本格的国際大学は、日本企業による経済的支援、教育研究活動への支援、また卒業後の就職の支援がなくては成り立たなかった。

「当時、アメリカは留学生五〇万人と言われていました。その多くが親米になって帰る。日本の留学生は五万人、その多くが反日になって帰る、と言われていました。聞いて、腹



1996年5月にホテルオークラ（東京）で開かれたAC設立総会

が立ちましたね。なんで、このままにしているのか。新しい国際大学ではこれを変えねばならん。学んだ学生の八割が親日になる大学を創りたかった」

川本がこう言うように、APUは日本という国家が手懸けなければならない「国際化」の壮大な構想を持ち、使命を担っていた。ACの就任依頼には、概略、次のような趣旨でお話しし、賛同を得ることができた。

「アジア太平洋地域は、未開発の資源や人口や多様な文化を豊かに抱え、二十一世紀の世界経済の活力の源となることは、誰の目にも明らかです。何よりも大切なことは国際的に通用する人材を育成することです。その人材によって、アジア太平洋地域の潜在能力を引

き出すことは、日本国の役目であり、日本のためであり、企業のためであります」

「この事業は、世界のため、日本のため、ひいては企業のためになるものだという確信を関係者みんなが持っていた。その志の高さがあったから、資金や力をお願いするとき遠慮と恥じらいがなかった。志が高い」ということが頑張れる決定的要因になります」と川本は言う。

奨学金は、学生一人、一年に二五〇万円かかるとして四年間で一〇〇〇万円。長くお願いするわけではなく、開学してからふた周り、八年間だけ支えていたきたいというお願いをした。ときあたかもアジア経済危機が発生し、日本にもその影響は及んでいた。正攻法で企業の窓口を訪ねても「検討いたしましたがお受け致しかねます」と丁寧に断られるのがおちだろうと川本理事長は考えた。だからAC就任の依頼へ行く部下にゲキを飛ばした。「正面玄関から入ったらあかん。いいか、命がけやぞ。その会社が八階なら八階の窓を破って入れ、最上階にトップがおつたら、屋上の屋根を破って入れ」。

部下にはまるで奇術修業のような指示を出す一方で、自分は大阪県へ飛び、平松知事に「通産省出身なんだから、その豊かな人脈でどんどん紹介してください」と依頼。「平松知事がジェットロの畠山襄理事長（当時）のところへ頼みに行ってくれたおかげで、畠山理事

長から九州電力、中部電力、沖縄電力などの会長を紹介していただいた」。

こうして、ACの人脈がしだいに広がり始めたとき、「これ以上大きくするためには、組織を作らねばいけない」という声となっていた。ACはみんな日本では有名な経営者たちである。そのトップをお願いするとすれば、経団連の平岩外四名誉会長（当時）しかない、となった。しかし、平岩氏は当時七〇歳代後半、最初の訪問の際には「私は八〇歳になるまでに、すべての公的役職から引くべく整理し始めています。ご趣旨はまことに立派ですが、私が役をすることはご勘弁ください」と固く断られた。

では、どうするか。平岩名誉会長に承諾してもらえなければ、この組織の広がりはない、と川本理事長は強い危機感を抱いた。考えた末、平岩氏の詳しい経歴書を取り寄せて、つぶさに調べ直した。「一九一四年、愛知県常滑市に生まれる。……東京大学卒業……東京電力会長、第七代経団連会長」。よく知られている経歴の中で、川本理事長はある一行に目を留めた。「安岡正篤の門下生」、これだ、とひらめくものがあつた。安岡正篤は陽明学者で、門下生に日本の著名な政財界人がいる。安岡門下の秀才・住友生命の新井正明名誉会長（当時）のもとを訪ね、ことの次第を詳しく話した。「本来なら、日本国の総理大臣がなるべき役目です。ですから、ここに民間の総理大臣がぜひとも必要なのです。民間の

総理大臣は平岩外四さんしかおりません」。

川本理事長の口説き文句を聞いて新井氏は「よし、それで行こう」と、その場で平岩氏に電話してくれた。安岡正篤門下の先輩の要請には、平岩氏もとうとう折れて、「引き受けてくれるそうだ」。電話を置いた新井氏がほっとしたように笑った。

平松前知事によると、最初は国家資金の援助をひそかに打診したのだそうだ。「優秀な留学生をこの大学に入れるため、ODA（政府開発援助）から奨学金を出してもらうことはできないかと、文部省に非公式に聞いたけれど、ODAの金はアジア、アフリカなど開発地域に行き、道路や港湾などのインフラストラクチュアの整備、また現地に学校や病院を作る資金となるもので、各省ごとに枠が決まっていて一銭たりとも横に移動することはできない。文部省が今もらっているODAの交付金は主として国立大学に留学する外国人留学生の奨学金に充てられていて、地方の私学に交付金が使われた例はない、という答えでした。ある政治家にもお願いしたが、ODAの奨学金を受ける留学生の枠を広げることは難しいという返事でした。それなら一つ、こういった大学を創ることに理解を持っている経済界から奨学金を集めようということ考えたのでした。その取りまとめをする役には経団連の名誉会長平岩外四さんが適任だと私と川本さんが話し合ったのでした」。

平岩外四氏の果した貢献

平岩氏がACCの名誉委員に就任したことによって、ACCの規模はさらに全国的なものに拡大した（巻末のACC名簿参照）。一九九六年五月二三日、東京のホテルオークラで『アドバイザリー・コミッティ設立総会』が開催された。平松知事の呼びかけで日本銀行の三重野康元総裁、キヤノンの御手洗富士夫代表取締役社長、東芝の佐藤文夫代表取締役社長、日本アイ・ビー・エムの椎名武雄代表取締役会長なども、このメンバーに加わっていた。日本を代表するそうそうたる顔触れが揃ったこの席で、名誉委員五名、アンバサダーメンバー五名、委員六四名によってACCは正式発足した。

名誉委員に就任した平岩氏は次のように語った。「かつてフルブライト資金というものがあって、戦後日本の大学からアメリカの大学に留学する人たちに奨学金が与えられた。その資金で学んだ人たちが日本に帰ってきて戦後日本復興の旗振り役となり、経済界、官界を牽引していったことは有名である。そのような意味で国際学生と日本の学生が半数ずつの国際大学を創るという、まさに国がやるべきことを一私学と自治体が果たすことは大変大きな意義がある。これについてODAの資金が出ないということであれば、われわれ

財界から奨学金を拠出することについてよろしくご協力をお願いしたい」。

会場では平岩名誉委員の意見に積極的に賛成する意見が出された。元文部省事務次官を務められた木田宏氏からも「日本の大学の国際化には時間がかかるだろう。この大学の設立は英断だが、長い目で支援していくようお願いしたい」旨の発言もあり、立命館関係者も大分県関係者も深く感謝するとともに、ホツと安堵あんどもしたのだった。

基金にお金を置いておくと金利が出るという時代ではなくなっていた。毎年毎年の資金がなければ奨学金は運営できない。ACの委員には、自らの資金の他にも、それぞれ各銀行の頭取に働きかけてお金を出してもらうなど、さまざまに努力していただいた。

ACには、その後、各国の元首、駐日大使を始め、各界を代表するそうそうたる顔触れが二五二名を数えた。ACを始めとして、奨学金のための寄付の総額は四一億円にのぼった。九州電力の大野茂代表取締役会長は、こうした大学が東京や大阪といった大都市でなく、九州・別府の地に開設されることについて「このような大学が九州にできることを大変光栄に思います」と述べ、多額の寄付を寄せられた。開学後も授業への講師の派遣、インターンシップの受け入れなどの支援を得ている。

「一大学にこれだけの支援組織ができたことは過去に例がないのではないのでしょうか。立

命館アジア太平洋大学へのこれ程までのご支援は、この構想が示した二十一世紀に求められる新しい高等教育の有り様に対するものであり、まさに『現代版フルブライト』と申せます」(樋口廣太郎アサヒビール名誉会長 二〇〇〇年春の『プログレスレポート』より)(注・この項に登場する方々の役職名はすべて当時のもの)

世界的なアカデミック・アドバイザー

ACメンバーと並んで、APUのコンセプトに賛同して協力してくれた、^々学術界の恩人^々アカデミック・アドバイザーたちがいる。

坂本は言う。「ノーベル賞受賞者では、経済学賞を受賞されたアマルティア・セン氏、ペンシルヴァニア大学のローレンス・クライン氏がおられます。二〇〇八年にノーベル物理学賞を受けられたシカゴ大学の南部陽一郎氏も早くから加わっていただいています。アジアではノーベル化学賞を受賞された台湾の中央研究院の李遠哲氏りえんてつもかなり早い頃からいろいろご協力いただきました。

アドバイザーに入っていないけれど、APUに関心を持って熱心な支援をしてくださったのは、二〇〇五年に亡くなられた経営学者ピーター・ドラッカー氏です。APUにメッ

セージをいただきましたが、それは珍しいことなんです。あの方は個別組織に関わることはしないことを自分の生き方にしておられたので、アドバイザーには入られませんでした。が、メッセージを贈りたいということで、僕が直接ご自宅を訪ねさせていただきました。ジャパン・アズ・ナンバーワン[®]のエズラ・ボーゲル氏もAPUにとっても関心を持ってくださって、わざわざAPUを見に来てくださいました。

日本では、ジャーナリストの方々が関心を持ってくださって、現在朝日新聞の主筆をしておられる船橋洋一氏が開学前の早い時期から協力してくださっています。財団法人日本総合研究所会長で三井物産戦略研究所所長の寺島実郎氏もAPUに強い関心を持っておられて、APUのようなものを研究レベルで創りたいということで、API（アジア太平洋研究所）を早くから準備されています。それから立命館大学の客員教授をされていた筑紫哲也氏にも、いろんな面で助けていただきました」。

天正遣欧少年使節団が出発した浜辺

世界中から訪れるお客さんを案内してAPUの丘に立つとき、平松前知事が必ず持ち出す話がある。それは「ごらんなさい、ここから大分市の海岸が見えるでしょう。日本で初

めでの留学生が、あの海から出発したんですよ」ということ。

中世、戦国大名大友宗麟はキリシタン大名として積極的な海外貿易を行っていた。そして一五八二（天正一〇）年、ローマへ向けて少年使節が派遣される。大友宗麟の援助を受けた二人の少年は沖の浜の港から出発したと言われている。カトリック信者である作家の遠藤周作氏は大友宗麟の物語『王の挽歌』を書き、それはNHKテレビでドラマ化されている。平松前知事は次のように述べている。

「遠藤周作さんは、この海岸から日本で初めての留学生が出発したのだと教えてくれました。その別府湾を見下ろす十文字原の丘の上に、留学生が集う国際大学ができていることを知ったら、遠藤さんは、神のお導きだと言うでしょう」

常識的には「とてもムリ」と言われたこの国際大学の構想がどうやって生まれたのか。当初の状況を川本はこう回想している。——時は一九九四年四月。一大プロジェクトであったBKCの開設と、理工学部拡充移転を実現させて、立命館の関係者はホッと一息ついたところだった。しかし、休むことなく次の事業に取りかかったのだ。

川本は、そのときの勢いを山登りにたとえて話す。

「立命館の関係者は、それまでの第三次長期計画で国際関係学部を創り、附属高校の校地移転を実現し、それが成功したエネルギーで第四次長期計画のBKC開設という立命館の歴史上最大の事業に取りかかったんです。困難な事業のプロセスでは、もう二度とこういうことはするまい」と思うことがあります。高い山に登ろうとして、途中できつくなつて、でも戻るわけにはいかない、登るしかない、そういうとき、もう二度と山になんか登らんぞ」と思う。ところが、そんな死ぬような思いをして頂上に着くと、目の下に雲海が広がり、なんと晴れ晴れして爽やかなんだらう。山に登らなければこの気分は味わえない、と思う。そして二カ月も経つとまた登りたくなる。

大きな事業というのは、そういうものなんです。努力、忍耐、苦勞をすればするほど充実感が大きい。その充実感で次の課題に挑もうとするのです。ほくだけじゃない、立命館の人たちみんながそうでした。そのとき、立命館には、困難な事業を成功させた後の、達成感・充実感のエネルギーが満ちていたんです」

第2章

あらゆる挑戦



世界中から集まったAPUの学生たち

その日誕生日だった教員が授業の始まりに、冗談を言った。

「今日がぼくの二四回目の誕生日です」

日本の大学ならシラーツとするか、「さぶつ」と言われるはずなのに、APUの教室は爆笑！

二四回目というのは冗談だが、誕生日であることはホント。

ここで、みんながおめでとうと握手しにくる。肩をたたく。

そしてハッピーバースデーを歌い始めた。

一五〇人の大合唱に、教員は「ここで泣いたら負ける」と歯を食いしばった。

あの歳月、立命館の教職員が懸命に集めた学生たちが、今ここにいる。

いよいよ、具体化に向けた準備の話を始めよう。

新大学開設体制整う

一九九六年六月、新大学設置委員会が発足し、一〇月には新大学の名称が「立命館アジア太平洋大学（APU）」に決まった。さらに、翌年九七年の一月には当時の坂本和一立命館副総長が初代学長（以降、学長とする）に就任すること、また二名の副学長（教学・学生担当⇨慈道裕治、総務・財務担当⇨伊藤昭）も決まり、新しい大学の責任指導体制が確立した。また、同年四月一日には新大学開設準備室が発足した。いよいよ、具体化に向けた準備が始まる。

新大学開設準備室は、一つのフロアで全教職員が業務を行えるようにした。坂本学長の執務室も壁を隔ててすぐ隣という状況であり、日々、坂本学長の「ちよ、ちよっと」の呼び出しを受け、教職員はその壁を行ったり来たりしていた。

また、坂本学長は朝が早い。教職員が机の上に取り組み途中の資料を置いておくと、フロアの散歩が日課の坂本学長の目にとまる。そして、出勤してすぐ「ちよ、ちよっと」の声がかかる。このように新大学開設準備室では、意思疎通をタイムリーに行いながら、誰がどのポジションかなどに関係なく全員が一丸となつて業務に邁進まいしんしていた。

学生を確保せよ

アジア経済の危機到来

「誰が聞いてもムリな話」だった新国際大学が、なぜ奇跡のように誕生したのか。そして、なぜ成功したのか。その背景には、すべての関係者が一二〇%燃えたという、情熱の量があった。

川本は言う。「ぼくに言わせると、大阪や東京でAPUを創っていたら、おそらく成功しなかったでしょう。そんなに大した努力をしなくてもできる、という安心感があって、それほど教職員が燃えなかったと思います。ところが場所は九州、油断したら危ない、とみんな必死になって燃えたんです。これはね、事業を行うときの典型的事例だと思います。客観的条件は厳しくても、みなが本気になって燃えたら、その条件を克服することができ

るという見事な事例です」。

「本気で燃える」立命館の関係者たちは二つの大きな動きを始めていた。その一つは前述のACへの就任依頼を始めとする奨学金の確保であり、もう一つは毎年四〇〇名の国際学生（APUでは留学生を国際学生と言う）を確保するための活動であった。国際学生受け入れについてはすでに五〇カ国・地域から毎年四〇〇名を受け入れるという基本政策を決めていた。それを確実なものとする活動が開始された。

九五年、九六年には訪問団を結成し、アジアを中心に各国の政府や教育機関、企業、民間国際交流団体などへ事前調査の活動を進めた。APU設立の基本方針を定めた後は、国際交流基金、ジェトロや日本人商工会、立命館の卒業生など、多彩な支援と協力を得て、APUをアピールした。しかし、九七年夏、タイの通貨価値が下落、それをきっかけに東アジア全体に深刻な経済危機が広がった。この出来事は、二十一世紀にはAPUのような大学が必ず必要になるという、いっそう強固な確信をもたらすとともに、不安もまた大きくした。「毎年四〇〇名の国際学生を受け入れるなんて本当にできるのか」「経済危機で事態は深刻だ。APUは本当にできるのか」。

国際学生確保のために、坂本学長の下に結成された「留学生確保推進本部」では、海外

訪問の報告やそこから得られたさまざまなアイデアが出され、とにかく行動するための指針が作られていった。坂本学長の口癖は、「目標が大きかったら分割せよ」だった。四〇〇名を一気にやろうとするから先が見えない。「一校から一名、それを四〇〇校に拡大する」。

中国や韓国などの最重点グループ、それに続く地域、大使館の協力を依頼する地域など、グループ分けと国別目標が決められていった。中国や韓国から確保すべき国際学生数は三〇名以上とされた。

立命館には教員と職員とが協力し合う「教職協働」という、改革の中で築かれてきた組織風土があった。教員と課長以上の職員がチームを組んで、各地に出かけていった。九七年の夏の海外活動には四六名の教職員が参加し、延べ日数二一〇日間、訪問件数四〇二機関、一三カ国・地域に及んだ。中にはこのとき初めてパスポートを取得した者もいた。

みんな迷いを決意に変えてアジアの諸国へ出かけていった。このとき初めて学生推薦協定の締結という確実な成果を上げた。

教職員のグループは二一グループに及び、年内に二〇〇以上の中等教育機関から国際学生推薦に関する協力表明を得るに至った。この「大交渉団」は翌九八年春以降、アジア以

外の国にも対象を広げて幾度か繰り返された。

平松知事の力添えも大きかった。坂本学長にマレーシアのマハティール首相やフィリピンのラモス大統領などアジアの首脳クラス、中国政界の大立者、汪道涵^{おうどうかん}元上海市長や教育部の要人などを次々と紹介して、国際学生の派遣を要請した。

大学間協定の拡大

国際学生確保のための基本方針は、大学間協定の締結と高校からの学生推薦協定に置かれた。その中でも先行したのが、大学間協定の締結であった。このことは立命館大学の国際化を促進するとともに、APU構想の認知をも促すものであった。協定書には、APUが開学した後は、協定がAPUにも及ぶことが明記されていた。

一九九六年一二月には立命館大学で六カ国一一大学・研究機関との合同調印式が行われた。調印式には、インドネシア大学やマラヤ大学、清華大学や吉林大学、ウェリントン・ビクトリア大学など、地域の代表的な大学から学長や副学長が出席して行われた。このとき、イスラム系の大学から、食事についてイスラムへの配慮の注文が出された。考えてみれば当然の要請であった。担当者はいろいろ検討したが、結局、ビュッフェ方式として、

その中に、肉以外の食事を揃えることで対処したという。おそらく立命館としては公式行事での初めての経験だったのではないか。このことはAPU開学に生きた。

これを契機に、北京大学やソウル大学などとの協定も進み、APUが発足する段階では二四カ国・地域、九五大学・研究機関に拡大している。

協定の締結は大学間に限らなかった。九八年には、ベトナム教育訓練省との間で学術交流に関する協力協定が交わされている。調印式は、立命館大学でヒエン教育訓練省副大臣を迎えて行われた。この協定をもとに、ベトナムで学生募集が行われ、初年度に三二人のベトナム人学生が入学している。現在では、在学生数二二二人になっている（二四五頁の表参照）。

多様なネットワークの拡大に寄与したものに国際シンポジウムの開催がある。学生募集には直結はしなかったが、アジア太平洋学の構築を目指すAPUの構想を広め、多彩な人脈が広がっていった。その最初は、九七年に韓国で開かれた「二十一世紀における日本と韓国の役割」であった。同じ年、別府で「アジア太平洋のエポック」が開かれている。

文部省でしぼられた

APU誕生までにはさまざまなドラマが展開されたのだが、九八年九月、坂本学長たち立命館の関係者は事前相談に文部省（現・文部科学省）を訪ねて相当きついことを言われていた。大学を新設するには文部省の認可がいる。少子化が始まっていた九〇年代半ば、新しい大学を創る認可はなかなか下りそうになかった。「相当に切れ味のいい計画を作って持っていないと文部省の認可は得られないだろう」ということで立命館学園内の意見も一致し、APUのまったく斬新な計画が動き始めたという経過があった。

その斬新なコンセプトは「三つの五〇」に集約されている。「国際学生五〇%」「外国籍教員五〇%」「五〇カ国以上から国際学生を迎える」というものだ。一学年八〇〇人の学生でその五〇%となると四〇〇人が国際学生である。

「われわれが文部省を訪ねたときの面談記録が残っているんですが、今どき立命館は何を考えているんですか、というような、きつい言い方をされています」。当時学部認可というのは二〇〇人が限度で、それも学生数を増やさないで、今ある学生定員を新学部に移り替えて認めてもらうのが原則であった。そんな中での認可申請であった。

「今どき純増で八〇〇人、しかも留学生四〇〇人とは何を考えているんですか。今、東大の留学生が一六〇〇人です。この新設大学が一学年四〇〇〇人の留学生を受け入れるという

ことであれば、四年間で東大と同じ数になるということですね」と言われた。

「そうです」と答えると、「裏付けを示してください」と文部省の担当者は言った。国際学生が四〇〇人、本当に集まるのだという裏付けである。「これはわれわれが言っているのではなく、設置委員会から必ず求められます。それに答えられなかったら認可は下りませんよ」。許可が下りないどころか、構想自体が失敗となる。集めるしかなかったのだ。

「よく来てくれた」——国際学生に感謝

一九九九年一月。十文字原のキャンパス予定地。十文字原の冷たい風に吹きさらされながら、韓国から視察に来た高校の先生と父母に対して新入学説明会が行われていた。確かなものは何もなかった。キャンパスも、大学設立の認可も、学生がはたして集まるのかどうかも。この視察団に加わっていた高校生、金容賛キムヨンチャンは大人たちのやりとりを聞きながら、こう思ったという。「たとえ誰が反対してもぼくはこの学校に入ろう。ここはぼくのために創られる大学だ」。

金容賛のようにAPUは自分のために創られると思った一期生は多かった。「韓国の関



第1回の入学式風景

係者の方たちもよく見学に見えましたが、建物ができていないことと、文部省の認可が下りていないことをみんな不安がつてね、本当に認可は下りるのか、まだ下りていないじゃないかと強く言われました。だから、学生が来てくれるかどうかは最後まで不安でした。

日本の学生は、どの大学も同様に、合格していても来てくれるかどうか分からないところがありますけれど、外国の諸君はもっと分からないわけです。遠いところから、インドやネパール、ジンバブエからも来るというのでしょうか。約束はしていても、本当に来てくれるだろうか、とずっと不安でした。

開学を控えた三月になって高速道路のバス停からキャリアバッグを引っ張って、あるい

は空港からバスに乗って続々と寮へ入ってくる学生諸君の姿が見えて、ようやく、これはいけるかな、と思い始めました。でも直前まで不安でしたよ。だからAPU開設で何にいちばん感激したかという、入学式に学生がみんな揃ったということ。これは掛け値なしに、最大の感激でしたね」。坂本学長の感激には、当事者だけが知るそれまでの事情があった。

「APUはAC、地元の方々、いろんな人たちにお世話になってきましたが、それと並んで、学長としては最初の頃の学生にお世話になったという思いが強いですね」

特に一期生はただの学生ではなかった。自分たちも一緒になってこの大学を創ったんだ、という意識を持っているから、誇り高く、責任感が強く、態度がデカイと言われる。日本人学生で言えば、親や先生の反対を押し切って、我を張ってAPUに入ったのだから、就職も自分の責任でやり通すという気概を持っていた。坂本に言わせれば「入学したときすでに大人になっていた」のだ。

明礬^{みょうたん}から上がるように——日本人学生の確保、親を説得せよ

十文字原の丘に上がる道は、二通りある。明礬温泉からと、亀川の町からと。明礬温泉

は、江戸時代には染料や皮のなめしに使う明礬の日本一の産地だったから道は古くから開けていたし、そこから先は自衛隊の演習場につながる広い道が造られている。ところが亀川から十文字原へは、くねくねと曲がりながら登る山道しかなかった。

坂本学長は、見学者を案内するとき「道は明礬から上がりなさいよ」とスタッフに念押ししていた。「亀川からだ」と笹の中をかきわけて行くから、高校生はビビるで」。

実際、十文字原の丘の上には、草原が広がるだけで本当に何もなかった。立命館の附属高校の生徒や父母たちを見学に誘ったのだが、いくら「予定地」と言っても笹をかき分けてたどり着くのでは不安が増すだろうと思ったのだ。それでなくとも、京都や大阪の都市で育った高校生にとっては、九州は大変遠い場所なのだから。

立命館附属高校の場合でも、受験生たちはAPUのコンセプトにほれ込んでぜひAPUに入学したいと言っても、親御さんや先生はほとんどが反対した。遠い九州の、それも新設の大学より、立命館大学に行け、BKCもあるじゃないか、APUへ行って就職ができるのか、と。

坂本は言う。「APUへ行きたかった高校生のうち一〇人に八人はそういう反対であきらめていると僕は思いますよ。だから一期生や二期生に会うと、君ら、神様みたいなも

んや」ってほくは今でも言いますよ。国内からも国外からもよく来てくれた。学生が来てくれなかったら大学はできないんですから」。

二言語教育への挑戦

日本で最初のシステム

A P U の教育教學のコンセプト作りは、すべてが、初めての試みだったから、実に長い時間をかけて検討されている。

A P U の設立は立命館の第五次長期計画の中でも最大の事業だった。国際学生五〇％の大学を創り上げるためには、越えなければならぬ壁が三つあると言われていた。「日本語の壁」「経済的格差」「住宅問題」だ。この三つの壁をどうクリアしていくかが、A P U の中身を組み立てていく教職員にとっての重要なポイントとなった。また、このポイント

が文部省の設置認可を受けるときの説明としても必要である。中身作りと文部省認可の取り組みとが連動して行われていった。中でも、「日本語の壁」を低くするために考えられた日・英二言語教育は日本のどの大学も実施していないシステムである。

A P U のコンセプトが作られ始めた頃、それまでの日本に来ていた留学生の八割は中国、韓国、台湾の出身者で占められていた。この構造を大きく変えなければ A P U の多文化キヤンパスは実現しない。国の数を思い切って増やすためには、英語で授業を受けられるというコンセプトは不可欠だ、ということが委員会で話し合われた。英語で授業をするということは構想の初期段階から決まっていた。しかし、九五年九月に大分県、別府市、立命館の三者協定が発表されたときも、まだ教育言語の英語をどうするかという明確な結論は出されていなかった。

日本の企業が求める、アジア太平洋地域の言語に精通し、マネジメントのできる人材を育てるためには「授業は英語で行う」という見解もあったが、委員会は「英語だけでは国際学生は素通りするだろう」と考えていた。英語だけの授業ならアメリカ、オーストラリア、イギリスの大学の方が良い。そこで、日本に留学するメリットは何かということが検討された。やはり「四年間いる間に日本語もきっちり習得できる」ということでプログラ

ムを組むべきだ、と。日本語は外すべきではない。

それは単に日本語という科目を受ければいいということではなく、卒業するためには語学としての日本語と日本語の専門科目を受講し、社会に出て日本語で仕事ができるというレベルにまで持っていかなばならないという意見が、委員会の大きな流れになった。もちろん、日本人学生も同じように卒業するときバイリンガルとなれるように英語力を高める、ということだった。

日本の経済界が、日本の社会が、国際学生を受け入れて奨学金を出すとなったとき、日本語運用能力は重要だと考えられた。こうして日本語と英語の二言語で授業を行うことを正式に決定したのは九七年五月の新大学設置委員会第二次報告においてだった。この決定を軸にどうカリキュラムを作っていくかがその後の新大学設置委員会の作業になっていく。まず、この作業が困難を極めたのは、二言語で授業をしている大学は日本中どこにもないし、アメリカにもないという前例のなさだった。かろうじてカナダのケベック州にあるマギル大学が、フランス語圏にあつて英語で教育していた。マギル大学の教授が来日したとき立命館に招いて研究会を開いたが、結果は、参考になるどころか、いかに母国語以外の言語を使ってキャンパスの生活を維持することが大変かを知り、肩にとっしりと重い荷

物を背負った気分にはさせられた。フランス語と英語でもそんなに大変なのか、と。「翻訳センターは当然用意しますよね？」というその教授の言葉に、聞いた教員は、翻訳センターに必要な人材と巨費を考えて、もう、卒倒したと笑う。

英語で受け入れ、言語の壁を低くすることで、結果的に国の数が広がった。それまでの留学生にとっては、日本の大学に入学するためには日本語学校に二年間ほど通い、その後日本の大学に入学するというのが一般的であったが、その時間と経費が短縮される。入学後は日本社会で働けるレベルの日本語力も教育するという二言語教育を武器に、英語でも授業をしている各国の高校を狙って行くことにしたのだった。

二言語教育はシンガポールで、最終決断

五〇％の国際学生を受け入れるということは、これまでの日本の大学が行っているような日本語学校を出た、日本語の分かる留学生だけを入学させるのでは到底実現できない。日本語がまったくできなくても、英語ができる学生を入れる。そのためには、英語で授業をする教員を揃えなくてはならない。その数五〇％。これが二言語教育である。

坂本は言う。「二言語教育ということは、観念的には早い時期から考えられていたんで

すよ。英語による教育の強化は当然しなくてはならないことではしたが、日本語と英語をまったく並行した二チャンネルにするというのは手間のかかることだったので、学長に予定されていたほうは決断をしかねていたんですね。ほかの中でその決断がはっきりついたのは、九七年春にシンガポールへ国際交流の約束を取り付けに行ったときでした」。

シンガポール国立大学というのはアジアでも有数の有力大学で、日本風に言えば気位が高い大学として知られている。シンガポールは英語社会である。シンガポール国立大学の学長は、訪問した坂本学長にのっけからこう言った。「シンガポールの若者で、日本に留学する学生はいないですよ。なぜかと言うと、日本では授業はみな日本語でしょう。シンガポールは英語社会だから、若者が留学するとすればイギリスやアメリカやカナダに行きます。日本に留学する若者はゼロとは言わないまでも日本に行つて勉強するということはほとんど考えないですよ」。

言いたいこと言わはるなあ、と坂本学長が思っていると、シンガポール大学の学長はその勢いで、「シンガポール国立大学の学生はアメリカやヨーロッパに留学するとみんな優等生、トップクラスです。ところが日本の大学から留学生が来ているけど、単位が取れない、なぜなら英語ができないからです」。

坂本学長はここで決断するしかなかった。日本語での授業をこのように頭から否定されては、英語で授業すると言わねば話にならない。坂本学長は初めて外部の人に向かって二言語教育を宣言した。

「私たちが創ろうとしている大学は二言語教育です。日本語でも英語でも授業を受けられるので、シンガポールの若者に来てもらう条件は十分充たされると思います」

そう言いながら、心の中で、あ、われわれの大学は二言語でやらないと話にならない、と確認していた。日本語だけなら、中国や韓国や台湾で日本語を学んでいる子は来てくれるかもしれないけれど、もっと南の方、例えばベトナムやタイやインドネシアなどはみな英語で教育を受けている、日本語を学んだ子だけを対象にすれば、極端に層が薄くなる。シンガポールでこれだけ言われたんだからメンツをかけてもやらなあかん、坂本学長はこの瞬間でようやく迷いを捨てたという。

ところで、シンガポール国立大学はなかなか交流協定を結んでくれなかった。日本の大学で交流協定を結んでいるのは東京大学だけだ、京都大学とも結んでいない、いわんやその他の大学とは結ばない、という答えだった。この難関のシンガポールで、切り口を開いてくれた恩人がトミー・コウ氏だった。シンガポールの外務大臣や国連大使を務めた有力

者。シンガポール大学の教授でもあるし、九二年の地球サミットの本会議議長を務めた環境問題では世界的に知られた存在だ。坂本学長に、トミー・コウ氏を紹介してくれたのは国連事務次長の明石康氏と、シンガポールの駐日大使だった。

トミー・コウ氏がシンガポールの人脈を次々と紹介してくれた。その結果、英語で授業するAPUなら交流協定を結びましょうということになったのだった。

「二言語教育を採用したことで、国際学生の層が変わったと思います。APUは国際学生が多い、多国籍であると言いますが、その重要な背景の一つは英語の問題なんです。英語の授業に踏み切らなかつたら、いくら募集に努力しても今のようには来なかつたはず。英語の授業をすることで、アメリカやオーストラリアに留学するのと同等の選択肢に入ってくるのです。選択肢に入ることが国際学生を獲得する土俵や」とほくはいつも言っています。日本の大学でこの土俵に上がっているのはAPUだけです。優秀な学部生をあれだけ多人数吸収できているのは他の大学にないことです」

二言語教育の効果として、面白い特徴も現れている。上海、北京などからも、英語でトレーニングを受けてきた学生が入学してくる。それらの学生はAPUに入ってから授業やキャンパスで身につける日本語の習得がとても早いという。日本の企業に就職したとき、

日本語がうまいので企業の人みんな驚くのだそう。」「この方式を取れば、留学生が事前に日本語学校で二年間も勉強するよりずっと効率がいいのです」と坂本は言う。

多文化キャンパスの実現

二言語教育の採用によりAPUは日本の大学教育では空前の多文化キャンパスを出現させた。学生の国籍が八〇カ国以上になったという点では画期的な多文化キャンパスである。坂本は、「多文化キャンパスという考えの発端は、(第1章に書かれた)平松前知事とのやりとりがきっかけだ」と言う。自分たちの議論や思いの中にあったことだが、「ではどうという大学なら創る気があるのですか」と問われたとき、国際学生五〇%がとっさに口に出たのだと。国際教育について話し合い、議論し合っていくうちにだんだんイメージとして形作られて来たものがそれだった。それまでの日本の学生の国際教育といえば英語を教えるとか、国際関係学科を創るとか、国際関係科目を創るとかいうレベルで終わっていた。「そんなやなしに、キャンパスまるごと国際化するという案はどうですか」「おおッ、それは画期的な手法ですね。できますよ、国際学生を半数入れたらできます。キャンパスに国際学生がいっぱいいて、その中に日本人学生もいて、そうしたらキャン

パスが訓練の場です。キャンパスで鍛えることができる」

「それが国際化教育の原点でしょう」。これが発想の出発点だった。

教育・教学のコンセプト作りは、手探りの闘い

設置する学部を選択

どのような学部を設置するかについては構想段階から種々の計画が出されていた。地域研究を重視するアジア太平洋学が必要であるということとは最初からの基本課題であり、それをどのような学部構成で実現するのかが問われていた。国際学生の希望からすれば日本で理工系を学びたいという要望が高いだろうということは想像できたが、私学の財政的条件として最初に理工系の学部を設置することにはムリがあった。おのずと文系学部として構想することになった。

アジア太平洋地域の海を通じた交流や社会的、文化的多様性を教育・研究し、未来創造的に問題解決を展望できる学部構想として、国際社会学系学部とアジアを中心とする地域における企業経営を扱う学部としてマネジメント系学部の二学部構想となったのである。

では、先生の確保をどうするか。一学年八〇〇人の学生、特に日本語能力ゼロで入ってくる国際学生に日本語を教えて、少なくとも二年間で専門科目を受けるだけの日本語能力をつけさせようとする、言語教育に時間と力を割かなければならない。そこで言語教育科目を中心に、契約期間のある先生、[＊]常勤講師[＊]を英語二〇名、日本語二〇名の計四〇名任用した。専門や基礎科目を担当する教員の責任コマ数は五コマだったのを、常勤の講師には一〇コマ持つてもらった。それで言語教育に対する体制は固まった。こういうことで、開学のときは全体で六六名の教員体制で出発した。

二言語教育ということは、教養科目は学部が二つあるので、同一名称の科目を英英、日日で開く。専門科目はそれぞれの学部で英語・日本語で開く。これを六六人の教員数で行おうとすると、それほど多様なメニューは出せない。提供科目数を思い切って精選した。困難を極めたのは、英語と日本語の両方で授業を行うことができる人材の確保だった。

外国から来るほとんどの先生は日本語ができない。日本人で英語が堪能な先生でも、英語

が堪能だということと英語で授業をするということとはまったく違ってくる。例えば、北米に一〇年くらいいたような人なら英語で授業ができるが、アメリカで学位を取ったとしても英語で授業はできないという厳しい現実があった。

日英両言語で授業をするということは、相当な特殊能力だということが分かった。そういう優れた言語能力を持ち、かつ専門性もある教員スタッフに来てもらわねばならない。しかも、まだ存在していない大学に来てくださいというのは、かなり難しい課題だった。

時間割Ⅱ科目配置はまるでガラス細工

他の大学と違うAPUの難しさに、年二回の入学があるという入学時期の問題もあった。四月と九月のどちらに入っても同じように勉強ができるように、入学時期に合わせた開講の仕方を考えねばならない。それをクリアした時間割Ⅱ科目配置を作るのは、「まるでガラス細工のようだった」と担当者は言う。

国際学生は九月に入学する者が多いから、九月に開講する基礎教育科目は英語開講中心がいいということで、英語の基礎教育科目は秋に。日本人は四月に入学するので日本語開講科目は春に。かつ、専門や基礎科目の先生の通年五コマとは、前期五コマ、後期五コマ

であり、常勤の先生も前期後期で各一〇コマをこなさなければならない。入学の時期で学生の科目の受講状況が変わるので、先生の持ちコマのバランスが多少悪くなるときがある。海外から来た先生は、それをなかなか理解してくれない。そのバランスを取るのが「ガラス細工のよう」であった。

しかも国際学生の入学は九月が多いとはいえ、春に入学してくる学生もいる。そうすると春から始まる国際学生、秋から始まる日本人学生も一定の系統履修が取れるようにしなければならぬ。「日英の二言語」「四月と九月」「先生方の理解度」という三テーマの難問が立ちはだかった。

さて、日本の大学の授業料は定額で、例えば年額一〇〇万円なら一〇〇万円と一律に決まっている。そして一年生は例えば五〇単位まで受講可能、という決め方になっている。

A P Uが導入した「単位制授業料」は、日本では唯一、上智大学が採用していたので、視察に行つて導入に踏み切った。単位制授業料の制度は、授業料の半分は固定でみんな一律に払うが、それ以外は学生が取りたい単位を二〇単位とか三〇単位とか個々に登録してその単位数に応じて授業料を払うという仕組みだ。この単位制授業料によって、教室の規模も決まっていた。

というのは、学生は単位を落としたときの「保険」などかけないから、卒業に必要なぎりぎりの単位を登録して勝負してくる。そのため授業に一単位も落とせないという緊張感が生じる。そういう期待に応える密度の濃い授業を行うためには、教室の規模を小さく、マックスでも二五〇人の講義と限定した。

次に生まれた問題は、一つの科目の希望者が定員からあふれ出た場合にどうするかということで、これは抽選と決めていた。日本では抽選は公平な手段だと認められている。ところがこの「抽選」に国際学生たちが猛然と抗議してきた。

「勉強したい者、成績が良い者がどうして授業を受けられないのか」「成績優秀の者から先に受講登録すべきだ」「抽選？ 運は関係ない」などなど。国際学生からの強烈なクレームによって、成績優秀者の受講登録を優先し、それが終わってから次の希望者、また次の希望者と三段階くらいに分けて選ぶことにした。受講登録はコンピューターで行っていたことから、登録のシステムを変更しなければならず、数百万円の投資を余儀なくされた。

成績評価に「何回でも来る」国際学生のクレーム

国際学生のクレームの強烈さは、APUの教職員の予想をはるかに上回るものだった。

「理解を得る」ということと「納得を得る」ということとは違うということをAPUで学んだ」と担当職員は言う。例えば、奨学金がほしいというとき、成績が満たないからもらえないということは「理解」できても、もらえないことは「納得」しない。自分がどんなに奨学金を必要としているか、ということを言い、学長に直接掛け合いに行ったりする。教員に対する成績のクレームも、試験に落ちた、落ちないの問題だけではなかった。

「なぜ私はBなのか」「なぜAなのか」と問いただし始めたら、何時間でも何回でも、「納得するまで来る」のが国際学生。このため学生が授業を選択するときの授業内容を説明したシラバスには、『成績評価方法』が細かく書かれるようになった。出席率は評価のうちの何%、中間レポート何%、期末試験は何%、などと、細分化している。

ただし、何でも大学側に聞いてくるし言ってくるという最初の一年のクレームや質問の量は、二年目から激減した。それは、二年目からは先輩ができたので、学生どうしで縦横に教え合うからだった。草創期の四年までは、毎年状況が変わって昨年にはなかった環境が出現し、大変だが常にリフレッシュしていた。安定はしていないが、活力に満ちていた。しかし、国際学生たちの反応は、他でも日本人教員の常識をくつがえすことが多かった。試験以外のレポートを前期に五回くらい書かせようと考えていた教員は、学生が提出した

分厚いレポートに満足して、暇なときにゆっくり読もうと考えていた。ところが次の週の授業の終わりに学生たちに取り囲まれて、「先生、レポートは読んだら評価を書いて返してくださいね。勉強に使うんですから、なるべく早くね」と言われた。日本の大学では学生のレポートは返さない。ところが国際的には読んで評価して返さなくてはならないのだと判明し、おまけに翌週、評価をして渡すと「なぜAなのか」「評価のコメントが書かれていない」などとそれぞれが主張してなかなか引き下がらない。レポートはつくづく大変だと思ひ知らされた。

国際学生は成績評価によって奨学金を打ち切られたりするから、懸命に食い下がる。ある教員がCの評価を与えたインドの学生は、「なんでCなのか」と抗議にきた。理由を説明しても日本人学生のように「分かりました」と引き下がることなく、とにかく食い下がる。しまいには自分の父が心臓発作で倒れて仕送りはできないのだと言うので、そんなことは成績に関係ないと突っぱねた。学生はドアを荒々しく開けて出て行ったから、追いかけて「私は君のために三〇分も使ったんだ。ありがとうと言いなさい」と言うと、しぶしぶ、サンキューと言って去った。

教員は長い教員生活でそんな風に怒ったことがなかったので、あの学生、この次会った

ら睨^{にら}みつけてやろうかと思っていたが、廊下ですれ違ふと学生は何事もなかったかのよう
に「グッモーニング・サー」と言った。教員もにつこり笑って応えた。言うときは言うけ
れど、それは喧嘩じゃないという多文化環境に、教員もしだいに馴れていった。

最初のうちAPUの教員がとまどったことの一つに、「目を合わせる」ことの意味があ
った。授業中、国際学生と目が合ったら必ず手を挙げる。指すと、大したことは言わな
いが、海外の授業では目が合ったら何か発言しなければいけないのだと理解した。授業
をスムーズに進めるには、なるべく学生と目を合わせないことだった。

教室で多文化交流Ⅱ「アジア太平洋地域理解」演習

二言語教育ではあるが、一回生のとき国際学生は日本語を学び、日本人学生は英語を学
ぶ。基礎教育科目も入学したときの言語基準で受けられるようにしているので、例えば歴
史の授業の場合、日本人は日本語開講を、国際学生は英語開講を受ける。そうすると、国
際学生と日本人学生の交流の場がほとんどないことになる。APUのコンセプトである多
文化交流はどこで実現するのか？

そこで考えたのが、「アジア太平洋地域理解」という一回生用の演習を一クラス二〇人

とし、その授業の中で交わってもらう計画だった。アジア太平洋地域の諸問題をトピックスにして、自分たちの地域の報告や、ディスカッションを行うという計画で、テキストなども日英で作った。

ところが、いざ開講してみると、日本語ができない先生だった場合、日本人学生とのコミュニケーションが取れないという問題が発生した。クラスのメンバー編成も論議された。クラスの中でコミュニケーションを図れるバイリンガルの学生をどう配置するかが一つのポイントとなった。国籍、男女、言語運用能力のバランスを見ながら、クラス編成をしていく。春と秋の入学で毎期のクラス編成に結構なエネルギーが使われた。

また、授業内容については今でも教員や学生が二つの意見に分かれている。コンテンツ（中身）派は、アジア太平洋の理解が大切だと考え、知識を得る講座はそれぞれの言語で受けて、交流はクラスですするという方法を主張する。もう一方は知識を得ることより直接交流する環境が大事だと考える人たちで、この二つが常に意見対立するので、どちらにウェイトを置くか、毎回毎回議論して、リニューアルの指針にしている。コンテンツ寄りにしたり、多文化環境寄りにしたり、という試行錯誤は今も続いている。

クラスでの交流は、まったく違う価値観に触れて世界が大きく開けるといふ貴重な体験



将来の夢に向かって学ぶ学生達

を学生たちに与えている。二〇〇二年に日本政府が中国の農産物に対してセーフガードをかけたことが、あるクラスの議論になり、日本人学生が「政府がセーフガードをかけるのは必要な措置なのだ」と発言。それに対して中国人学生が「日本が必要だから中国は野菜を作ってきたのに、今になってセーフガードをかけるのはおかしいじゃないか」と反論。日本人は言い返せなかった。しかし、日本人学生と国際学生と一緒に学ぶという、この環境だから出てきた議論で、日本人学生にとって貴重な体験になったと思われる。

■セーフガード 輸入農産物が日本の農業に重大な損害を与えそうなとき等に発動される緊急輸入制限措置。関税を高くしたり

して輸入量を減らす。二〇〇一年には急激に増えたネギ、生シイタケ、イグサ（畳表）に
対して発動された。

国際学生どうしの議論も、日本では聞いたことがないほど激しくやり合ったりする。例えば、インドのカシミール地域から来ている学生とパキスタンのカシミール地域から来ている学生がいて、さすがにカシミールのことは話題にしないが、激しく議論した。インドの学生が日本では死語に等しくなっている「帝国主義だ」とか「リベリズムだ」という言葉を使うと日本の学生はきょとんとするが、パキスタンの学生は猛然と反論する。インドとパキスタンの国家間の緊張関係、それに中国の学生やシンガポールの学生が加わって議論していくと日本人学生は圧倒されてしまつて、そんな議論にはとてもついていけない。こういう体験は日本人学生にとって大変な刺激になっただろうと担当教員は言う。

激しく議論し合うことが決して喧嘩ではないということを大学側も体験した。議論していたパキスタンの学生が赤痢にかかつて国立別府病院（現・別府医療センター）の隔離病棟に入院したとき、ずっと付き添っていたのは犬猿の仲かと思われていたインドの学生だったという。

講義の仕方も国によって違う

海外から来た先生が五〇%いたが、その講義の仕方は国によって違っていて、日本人の教員は驚かされた。例えば、二〇〇人のクラスで九〇分の授業をするとき、最初の四五分は普通の講義をするが、後の四五分は、クラスを即席で五つくらいのグループに分けて、ディスカッションさせて報告させる授業をしたりする。二〇〇人もいて双方向の授業ができるということに日本人の教員が驚いて「日本の大学では考えられない」と言うと「二〇〇人なら大丈夫だ」と海外から来た教員が涼しい顔で答えた。

東アジアには、教員は教壇に立って上から教えるという儒教的スタイルがあるが、アジア以外の国々では、先生の立つ位置が違うということも目の当たりにした。話しながら教室の中を歩いて、眠っている学生がいると肩をたたいて起こし、「眠いかもしれないが、私も一生懸命話しているのだから、起きて聞きなさい」と言う先生もいた。

成績評価基準では、期末試験の成績が占める割合は五〇%以下ということになっていたから、何回も小テストやクイズなどが出されたが、外国籍の先生たちの成績の付け方は詳細極まるものだった。学生一人ひとりについてチェック項目をきちんと付けていた。成績



国際学生にも好評な「茶の湯」の授業

をきちんと付けるのは教員の義務であるという考え方を明白にしていた。

今、日本ではFD（ファカルティ・ディベロップメント）という、大学教員の教育力を組織的に付けていくことが義務化されているが、海外の先生の授業方法で大きな刺激を受けることができるAPUの環境自体が大変良いFDだと言えるのではないだろうか。

APUでは「茶の湯」の授業も開かれている。川本理事長が茶道裏千家家元の千宗室氏にAC就任と学生への講演を依頼したことがきっかけになって茶室「和心庵」の寄贈を受けており、ここで授業が行われる。教えているのはタイ出身の先生である。国際学生、日本人学生と一緒に^{てまえ}なる、お点前の実習を受

けており、学生に大変人気のある授業である。コースの終わりには、学長や副学長、教職員が招待され、お点前が披露される。亭主となった国際学生が正座し、見事な作法を披露するのである。国際大学APUならではの日本文化の体験学習の場である。開学当初クラスで開講されたが、あまりの人気にすぐ二クラスになった。

言語ウィークでは国際学生の芸達者が日本人を圧倒

APUは「アジア太平洋」の大学なのだから、英語と日本語以外の、アジアで主として使われている言語を勉強できるようにということで、中国語、韓国語、ベトナム語、タイ語、マレー語・インドネシア語、スペイン語の六カ国語を「アジア太平洋言語」として開設した。アジア太平洋学部ではアジア太平洋言語は八単位必須だった。学生たちが六カ国のうちのどの言語を選ぶかが、放っておくと中国語に集中してしまう恐れがあった。それで選択の前に、他の言語にも親しみを持つような機会が必要だと大学は考えた。慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス（SFC）が、入学後半年のリード期間を置いて語学を選択させるようにしていたので、それに倣って後期からアジア太平洋言語を選択させるようにした。では、前期はどうするのか、ということで設定されたのが言語ウィークだった。「韓国

語ウィーク」「タイ語ウィーク」「スペイン語ウィーク」など、その言語の週は、その国の国際学生が民族舞踏とか歌とかいろんな文化を紹介し、カフェテリアでもその国の食材を並べるエスニックコーナーを設けた。こうしてアジア太平洋言語六カ国の言語ウィークは楽しく成功し、各言語のクラスともバランス良く受講者を集めることができた。

後期になると、言語ウィークの六カ国以外の学生たちが「われわれはどこでアピールするのか」と言い出した。そこで始められたのが「アフリカウィーク」など各国・地域のウィークだった。もちろん「日本語ウィーク」も始められた。言語ウィークの準備はその国の学生たちが中心となり、仲の良い学生たちが手伝って行われていた。言語ラウンジにいろいろ展示し、出し物はカフェテリアにステージを作り、みんな力いっぱい歌や踊りを披露した。

日本人学生は入学したとき一八歳だが、国際学生はすでにその国の大学を卒業して来ている学生もいて、自国の文化をアイデンティティとして紹介する力も技術も持っていた。最初のうちは国際学生たちの芸に圧倒されてしまった日本人学生たちが、負けてはいられないと立ち上げたのが神楽や和太鼓のグループとして発展している。

学習・授業のインフラ余話

A P Uでは、授業は準備資料を読んでから受けなければならない。そのため、学部事務室に相当するアカデミック・オフィスには授業ごとに印刷教材が置かれていて、学生たちがそれを取って授業に持つて行く。その印刷教材の多さは、アカデミック・オフィスの予算の半分以上が印刷費に使われるほどだった。あまり頻繁に使うので印刷機がたびたび壊れた。経費がかかりすぎるので、印刷教材はその後、プリペイド方式の有料に変更されている。

また、A P Uでは受講登録や学生への連絡などをウェブ上で行っていることが多い。中間的な成績チェックとしてのレポート提出も、学生がウェブ上のホルダーに提出する。学生証番号と名前をホルダー名にすると番号順にソートし、プリントアウトする仕組みも良かった。このシステムは採点の際にも便利だと評価された。

予想外だったのは、アジアの学生たちのコンピューターのスキルだった。日本人学生はともかく、アジアの学生には必要だろうとオリエンテーションのときパソコンの講習も準備していたが、結果は逆で日本人学生よりアジアの学生の方が、はるかにスキルが高かつ

た。座るなりパソコンをいじり始めているのは心配していたアジアの学生たちで、彼らは高校の段階でＩＴスキルが身につけていることが分かった。九〇年代後半でアジアと日本のＩＴスキルの格差がいついてしまっていることを、ＡＰＵの教職員はまざまざと自覚させられたのだった。

謝る国、謝らない国

カンニングでも謝る国の学生と、絶対に謝らない国の学生に分かれる。日本の大学は通常一人の教員がカンニングを見つけて指導するが、ＡＰＵでは複数の教員が見つけなければダメ。中国や韓国の学生はすぐ謝るが、絶対に謝らない人たちもいる。「カンニングして書いたでしょ」と言う、「いや、誰かが私を陥れようとしている」と、絶対に認めない。彼らの社会では認めたら終わりなのだ。ＡＰＵはカンニングに対して非常に厳しくて、見つけたらその期間に受けた試験は全科目無効にする。成績にこだわり、また単位授業料制なのでお金も直結しているから、とてもシビアだった。

とにかく不正行為に対しても、国によって対応が違うので学生部は対応が難しい。日本では「教育的指導」と言って、反省して謝れば済むことも多い。ところが反省したら許さ

れるという発想がまったくない国もある。謝ったら終わりなのだ。反省を積み重ねることによって、不正行為を少なくしていく、ペナルティを減じていく、という発想が受け入れられない。そういう意味ではAPUは日本の大学ではない。日本の大学制度、それまでの大学が作り上げてきた学生指導のシステムも世界基準に変えていく必要があるそうだ。

「学生処分」も、大きな問題になった。万引きなどで処分する場合、必ず教授会の議を経て学長が決定するというのが日本の大学では当たり前のことだが、教授会の議の中で外国籍の教員が処分について猛反対した。日本では、処分が決まったらそれで問題ありませんとなるわけだが、外国籍の教員はそれではいけないと主張。「再審申し立て」がきちんとしていくかどうか、学生側の処分に対する異議申し立ての手続きを踏んでいなければいけない、と言う。

そこで諸外国、特に欧米やアジアの多くの主要大学の「学生処分」の規程を集めて、検討委員会を設け、APUは学生処分に対する「異議申し立て」を日本の大学で初めて導入した。処分が決まってから一週間以内に異議申し立てがあれば、もう一度審査するのである。今、日本の大学でも「異議申し立て」を取り入れているところが増えてはきているが、それを初めてやったのがAPUの学生部だった。

日本の大学の場合、学生処分の理由に「学生の本分にもとる行為云々」というのがある。その「学生の本分にもとる」とは何か、意味が分からない、何をしたら処分なのかはつきりしてほしいと外国籍の教員が言った。日本の大学では学生や教職員の処分に關して「この学校の名誉を傷つけたら云々」と規程が非常に抽象的になっている。その部分を具体的に書けと言われてもきりが無い。書いたらその一方でいろんな事例が出てくるだろう。そこが非常に難しい問題だった。

一年目はうわさで振り回された

開学した当時のAPUは、小さなコミュニティだった。二〇〇〇年の春入学した学生は七〇〇人、秋入学した学生が二〇〇人、それに教職員が一三〇人という、一〇〇〇人くらいの人数で、おまけに街から離れた山の上に学生たちだけで暮らしていたから、うわさ話が出ると伝播^{でんぱ}が早かった。特に国際学生はAPハウスに住んでいるから何かあるとそのニュースは瞬時に広がった。ある先生がこう言ったとか、事務局がこう言った、学生同士が喧嘩した、女の子の取り合いをした、などのニュースは翌日には全員が知っているという構図になっていた。

そういう土壌があるところに、何か悪いうわさが流れると全員が右に揺れ左に揺れで、事務局が対応に大汗をかくという場面が多かった。事務局の説明能力も学生の理解力もどちらも不十分だったから、行き違いが起きた。その行き違いがうわさで増幅されて学校中が揺れるということがあった。ある国際学生が、APUは立ち行かなくなるといううわさを流したときも学校中が大揺れに揺れた。うわさを流した本人は学校をやめていったのだが、このうわさ事件も二年目からは激減する。

国際寮ⅡAPハウス

日本に留学を希望する学生が突き当たる三つの壁は、経済格差、日本語能力、住居の問題である。アドバイザー・コミッティの支援や日英二言語教育の実施の決定により、残る課題は住居の問題となった。日本では大都市においても「外国人お断り」の不動産物件は少なくない。しかも家賃は高い。こうした社会状況の中で、どうやって毎年四〇〇名の国際学生の住居を確保していくのか、抜本策を講じないと追いつかない、という課題である。さらに、日本語ができなくても入学できる、というAPUのコンセプトはいっそう問題を複雑にした。大家さんや近隣のみなさんとコミュニケーションはとれるのか、別府市

のゴミ出しルールを守り、ちゃんとした市民生活はできるのか。

こうしたことから、寮は不可欠だ、という判断に至った。しかし、せっかく日本に四年間滞するのに、十文字原の丘の上で生活することが本当に国際学生にとっていいことなのか。こうした検討から生まれたのが国際寮Ⅱ A Pハウスの構想だった。

入学した国際学生は全員、一年間はA Pハウスに入寮する。ここで、日常生活に問題ないレベルの日本語能力と別府のコミュニティで生活できる日本社会・日本文化への理解を進める。二年目からはむしろ山を降りて市内で生活し、市民とも積極的に交流することにした。

A Pハウスにはこうした目的に沿って国際学生を支援する、R A（レジデント・アシスタント）を置くことにした。今は上級生がR Aに就いてくれているが、一期生は立命館の付属校出身者や、入学希望者の中から、この趣旨をふまえて手を上げてくれた新入生をお願いした。

開学と同時にA Pハウス1（四二四室）を建設したが、すぐに部屋が不足したため、二〇〇一年にはA Pハウス2を五〇八室分増設した。A PハウスはA P Uのコンセプトを実現する上で予想以上の効果を発揮した。R Aを中心とした異文化コミュニティはA P Uの

最大の特徴となった。二〇〇七年度には、「国際寮」に教育・学習習慣確立のためのソフトを付加し、「国際教育寮」として機能強化の上、APハウス3（三七八室分）を増築した。現在は、ハウスマスター（大学教員）が配置されてさまざまなプログラムが提供されている。また、国際学生と日本人学生のシェア・タイプの居室も新たに設けられている。

就職で失敗できない

次に直面した問題は、APUの卒業生の就職だった。あんなに頑張って集めた優秀な学生たちでも、就職ができなかったらその年からAPUの評価が落ちる。初年度から一〇〇%の就職を確保しなければならない。第一期生の就職にAPUの存亡がかかっている、と思えた。

APU一期生の就職を一〇〇%成功させるためには、どうしたらいいか。

「ACにこれだけたくさんの人々が協力してくださった、その裏に経団連の事務局の援助があったと思います」と川本は言う。「経団連の事務局が積極的に前に出てくれなかったらできなかったことです。その事務局をつないでくれたのは、三井銀行（現・三井住友銀行）の社長だった末松謙一氏です」。

川本はウルトラ級の手法を取った。経団連事務局に頼み込み、経団連の国際会議場を借りて就職懇談会を開いたのである。経団連の歴史上初めてのことだった。

平松知事も就職懇談会の会場に現れて熱いアピールをした。大分県に国際大学を誘致した経緯、一村一品運動にはアジア各国の首脳が多くが大分県を訪問し、この運動を積極的に評価している。マハティール首相やラモス大統領などもこの大学のACの名誉委員になつてもらつていたので、こういう大学の卒業生はみなさん方の企業に採用していただくと必ず役に立つ。ぜひ採用していただきたい、と。

「私も、一大学の卒業生の就職を、経団連の事務局が集めた各一流会社の秘書課長に頼んだのは、後にも先にもこのときだけです」と平松前知事。その後もACのみなさんのAPU見学、授業見学、国際学生との懇親など、企業懇親会に取り組んだ。その結果、二〇〇三年、一期生は就職率一〇〇%という、不況の時代にあつて画期的な成果を上げた。

創立一〇〇周年・開学式典

二〇〇〇年五月二〇日、別府市のピーコンプラザでAPUの開学式典が開催された。それは「立命館創始一三〇年 学園創立一〇〇周年記念 立命館アジア太平洋大学開学」と

位置づけられた式典であつた（二四四頁の「開学宣言」参照）。

中国、韓国、日本の伝統楽器で構成されたアジア・アンサンブルのオーケストラ演奏とバリトン歌手による学園歌独唱で始まり、まず、学園を代表して長田豊臣総長（当時、現理事長）が挨拶に立った。

「おそらくは二十一世紀は多様な価値観やさまざまな文化の『許容と理解』によって成り立つ共生の時代」となり、それは「対立、異質、多様性を前提とした上で、その多様性を人間社会の豊かさの資源にどう転化していくことができるかを探り、努力する時代」であると述べた上で、「このような二十一世紀の時代的要請に応えて、新しい時代の価値観と共生の作法をさぐり、そのための知的訓練と方法論の構築を、さらにはそれに基づく人材養成を目的としたアリーナの一つを、アジア太平洋を中心とする世界の青年に提供しようとするのがこの大学（APU）の建学の理念」であると挨拶した。

また、ジョン・ラギー国際連合事務総長特別補佐官、中曽根弘文文部大臣、平松守彦大分県知事、井上信幸別府市長、奥島孝康日本私立大学連盟副会長、平岩外四経済団体連合名誉会長など関係者から温かい祝辞をいただいた（役職名はいずれも当時）。

一期生を代表して日本とシンガポール出身の二人の学生が決意を込めたメッセージを読

み上げ、最後に川本理事長が謝辞を述べた。

式典にはAPUに入学した国際学生の出身国を中心に世界三四カ国の駐日大使、ACの諸氏、海外協定大学学長、国内大学理事長・学長、大分県、別府市の方々、立命館学園校友、父母など、約四五〇〇名が臨席した。

「APUは数え切れないくらいたくさんの方々の支援があつて生まれた大学です。大分県や別府市が協力してくれたおかげであり、文部科学省が理解を示してくれたおかげであり、企業が莫大な援助をしてくれたおかげであり……。この学校こそ戦後の日本の大学の中でいちばん社会性のある大学だと思います」と川本は回想した。

第3章

世界と別府でAPUをPR

立命館創始130年・学園創立100周年記念

APU 開学祭



2000年5月、APUは開学式典と開学祭を開催

なぜアフリカからAPUに入学したのか、という質問に

「八〇カ国を超える学生が集まっている大学は世界中探してもここしかない」とその学生は答えた。

それぞれの言語、文化が共存し、お互いに容認し合うところ。

APUの学生のコミュニケーション能力は非常に高い。

将来、地球上のどこかで紛争が起きたら、APUの出身者が呼ばれて平和のため働く。

それがAPUの夢。

未来の地球にAPUSピリットを生かしたい。

世界へ 学生募集

海外にも事務所が作られる

一九九八年から一九九九年になると、学生確保の取り組みは、初期の人材ニーズを調査し、学生確保の見通しを立てる時期から、学生確保を確実なものとする時期へと移っていく。

立命館は、九八年度にAPUの設置申請を行っている。この段階で、学生確保の見通しを申請内容に盛り込む必要があった。設置審査の際の重要な要件になることは文部省から幾度となく念を押されていることであつた。九六年から九七年は人材ニーズを調査しつつ、学生確保のためのルート開拓に重点が置かれていた。しかし、それはあくまでも設置申請予定の構想段階のものとして行われている。

九八年度に入り、設置申請が行われると、「設置申請中」として学生確保の取り組みが

行われることになる。この段階でもやはり設置が確定しているわけではないので、設置が正式に認可されれば学生を受け入れますという条件付の約束である。そこにも学生確保活動の困難さがあつた。

A P U が正式に認可されるのは九九年一月二二日である。正式に合格通知を出すことができるのはそれからである。そして二〇〇〇年四月には春入学学生の入学数を確保する必要があつた。国際学生は九月入学が多いとはいえ、それは綱渡りにも等しい活動であつた。

国際学生の募集は、九七年から九八年にかけて「大使館回りグループ」と「現地行きグループ」に分かれて活動した。国・地域毎に教職員に担当を割り当てたのだが、アフリカ、南米、ヨーロッパ担当と聞いて、『地球の歩き方』というガイド本を買った者もいた。これらの国・地域は「大使館回り」を基本方針としたので、アフリカ諸国の駐日大使館への訪問と聞いて肩の力が抜けたとか。

立命館では衣笠キャンパスの現・至徳館一階フロアに事務局が設けられ、九七年一月には、A P U 建設予定地の別府市に事務所が開設された。海外での事務所開設は九八年の韓国とインドネシアが最初だった。

モデルだからこそ苦闘した韓国オフィス

信じてもらうのにひと苦労

一九九八年五月一日、ソウルのルネッサンス・ソウル・ホテルで韓国事務所の開設記念式典とレセプションが開かれた。政府高官や高校の校長、日系企業の代表など多くの方々を招いて開催された。初代事務所長となったのは立命館大学客員教授の金政炫氏キムジョンヒョソンである。金所長は韓国の環境庁次官や慶熙大学キョンヒの学部長などを歴任し、高校の校長とも多くの面識があった。当日も所長の呼びかけに応じて多くの校長がレセプションに参加していた。APUのために設置された最初の海外事務所である。

韓国事務所の苦闘に満ちた地道な活動はそこから開始された。韓国人スタッフがAPUの理念や構想、教育内容を説明し、学生推薦の推薦協定締結を依頼する高校訪問が繰り返

された。訪問対象に選んだ高校はソウル大学や延世大学、高麗大学など名門大学に多くの合格者を出す有名進学校であった。五〇カ国からの募集を目標にしているAPUにとって、統一的な学力試験は無理である。したがって、優秀な国際学生を確保する道は有力校から推薦を受けることであつた。これはすべての国で採用された方法である。

立命館が設置するとはいえ、設置申請中の大学に学生を推薦する協定を結んでもらうのである。それがいかに困難な取り組みだったか。それを支えたのは韓国スタッフの熱意であつた。アジア太平洋地域の学生が国境を越え、同じキャンパスで学ぶ大学への期待とそれに参加することへの誇りでもあつた。スタッフのあまりの一生懸命ぶりには、韓国の高校関係者が衝撃を受けるほどであつた。

留学生確保推進本部の期待を受けて、韓国人スタッフと教職員チームが一体となった高校訪問が繰り返された。しかし、なかなか成果は上がらなかった。その頃海外の大学で、「学校ができる」といって入学金を騙し取る事件が起きていた。そもそも、大学の設置認可が下りていない時期に、海外での学生確保の見通しを立てること、それ自体の困難さがあつた。APUの話聞いた韓国親の中には文部省に電話をかけて事実を確かめようとした人もいた。

全羅南道・麗水という地域で学校訪問をしたときのことである。女子生徒が泣き腫らした目を真っ赤にして「APUに行きたい」と言った。お母さんは行かせたくないと泣いた。この二人と日本から来たAPUスタッフと韓国事務所のスタッフを高校の先生たちが取り囲んで立命館スタッフに聞いた。だした。「奨学金は本当にあるのか?」「これは親日派を養成する大学ではないのか?」「また大東亜共栄圏を作るつもりか?」

立命館のスタッフは、戦後五〇年の年にあたって立命館大学が行った「特別卒業証書」授与の話をした。戦時中、陸軍特別志願兵に志願しなかった韓国・台湾の学生を当時の立命館大学は文部省の意向に沿って除名処分していた。立命館大学は、戦後五〇年の九五年に、立命館大学でこのような処分を受けた韓国、台湾の元学生に対して、その処置を誤りと認め、九六年三月の卒業式に招いて、「特別卒業証書」を総長より手渡したのである。この取り組みは九六年以降も続けられた。

話し合いの雰囲気は少しずつ変わっていった。先生たちは念を押した。「この女子生徒の一生がかかっている。あなた方は本当に責任をもてるのか?」

この女子学生はAPUに入学したが、スタッフは入学してくれた喜びよりも、責任の重さをずっしりと感じていた。彼女は現在APUを卒業し、ソウルの大企業で働いている。

アジア太平洋時代の高校教育の展望を語る

韓国事務所が開かれた翌年の九九年一月二二日、「アジア太平洋時代の高校教育の展望」と題する討論会が別府で開かれた。韓国の五〇の高校の校長と、大分県内の一八の高校の校長を含めて約一〇〇名が参加して開かれた。大分県内の高校にとっても初めての経験ともいえる大規模な国際化への活動は、APUができる前から始まっていたのである。準備活動それ自体が国際化への取り組みになっていることを担当者たちは実感していた。

翌日、APU建設予定地を参加者が見学した。細い山道を延々と登ってたどり着いたところで見たものは広い丘の上で始まった工事現場であった。建物は何もなかった。このとき、工事現場に立ち、冬の別府湾を見下ろした高校生の一人が金容賛キムヨンチャンである。彼の父親は久留米大学医学部に留学した経験があり、延世大学医学部出身の医師で大の日本通であった。APU開学後、いち早くつくられた韓国父母会の初代会長を務めた。息子の容賛がAPUに入学すると、自ら再び日本語の勉強を始めるほどの熱の入れようであった。

しかしそれは後の話である。このような取り組みにもかかわらず、当初、学生推薦に向けての成果は芳しいものではなかった。

国際化に突き進む韓国高校教育

韓国スタッフの高校訪問は、しかし、じわじわと浸透していった。大元外国語高校は韓国トップの進学校である。南鳳喆校長はアメリカの有名大学を歴訪していた。生徒を夏休みに研修させるためのプログラムを開発するためである。夏期研修で生徒の進学意欲を高め、アメリカのアイビー・リーグなど一流大学に進学させるのである。すでに実績を上げており、多くの生徒をソウル大学はもとより、海外に進学させていた。そのような校長にとってAPUは魅力的であった。

ソウル近郊に広がる新興住宅地には留学に意欲を見せる高校が多い。安養外国語高校もその一つである。李日成校長はAPUの夢にかける気になっていた。APUに学生を送り込み、日本留学の実績を上げる。そして国内外での進学実績を上げる。一期生として一〇名を超える生徒をAPUに送った。このとき、APUに双子の兄弟を入学させた母親の朴香淳さんは、一期生父母会の役員として活躍している。

「APUの話を聞くと元気が出ます」。後年、大元外国語高校を訪問したAPUの教職員に南校長はそう語っている。国際化に意欲を持つ教育者にとって、APUのチャレンジは

励みになっていた。しかし、韓国では賛同者だけではなかった。訪問した立命館の教職員に執拗にAPUの狙いを問いただした校長がいた。APUが日本の各界から賛同を得ていることを強調すればするほど、質問は繰り返された。「その狙いは何ですか」。

ここでも、かつての日本のアジア支配に対する歴史の記憶がよみがえっているようであった。同伴した韓国スタッフは校門を後にしながらつぶやいた。「日本は、重い歴史を背負ってしまったのですね」。

国際平和ミュージアムを持ち、歴史に誠実に向き合うことを理念としてきた立命館の教職員にとって、それは本当に重荷であった。それはまた、平和ミュージアムを持っていることへの誇りを感じるときでもあった。

反日感情が強い韓国にあって、日本の大学への学生募集に当たる韓国スタッフの立場はそれ以上に複雑だった。「自由・平和・ヒューマニズム」「国際相互理解」「アジア太平洋の未来創造」——APUの理念が試される場でもあった。こうした奮闘の末に、韓国事務所は見事にAPUの期待に応えたのである。開学初年度、二〇〇〇年四月には韓国から八名の学生がAPUに入学した。

現在、韓国からの入学者は六七四名、協定校は一〇三校になっている。

教育制度の違いを超えて 中国

学生募集は国家の仕事です

北京の教育部をAPUの職員が訪問したおり、相手の担当者はこう答えた。「APUの理念には賛同します。その設立にも協力しましょう。しかし、中国では学生を募集することとは国家の仕事なのです」。

中国では改革解放政策の下で大学進学率は上昇し、外国への留学も活発になっていた。大学院への留学は国策としても奨励していた。学部での私費留学は本人の自由に任されており、学生が外国の大学の情報を入手し、応募するのは本人の自由である。しかし、外国の大学が中国国内で学生を勝手に募集してはいけない。APUのスタッフは担当者からこのような話を聞かされた。

中国には政府が認可した「留学生服務中心」が国や省の教育委員会の外郭団体として設置され、外国大学の広報や留学生の募集を支援していた。なかには、一括して委託してくれればAPUの条件に合う学生を募集すると提案してくれたところもあった。魅力的な提案ではあったが、それには学生一人当たり結構な手数料が必要であった。

韓国同様、優秀な高校から推薦を受けることを基本にしていた中国担当のメンバーは出鼻をくじかれた感じであった。国が違えば制度が違う、制度が違えば学生募集の方法も違ってくる。考えてみれば当然のことではあるが、経験して初めて体で分かったという感じであった。

APUの国際学生募集の基本方針は、高校や大学などの教育機関と提携しネットワークを拡大しながら学生の推薦を受けることにあった。坂本学長のもとに置かれた「留学生確保推進本部」は中国グループの報告を受けて幾度か選択の岐路に立たされた。結論はいつも教育機関の協力を得て学生を募集する、連携のネットワークを作りながら学生を募集するという基本方針に立ち戻る、であった。しかし名案があったわけではない。ただ中国の大学の協力を得て開催したAPUの説明会には多くの学生や親が集まった。奨学金は、学費は、生活費は、住居はどうなるか、とにかく質問は留学できるかどうかにかかっていた。

「奨学金や住居の支援があれば、親戚からお金をかき集めてでも息子を留学させたい」
親の熱気が伝わってきた。留学希望者が多いこと、このことだけは確信となっていた。
統一試験で優秀な成績をとりながら、第一志望校に入れなくて留学を選択する学生がいる
ことも分かった。どうしたらそうした学生にアプローチできるのか。そして合否判定から
入学手続きまでの確実な方法を作ることができるのか。それは中国社会に受け入れられる
ものでなくてはならない。

協定が実を結ぶ

名案はないままに、高校や大学、教育機関との間の推薦協定に関する話し合いを進めた。
北京市、吉林省など市や省の教育委員会の参加を得て調印式が繰り返された。日本語熱が
高く真面目な学生が多いと聞けば、内モンゴル地区にも飛んだ。留学を希望する優秀な学
生はいたが、経済的に厳しい現実が立ちはだかっていた。裕福な学生が進学する上海の貴
族中学といわれる学校にも行った。確かに優秀で裕福な学生がいた。しかし多くは欧米へ
の留学を希望していた。調印には応じてくれるが、本当に学生を推薦してくれるのか、そ
の確信はわからないままに日が過ぎていった。せめて三割打者になりたい、それが中国担当

グループの実感であった。それでも上海の甘泉中学校など日本語教育に熱心な高校との間で具体的な学生推薦に向けた話は進んでいった。

比較的早く成果が上がっていったのは日本語に熱心な高校との推薦協定であったが、大学との協定では東北財経大学との協定がある。東北財経大学は大連にあって意欲的に改革を進めていた大学である。現大連市長の夏徳仁氏かとくじんが、学長だった九六年に立命館大学を訪問し、交流が開始された。学術交流協定が結ばれたのは九八年であった。それを契機に交流が活発化し、于洋学長時代うようにAPUへの留学生推薦についても合意がなされた。二〇〇〇年四月には一〇名を超える学生が入学している。

その一人が張琳荷チャンリンハである。彼女は東北財経大学の学生であった。日本の経営を学び、国際的に活躍したい、それが張の希望であった。そのときAPUの説明会があった。立命館大学やAPUの教員と東北財経大学の学長を始めとして多くの教員が交流していることが安心感につながった。奨学金があることも魅力であった。張はアジア太平洋マネジメント学部に入學し、現在ジェトロで働いている。張は学生時代を振り返って次のように回想している。「APUは国際色豊かな大学です。APハウスはもちろんのこと、キャンパスでもそうです。ゼミでは、資料収集から考え方、プレゼンテーションなど、仕事の上でも

基本となることを学びました。でも日本で働きたい人は、国際色におぼれてはいけない。特に国際学生は自由に学生生活を送っているけれど、日本には日本的慣行があるのだから、日本社会に触れ、異文化である日本文化を理解してほしい」。

于洋学長は〇二年に立命館大学経済学部客員教授として教鞭をとっている。残念ながら今は故人であるが、東北财经大学との連携は今も続き大連市との連携へと発展している。

広がるネットワーク

平松知事の中国ネットワークの力は大きかった。平松知事の紹介で中国政界の有力者汪道涵^{どうかん}元上海市長がACメンバーに就任していた。中国国家外国专家局から得た協力も平松知事の紹介による。专家局は、かつてはソ連との技術専門家の交流をもっぱら担当する部門だったが、改革解放後は、アメリカを始めとして西側を含む技術交流を担当する部門となっている。技術協力だけではなく幹部養成のために外国の大学との交流についても関心を寄せていた。また、留学生斡旋を行っている下部組織も持っていた。

この組織の学生推薦の担当者は自らをこう紹介した。「私は、^{おおひら}大平学校の一期生です」。彼女は日本人に自己紹介するとき、この言葉から始めた。

大平学校とは、一九八〇年、大学の日本語教員の研修を目的に北京に設立された日本語研修センターであり、七九年の大平正芳首相（当時）の訪中を機に構想されたものである。その後、北京日本研究センターへと発展している。大平学校とその後継の北京日本研究センターには著名な日本の日本語研究者が講師として参加し、そこから多くの中国人指導者が育っている。その一期生であった彼女は、日本への留学生の募集には熱心であった。

推薦者から不合格者が出たこともあった。また推薦にあたつて出された奨学金の希望とAPUの奨学金の交付決定が違ったこともあった。それでも協力関係は続いた。

駐日中国大使館教育部には立命館の中国グループの教職員が幾度となく訪問している。APU開学後、国際大学として協力事業を推進するには、各国政府の理解を得ることは重要なことであった。単に国際学生が集まればいいということではなかった。

先の駐日大使館教育部公使参事官であった李東翔氏^{りとうしょう}は平松知事と坂本学長が準備のために初めて教育部を訪問した当時、国際合作与交流司長であった。李氏は現在立命館大学客員教授であり、APU開学後は立命館と中国との交流に対してさまざまな支援をいたしている。アジアアフリカ処の日本担当としてAPUスタッフに対応されていた孫建明氏^{そんけんめい}は大阪総領事館教育領事を経て李東翔氏の後任として駐日大使館教育部公使となっている。

人脈は回りまわって広がっていった。制度は違っていたが、基本は同じであった。双方の理念・目標を理解し、共通点を見出し、双方の立場と利益を尊重するとき、道は開く。その基本を共有し合える人のつながり、ネットワークの力である。中国からは初年度九二名の学生が入学した。

ネットワークが生きたインドネシアチーム

まず訪問先の開拓

インドネシアチームは毎年三〇名、APUに進学するルートを開拓することを目的として取り組んだ。日本への留学者数がそれほど多くないのがインドネシアの実情で、インドネシアの高校生の主な留学先は、最も近い英語圏であるオーストラリア、シンガポール、アメリカを始めとする諸国である。こうした中での取り組みとなった。

国際学生の確保とはいうが、どこに、どのように活動をすればいいのか、みんな分らない。ここで生きたのが、チームの中にいた日本人教員のネットワークである。この教員はかつてインドネシア大学の日本研究学科で客員教授を務めた経歴があった。この時の日本語ができる教え子が国際交流基金のスタッフになっていたので協力を要請した。これに彼らは積極的に応えてくれた。彼らがインドネシアの高校のランクなどの情報を表に自作ってくれた。まずはその情報をもとに、ジャカルタ、スラバヤ、ジョグジャカルタ、バリなど主要都市の国立、私立高校を訪問して推薦協定の締結をお願いして回った。

また、インドネシアの短大、大学からの編入学も期待できると考え、日本とゆかりの深いダルマ・プルサダ大学などを始め、いくつかの大学も訪問した。

ところが、留学先としてなじみのない日本に、しかも二、三年先に設立される大学への推薦である。先方に私たちの計画を説明するにしても、会ってもらえるのかどうか心配である。そこで、教育行政の責任者、日本で言えば文部科学大臣の推薦状を取ろう、という大胆な策を思いついた。APU開学に向けて、ACを組織していたが、当時の大統領、スハルト氏も国際委員として名前を連ねていた。これが生きた。

先方の教育省にノー・アポで飛び込み、秘書に趣旨を説明、待たされること一時間三〇

分、高等教育局長相当の役職者に会うことができた。大臣の推薦は無理だが、高等教育局長としてのAPU推薦状は可能だという返事を引き出した。さっそく作成してもらった。大統領がAC委員、高等教育局長も推薦する大学、ということになった。これにより、アポイント段階で断られることはなくなった。

最大の困難は奨学金

ようやく高校や大学の担当者と面談がかなうことになる。当方、APUのコンセプト、教育には自信がある。先方もすばらしい構想の大学だ、とうなずく。では、学生を送りましょう、という段階で立ちはだかる壁は奨学金だった。

折り悪しくもインドネシアの通貨であるルピアは大暴落。一元二五ルピア程度だったのが半年で九〇ルピアまで暴落した。想定していたAPUの学費は、当時のインドネシア大学卒業者の年収の何倍にも相当した。目の回るような金額である。しかしこれは想定通りである。APUが開学にあたって用意した奨学金計画の説明が生きた。APUへの入学希望者は四〇～五〇人いたのだが、最終的に初年度四月に入学してくれたのは一四名、秋入学も含めて二七名だった。そういう理由から、いわゆるキャンセル率が高い国だった。

インドネシアチームは、日本大使館、国際交流基金、ジャパンクラブ、日本のマスコミなど、在インドネシアの邦人とのネットワークを拡大していった。こうした方々は自身が活動するインドネシアと日本との協力関係が強くなることを好意的に受けとめてくれ、APU開設に向け訪問先の紹介、現地新聞での報道など、さまざまな協力の申し出をしてくれた。こうした中、立命館大学の卒業生のネットワークが見えてきた。九九年には立命館大学インドネシア校友会の設置へと結実していった。

そのうちに、現地の教育機関ネットワークや留学希望者の相談窓口、現地の立命館関係者の連絡拠点として、インドネシア事務所を開設しようということになった。

APUのインドネシア事務所ができたのは九八年（正式に開設式を行ったのは九八年一月一四日）である。開設認可には複雑な手続きを要した。この半年余り前の五月に、インドネシアの第二代大統領だったスハルト政権が倒れ、この国の将来はおろか、明日の方針も見えにくい時期であった。今日APUに約束してくれたことが今後も継続するかどうかは分からない状態。インドネシアにとっては一大変革だった。政権崩壊がもう二、三カ月早かったら、この事務所の開設計画もなくなっていたところだった。

インドネシア事務所の最初のスタッフはインドネシア大学出身の、日本語も英語もでき

る非常に優秀な二人の女性だった。バンドン、スラバヤなど代表的な都会の高校もいくつか回るようになり、とにかく最初の一年目はスタッフにもAPUのコンセプトを理解してもらい、それを今度は現地の校長先生や進路担当の先生に説明してもらう。チームの教員も、インドネシア語で挨拶し話すとみんな、喜んでくれた。手ごたえはかなりあったのだが、実際に一年目に来たのは二七名だった。それが今では一八六名となり、インドネシアから日本に留学してくる学生の約一割が別府に来ている。アルイザール高校とはAPUへの進学コースの開設で合意するなど、大きな成果を残したといえよう。

APUへの期待をこめて——タイ

私宅に事務所の看板を掲げて

タイ教育界の重鎮ホンチョン・トゥイー教授の自宅玄関には「立命館アジア太平洋大学

事務所」の看板がかかっている。別にAPUが要請したわけではない。教授の発案である。トウイー教授との出会いはマニラで九七年六月に開かれた「二十一世紀の高等教育と人的資源開発のための世界会議」と題するシンポジウムであった。このときの出会いがその後の教授とAPUとの縁の始まりであった。

タイでも例外ではなく、タイ担当の教職員がタイを訪問していた。このグループにシンポジウムで教授と知己を得た教員が参加していた。タイで再び出会ったトウイー教授にタイでの学生募集への支援を要請したのである。それからの教授の活躍は目覚しかった。多くの教え子が高校で教壇に立ち、あるいは学校の要職にあった。

「日本に新しい国際大学APUがつくられる。留学希望生徒を集めて説明会を開きたい」教授の要請に応じて、各地の高校で説明会が開かれた。九七年から九九年の三年間に七五校で説明会が開かれた。ここまでは他の国と同様の取り組みであった。しかし、タイではその後が違った。トウイー教授の学生募集への理念があった。タイからは確実に優秀な学生を送る。そしてAPUでのタイの学生の評価を高めたい。訪問した高校に要請した。「学校で一番、一番の学生にテストを受けさせてほしい」と。

そのテストとは、練習用のTOEFL問題を利用した英語力テストで、それに英語での

面接、英語での長文理解問題が課せられた。趣味やクラブ活動も訊かれた。初年度テストを受けたのは三五校からきた四六人の成績優秀な学生であった。一五人が合格し、その中から奨学金を受けることができて、四月にAPUに入学したのは六人だった。他の九人はタイで進学している。

このとき入学したバダナコーウィト・ピチャヤはアジア太平洋マネジメント学部に進学し、成績優秀者に授与される安藤百福奨学金を受賞している。安藤百福奨学金は日清食品会長であった安藤百福氏がAPUのために設立した奨学金である。受賞者は毎年、日清食品大阪本社に招かれ、安藤百福会長、安藤宏基社長から激励を受けた。多くの国際学生が、ミュージアムの一角にある安藤会長が即席めんの開発にいらした部屋の前に、日本企業のイノベーションの魂を感じ取っていた。ピチャヤもその一人であった。彼女は卒業とともにアサヒビールに入社した。その後、オックスフォード大学の修士課程で学び、現在はロンドンにあるビジネスコンサルタント会社で働いている。

インド学生募集創世記

日本文化の理解者ヴァルマ教授

サトヤ・ブーシヤン・ヴァルマ教授は、ジャワハルラル・ネルー大学で東アジア語研究センターを立ち上げたインドにおける日本研究の第一人者である。すでに教授職は引退していたが、インド日本語教師の会の会長を務めるなど日本文化・日本語の普及に精力的に取り組んでいた。また、デリーにある日本語学習センターの校長も務めていた。

ヴァルマ教授との出会いは、在インド日本大使館からの紹介が始まりである。インドでもやはり最初は特段の手立てはなかった。そこで大使館に協力者の紹介を求めたのである。そこで紹介されたのがヴァルマ教授である。

A P Uの趣旨を説明し、学生募集への協力を求めたところヴァルマ教授は快諾してくれ

た。APUの教職員はヴァルマ教授とともに、インド各地の高校や大学への訪問を開始した。活動の中心はヴァルマ教授の自宅があるデリーであった。それまでは、高校を訪問しても校長に会うこともできなかった。学生推薦の話など論外であった。しかし、ヴァルマ教授が立命館大学の客員教授として訪問活動の中心になったことで状況は一変した。デリーにある有名校への訪問によって、推薦協定の締結が進むようになった。

活動は、デリー以外にも広がっていった。高校や日本語学校の訪問地は、ムンバイ、ブネ、チェンナイ、コルカタ、ラクノウ、チャンディガールなどインド全土に及んだ。ヴァルマ教授の教え子から協力の申し入れが出るようになっていた。デリー市内の訪問を終え、APUのメンバーが自宅に招かれたことがある。APUのメンバーは慣れない地での訪問活動に疲れきっていた。しかし、六〇歳を越えたヴァルマ教授は、直ちにパソコンを開き、その日の仕事のまとめを始めた。その精力的な仕事ぶりに、メンバーは感服していた。

ヴァルマ教授とインドグループの活動は着実な成果を上げた。APUには一七名の学生が一期生として入学した。その後は年々着実な成果を上げ、二〇〇三年には四〇名を超えるようになっていた。日本の大学へのインドからの学部留学は決して多くはない。その中でAPUへのインドからの国際学生数は際立っている。

教授は幾度となくAPUを訪問し、学生と交流している。その温厚な人柄にインドの学生は親しみを感じていた。日本食のだし汁にも気を遣う厳格なベジタリアンでもあった。

また、教授は世界で初の日本語とヒンディー語の辞書『日印事典』の発刊や、専門である俳句文化の普及にも貢献し、二〇〇二年には正岡子規国際俳句賞を受賞している。残念ながら二〇〇五年に他界された。

初年度に入学したチョウドリー・シュラッダは成績優秀、かつ多くの活動においてリーダーシップを発揮した。卒業後三洋電機に入社した。アフジャール・バルティーはインド舞踊の名手であり、二〇〇〇年四月に開かれた新入生による新入生のための歓迎会で、見事な舞踊を披露し、APUの国際性を参加者に印象付けた。バルティーは今、家族を呼び寄せ、別府でインド料理のレストランを開いている。

学生がやってきた

世界から学生がやってきた

フナキ・カイツウは国立トンガ銀行に勤めていた。ある日、出勤して手にした新聞の「将来のリーダーを育成」という文字に目がいった。APUの広報記事であった。フナキのAPUへの旅はそこから始まった。

フナキは、国のリーダーを育てる中高一貫校の「トンガハイスクール」の卒業生である。学校ではトンガ語は使わずに英語だけの教育が行われていた。そこに通っているだけで一目置かれる学校だった。フナキが日本に関心を持ったのはオーストラリアに留学したときである。そこで親しくなった日本人学生からいろんな日本の話を聞いていた。日本は美しい国だと思っていた。日本の戦後の急速な成長にも関心があった。日本のマネジメントを学べばトンガに貢献できるのではないか。APUがいう多文化環境で学べば国際的にも貢献できるのではないか。

APUの面接は、サウス・パシフィック大学のトンガキャンパスで行われた。合格したら、南太平洋地域の代表として頑張つてほしいという言葉が心を打った。

フナキにとって別府に一人でたどりつく旅は、APUに合格するより難しかったのかも

しない。成田空港に着けばすぐに大学に着くと思っていた。オーストラリア留学では大
学のあるシドニーは空港から近かった、その思いがフナキにはあった。成田からAPUに
電話して初めて行き先が遠いことを知った。まず羽田空港に行かなくてはならないので、
人のよさそうな年配者に声をかけたが、英語が通じなかった。ダメを示すジェスチャーだ
けが返ってきた。

それをみていたカップルが声をかけてくれた。成田まで一緒だったフィジー帰りのカッ
プルだった。二人はわざわざ羽田まで送ってくれた上、荷物の重量オーバーで困っている
フナキを助けてくれた。セキュリティを通り姿が見えなくなるまで手を振って見送って
くれたという。日本に来て、日本人のやさしさをフナキは実感した。

APUにはいろんなルートをたどってやってくる学生がいる。ルーマニアから来たスク
ンピエル・ミハイもその一人である。APUは直接訪問できない国には大使館に協力を求
めていた。大使館を通していろんな情報もたらされた。日本とルーマニアとの友好協会
「ニポニア協会」についてもそうした活動の中で知ることができた。この協会にも学生推
薦を依頼していた。ミハイはそこから推薦された学生である。彼は、大使館勤めの父親と
ともに日本に滞在し、東京都立国際高校に通っていた。日本語の堪能なルーマニア学生、

APUでは貴重な存在であった。

APUにはリトアニアからの学生もいる。リトアニアとAPUとのつながりは北海道にある附属高校、立命館慶祥高校からの縁である。慶祥高校は修学旅行でリトアニアに行っていた。そこでできた縁でAPUへの留学の道が開かれた。リトアニアからは初年度三名の学生が入学している。

別府事務所の取り組み

最初の仕事が事務所探し

APU建設予定地の大分県別府に事務所を設置したのは九七年一二月。九州とはいえ乾いた風が冷たい年の暮れだった。開設準備の現地事務所の課長の発令が一〇月一日。別府へ行って最初の仕事となったのは事務所探しだった。地元の金融機関などに相談をしながら

ら、あちこち探し回った末、閑静な住宅街莊園町にある薬局の二階に決めた。地元で歓迎されると思っていたら、意外なことに事務所設立当初は世間の風はむしろ逆風。

これが県市税の正しい使い方か？ 一私立大学に市有地を提供し、財政的にも大きな出費をしているのか？ 温泉は大丈夫か？ 伝染病は？ 新大学設置の意義というよりもむしろ地元の利害がどうなのかという観点で反対運動が起きていた。

九五年九月にAPU創設について大分県、別府市、立命館の三者での共同記者会見が開かれて以降、反対運動の主なものだけでも「十文字原を守る市民の会」や「立命館アジア太平洋大学問題を考える会」「市民が主役の会」があった。あとは専門家からもいろいろなと批判され、知事と市長を相手取る訴訟まで起きるという中で、それらをきちんと受け止めながらもいかに新大学の開学に向けて準備していくかが別府事務所の課題だった。

九七年四月に市内六カ所で住民説明会を開催した。これは都市計画決定の手続きの一環として開催されたものである。環境影響評価のところではゴーサインを出してもらったような取り組みだった。それと並行して訴訟も続いているという、まさに嵐が吹き荒れていたときに別府入りしたことになる。それでも一方では、設置に向けて経済界や民間のグループから支援するという表明もあり心強かった。特に別府JC（青年会議所）のメンバーは商

売とは離れたボランティアで支援してくれた。別府事務所に赴任した課長は、立命館を愛してもらいたい、自分は立命館大使のような思いで、地元でのさまざまな対応を行っていた、と振り返る。

立命館大学の学生も協力

別府事務所は開設してから三カ月程度で、会った人が七〇〇人を超えするという人的ネットワークづくりの日々。住居確保についてもセミナーなどの働きかけをし、国際学生支援の取り組みに向けた学習会などを県・市と協力して事業を進めていった。地元情報誌・マスコミの対応などもしたが、実際にはまだこの頃はマスコミ対応も弱かった。まだまだ九八、九九年はAPUが浸透していなかったと言える。

キャンパスが作られ、開学が近づくにつれて大きな反対運動は影を潜めていったが、だからといって「じゃあ、歓迎されているのか」と言えばそこまでは行っていない状態だった。地元にとって身近な存在になるために、当時大分大学の留学生を登場させ、竹瓦温泉を使ってテレビコマーシャルを作ったりもした。

立命館大学からの支援も受けた。開学前から何回もスポーツ関係の部の合宿や交流試合

を行い、別府の冬のイベントである「ぺっぷクリスマスHANABIファンタジア」のときにはチアリーダーや吹奏楽部が活躍、城島^{きじま}ジャズインにも立命館大学の軽音楽部が出演した。そうやって立命館大学の学生にいろいろと登場してもらい、立命館に親しんでもらうこと、大学生の文化やスポーツを身近に感じてもらうことを別府事務所として意識的に行った。

また、イベントだけでなく、立命館大分講座を九八年六月以降、月一回のペースで開催。「立命館はちよつと違うな」「おもしろいな」というファンを作っていく働きかけもした。月一回来てもらった先生方には、地元雑誌『CONKA』誌上のシリーズとして地元のいろんな著名人との対談もしてもらっている。

APUからの提案

いよいよ開学が近づいた頃、別府事務所は、地元に対する「APUからのプレゼンテーション」を行った。県・市のまちづくりに対して、立命館の側から提案・協議をするもので、県・市の政策にどう生かしてもらうかを考えながら「ひとづくり」「まちづくり」「えんづくり」を掲げて「提案」を発表。それをリーフレットにして全戸に配布し、民生委員

の集まりにも持参し、別府事務所のスタッフが地域や生活についてのプレゼンも行った。開学一年前になると京都の新大学開設準備課で準備していたメンバーが別府事務所に合流して二課体制として地元準備にあたっていくことになり、一人ひとりが夜の自治会などの集まりに出掛けていった。

スタッフが特に感謝したのは、国際交流推進協議会が中心となり、メンバーの河島昭彦氏などが「住宅部会」というものを作ってくれたことだった。これはアパートやマンションなどを作って学生に住んでもらえるようにするという取り組みだった。「すぐ隣にひよっとしたら国際学生が住むかもしれない、怖い」という声に「そうじゃない、こういう風にしていきましょう」と国際交流推進協議会のメンバーの、特に住宅部会の関係者の方々がスタッフと一緒にあって説明。自治会などに入っていくてくれた。立命館側だけでなく、第三者的に、あるいは別府に住んでいる地元民の立場から説明、意見交換する場に入ってくれたことは大きな支援になった。

住宅部会の人たちは「新しい家族ができるということとは素晴らしいことですよ」という話などをして、高齢者には「お孫さんができるんですよ」と説明した。特に高齢の人々は、最初はとても不安で差別的な言葉を投げかけたりしていたが、怖いもの見たさなのか案外

すぐに受け入れてくれて、一緒に暮らしてみたら「日本人の子どもよりも礼儀正しい」「うちの孫よりもいい」といichばんのファンになった。しだいにホームステイの登録も増え、ホストファミリーの集いなども開催した。地元に一五〇ある自治会の会合をピックアップして訪ねてはAPUについて繰り返し説明し、スタッフが会った人数は一〇〇〇人を超えた。

ある職員が、九九年一二月下旬に別府市に移り住み、ケーブルテレビの契約をしようと電器店に行った。書類に「勤務先、立命館アジア太平洋大学」と書くと、その電器店の奥さんが、突然、「私、ドーベルマン飼おうと思ってます」と言った。「なぜですか」「うわさではAPUができると外国人がいっぱい来て、それと一緒に労働者もいっぱい来て、治安が悪くなると聞いたけん」とにかく外国人というだけで誤解されている。ケーブルテレビの契約は一〇分くらいで済むのだが、これは捨ておけないと「いや、違うんですよ。半分は外国からの留学生、半分は日本の学生なんです。一年目は寮に住んで十分に日本の生活に慣れさせます。教職員もちゃんと指導するんですよ」という説明を一時間くらいした。

開学前の認識はこういうものだった。中には「別府に韓国や台湾、中国からたくさん

観光客が来てくれるだろうから、それはいいけれど、定住者はGHQがおったとき以来や」そんな話が出た。GHQとは第二次世界大戦の後、敗戦国の日本を統治した連合国軍総司令部のことだから、五〇年以上前の話だ。つまり、観光でお金を落としてくれるのはいいけど、定住は困るというのだった。これではいけないと市民との関係など、草の根的な活動を地道に続けていった結果、それが実を結び、だんだんと細かなネットワークもできていった。開学して半年くらい経った頃にその電器店の奥さんから電話がかかってきた。なんと韓国の女子学生をホームステイで受け入れてくれているという。嬉しいニュースだった。

住居の確保

住宅の開発は学校法人立命館が出資している子会社クレオテックが行った。同社のAPU事業部が別府市石垣東につくられたのは九九年四月だった。ここが学生たちや教員の住居を開拓する使命を帯びていた。

国際学生は入学するとAPハウスに入るが、一年後には十文字原の丘から別府の町に下りてくるのだ。日本人学生の住居確保に加え、教職員、四〇〇名を超える国際学生の住居

を確保しなければならなかった。例えば、地元の業者にマンションを建設してもらおうとすると、銀行の融資を受ける期間、建設の期間で約八カ月を見て、二年がかりの準備が必要だった。

地元の建設業者、不動産屋を回って、建ててくれる人を探したり、貸してくれる部屋を探したりの日が続いた。そしてついに大がかりな説明会を開くに至ったのだった。

二〇〇〇年四月、別府市の中心地にあるビーコンプラザで、立命館とクレオテックが国際学生の住居確保について説明する会を開き、別府市、大分市の建設会社、不動産会社の人たちが約四〇〇人が集まった。「入学案内手続きに、住居は大学がつくった会社のクレオテックが斡旋するので安心してください、という文言を入れます」と説明。これは金融機関の融資への安心材料となった。その説明会以来、いろんな問い合わせが来るようになって住居問題は前に進み始めた。

目標は一〇〇〇戸とし、建築するのは大学まで二〇分の距離の亀川、石垣、鉄輪地区。近くにコンピニもあり、生活に不自由しないところなどの条件でお願いしていった。

昔、留学生が部屋をめちゃくちやにしたという情報が広まっていた、留学生への賃貸は難航したが、NTTと大分交通に頼んで寮をリニューアルしてもらったり、独り暮らしの

老婦人が留学生を置いてもいいよ、と声をかけてくれたりした。○一年には、国際学生が入居できる大分学生交流会館（現・大分国際交流会館）が建設されるなど、だんだんと目標を達成していった。

「よくぞここまでやった」の土木建設

残土を持ち出さない工事

別府市十文字原の草原は、それまでハンググライダーの基地になっていたほど高低差がある場所だった。いちばん低い所といちばん高い所では一二〇メートルの差があった。山を平らにし、その残土で谷を埋めるという環境対応の工事が進められたが、現在の体育館とスチューデントユニオンの建物の間にあった谷は四〇メートルもの深さがあった。表土は黒ボクと呼ばれるフカフカした火山灰土で、薄い所が一メートル、厚い所は四〜五メ

ートルあった。この土は石灰、セメントを混ぜて硬くしないと埋められないためコストがかかった。

工事現場には電気もガスも水道もなかった。電気は近くの大分自動車道サービスエリアまで来ていたから引くことができたが、工事に大量に使う水は当面、近くの農業用水路を利用させてもらうことになった。雨が降るとすぐに濁る農業用水をポンプで汲み上げて、浄水器を使って飲料水にもした。

十文字原の風が強いことはよく知られているが、台風の場合は格別で、「非常時に担当者とは現場にいること」という立命館の決まりに従って現場に泊まり込んだスタッフは、プレハブのトタンがメリメリとはがれる音に一睡もできなかった。翌朝、外に出てみると、コンテナが上下逆さにひっくり返ってゴロゴロしていた。

そういう元々の地形や天候の厳しさを知っている人たちは、完成したAPUの姿を見て、「よくぞここまでやった」と感心する。

十文字原は「第三種風致地区」という、景観を含めて周辺地域との調和をはかる地域に指定されていた。そのため建物の高さ制限が「いちばん高い所で一二メートル」となっていた。「屋根は勾配をつけること」との規定もあった。大学の建物は大きいから勾配をつ

けた屋根だけで五メートルになってしまふ。すると二階建てがせいぜいだ。低い建物をたくさん建てれば、膨大な費用がかかる。

APUは日本に例のない国際大学なので、正面から見たキャンパスの景観、あるいは別府の市街地から見たキャンパスの景観をシンボリックなものにしたい、と立命館側は考えた。そのためシンボルとなる塔を建設したいということなどを別府市の都市計画審議会にお願いし、別府市の審議会の了承を得た上で、次に大分県都市計画審議会の了承を得た。塔の高さは二二・五メートル、その他の建物の高さは一五メートルということで許可されたのが現在の姿になっている。

徹底した環境対応

工事にあたっては反対意見や不安材料がいくつもたらされた。「大規模な造成をする」と温泉の泉源に影響が出るのではないか」「工事中に土砂が崩れて下方の住宅へ被害を及ぼすのではないか」「工事が活断層に影響して地震を誘発するのではないか」

このうち工事責任者として明確に答えられないのが活断層の問題だった。大分大学の地理学の先生に活断層の調査を依頼し、調査の結果二千数百年の周期で地震が起きているこ

と、この次起きるのは千数百年後であることが判明。関係者一同、ホッと安堵した。

十文字原に植物の希少種が多いという問題では、ミヤマキリシマ、キスミレ、ヒゴタイ、エヒメアヤメ、オオナンバンギセルなど植物学的に貴重なものはすべて正門付近に移植した。

今のAPハウスのあたりは森林だったが、別府市が市有財産として木を売却したあと大量の枝や枯れ葉が残った。工事現場から残滓を持ち出さないことを原則としていたので、これをどうしようかという相談になった。そして熊谷組が開発していた「ネッコチップ工法」を採用、チップに現地発生土や草の種、肥料などを混ぜて法面のりに塗る工法で、チップを捨てずに生かすことができている。

第4章

世界から集まって学ぶ、
世界に羽ばたく



異文化の渦巻くAPハウス（学生寮）

雪が降った。

生まれて初めて雪を見たベトナム、タイ、インドネシア、アフリカ、シンガポールなどの学生たちがAPハウスで大騒ぎ。

短パン姿で部屋にいた北海道出身の田澤直也はドアを開けるといきなりかつぎ出されて、雪の上に投げられた。

「ナオヤ、雪だ！」

南の国の学生たちが宝物のように冷蔵庫に入れた雪が溶け出して、水浸しになった床を道家麻衣子が黙って拭いた。

異文化交流を感じる瞬間だった。

異文化渦巻くAPハウス

真夜中のお出迎え

巨大な学生寮・APハウスには、住み込みの管理人はいない。学生部や委託業者のサポートを受けて、寮を運営しているのは学生であるRA（レジデント・アシスタント）だ。国際学生を日本の生活や大学生活に導き、寮生活を有意義なものにするために重要な役割を果たしている。

このRAが、新入生でありながら国際学生たちのお世話をして涙ぐましい活躍をするところからAPUの幕は開けられるのである。最初のRAは三五名だった。立命館の附属高校の出身者はほぼ全員RAになった。三五名のうち二〇名が立命館慶祥高校、立命館宇治高校、立命館高校の卒業生で占められていた。

田澤直也は立命館慶祥高校二年の修学旅行にベトナムを選んだ。修学旅行から帰って、まだベトナム体験の熱が冷めやらぬ一カ月後に、APUの説明会があり、それまでの理系志望をやめて、APUを選んだ。黒木まゆみは大阪府の出身だが、立命館大学を受けようとして取り寄せたパンフレットの中にAPUの冊子が入っていた。イルカのマークがついたAPUのパンフレットは希望と夢にあふれていた。ここに入れば、したいことが何か見つかるのではないか、そういう確信に近いものを感じてAPUを受け、RAの募集にも応募した。村上舞は福岡県出身。高校二年のとき韓国にホームステイしたことからアジアや国際問題に興味を持った。新聞でAPU開学の記事を読み、他の大学は受けずにAPUだけ受験し、RAにも名乗りを上げた。

RAに選ばれた学生は、普通の新入生より半月早い三月中旬に研修を受けるためAPハウスに集められた。「そのときAPハウスは一棟だけしか建っていないくて、私たち三五名はそのAPハウスに入って、研修を受けたんです。普通なら、まず下宿とかアパートを探して、お部屋に道具を揃えて、となるわけですが、私たちは最低限の荷物だけキャリーケースに入れて持って来て、いきなり机に向かわされて研修でした。外へ出ると寒いし、風が強いし、夜になるとAPハウスは静まりかえって真っ暗やし。えーッ、私たち何してる

のかなあと、何だか状況がよく見えないわけです。普通の大学なら先輩がいて、校風とか
が分かるのに、改めて、あ、ほんとに新しいんだアーって、思いましたね。嬉しいけど、
ちよっと心細いような……」。 (黒木まゆみ)

三月二〇日あたりから国際学生たちが続々と到着し始めた。福岡空港まで迎えに行くの
がRAの大きな仕事となった。お迎え組は、福岡空港と大分空港の二手に分かれた。毎日
の迎え時間の割り振り、伝達事項、迎えた国際学生をどのフロアに連れて行くかの割り
振り。「別府留学生援護会という団体があつて、代表の三宅貞宗さんが車を出してくれて、
その車にRAが二、三人乗って福岡空港に迎えに行くんです。午前一時頃着く飛行機の国
際学生を、プラカードを持って迎えます。ここから国際学生を連れて三宅さんの車で帰る
組と、昼便を待つ組に分かれて、一人か二人は福岡空港にいるわけです。昼便を迎えたら
高速バスと路線バスでAPUまで連れて行くんです」。 (田澤直也)

RAも大変だったが、国際学生も楽ではなかった。ベトナムは自転車かバイク中心の国
だったから、学生たちはバスに乗り慣れておらず、福岡空港から高速バスに二時間乗って
いるうちに気分が悪くなり、地元のバス停・鉄輪で降りたら二人が吐いた。それでも、次
にまた路線バスに乗り換えてAPUにたどり着くしかない。路線バスは山道をくねくね曲

がって上って行くから、揺れは高速バスの比ではない。APハウスに着くと車酔いしていたベトナムの学生たちはそのままトイレに駆け込んでしばらく出てこなかった。

フィリピンの学生が成田空港で財布を落として、休日にもかかわらず東京オフィスの職員がお金を届けに行ったり、インドネシアの男子学生がAPハウスに着くなりバリバリの関西弁で喋って日本人学生を驚かせたり、APハウスは小さな事件の連続だった。「インド出身の一期生とこの間再会したら、新入学のとき私たちが迎えに行ったことを覚えていて、真夜中に誰かが迎えに来てくれるとは思わなかったよって。あれで、初めて報われました」。(黒木まゆみ)

初めて日本の、それも夜は真っ暗な十文字原に来て、たくさん課題にうちひしがれ、ホームシックにかかる国際学生を励ますのもRAの仕事だった、と村上舞。

異文化のサプライズ

APハウスは、住む人が五〇カ国なら五〇通りの、八〇カ国なら八〇通りの生活習慣が入り乱れる。そこへ「APハウスのルールはこうですよ」ということを教えるわけだから、RAも戸惑ったり、悩んだりした。職員たちも初めての経験だから同じように暗中模索だ



国際学生のお世話役をするRA（大分合同新聞社提供）

った。まず、ゴミを自分で捨てに行く、という日本では当たり前のことが難しい。あるインドの学生にとっては、ゴミ捨てはお手伝いさんの仕事であるらしい。自分でゴミを捨てなさいと言われ、泣きながら捨てに行っていたのを目撃されている。ゴミ袋に何もかも一緒くたに入れて、市役所から「収集不能」のステッカーをベタベタ貼られた袋が山積みになったこともあった。

最初に建てられたAPハウス1は五階建てが一棟。すべて個室で、部屋にはベッドと机と整理棚と洗面台とトイレがついていた。シャワールームとキッチンが共同である。キッチンは各階に作られていて全部で一カ所あった。そのキッチンにはガスレンジが二台ず

つ、オーブンレンジと電気コンロが一台ずつ置かれていた。問題はガスレンジについている魚焼きグリルだった。日本人なら「ここでお魚を焼いて食べます」で済むことだが、魚を焼く習慣のない国の学生も多い。キッチンで度々起きたのは、魚焼きグリルで別の何かを燃したり、水を入れずに長時間使ったりして、中の網を焼失してしまう事件だった。派手な煙が上がって火災報知機がけたたましく鳴り、建物管理の職員が飛んで来るといった騒動がたびたび起きた。八割くらいの魚焼きグリルの網が燃えてなくなったので、開学の年の八月には全部のガスレンジから魚焼きグリルが撤去された。

「あれ、あの子、カップヌードルにお湯でなくて水を入れてるな」とRAの学生が注視していたら、それをオーブンレンジに入れようとしているので「ちよつと待ったア!」ということもあるし、電気コンロに食パンを直にのせたり、もう、いつ何が起きるか分からない状態。

シャワールームも事件の連続だった。一カ所に五〜八室ずつ作られたシャワールームは、まず外側のドアを開けて入り、服を脱いで、次のドアを開けてシャワーを浴びるようになっていたのだが、内側のドアを開けっ放しでシャワーを浴びて脱衣場の床をびしょびしょにする人が出ると『OUT OF ORDER——使えません』の札が下げられて、使え

るシャワールームが減っていく。これはまだ良い方で、シャワールームに入ったら、なんとウンコが……という事件も続発した。日本人はトイレで紙を使うが、用を済ませた後、水で洗う習慣の国も多い。そういう国の人から見るとシャワールームで用を足すのが当然ということになるらしい。

シャワールームで用を足してはいけないというお触れが一期生の間には行き渡ったのだが、二回生からRAになった松本育恵は、RAどうしのミーティングのとき驚いたことを覚えている。二年目からは国際学生もRAに加わったのだが、ミーティングの途中、インドネシアの学生がシャワールームに入った。仲良しだったので「シャワールームで何してたん？」と聞くと「おしっこ」。「えーっ、シャワールームでおしっこはあかんよね」とシンガポールの学生に言う。「え？ 私もするよ」。松本はみんなにルールを教える立場のRAどうしても感覚が違うことに戸惑いを覚えたという。

「花祭り事件」

寮生にとっては語りぐさの有名な「花祭り事件」が起きたのは、APUが開学して間もなくの五月だった。スリランカの女子学生たちがお釈迦様の生誕を祝う花祭りの飾りを数

日前から一生懸命作っていた。それをA Pハウスの玄関に飾り始めたとき、大学にイスラムの学生からクレームがきた。大学がいちばん神経を使っていたのは複雑に異なる宗教の問題で、原則として「宗教行事はA Pハウスではしてはいけない」ということが決められていた。その女子学生たちはぜひ飾りたいというし、飾るだけならお祭りと一緒にいいじゃないかという賛成意見と、いや、ここで一つを許可したらあれもこれもと混乱を招くのは目に見えているという大学側の意見。スリランカの学生は「国際大学なのにこんなことが認められないなら、私は国に帰る」と泣き出す。みんながそれぞれ主張したから、蜂の巣をつついたような大騒ぎになった。飾りは花祭りの日の前夜〇時までには飾らねばならないという決まりがあった。〇時ぎりぎりまでスリランカ学生と教職員が話し合い、「お祭りと見なして飾っても良い」が「玄関はみんながくぐるので避ける」ということになった。飾りは「スリランカの文化を紹介する」ということで会議室に飾られた。

一日五回、メッカに向かって祈るイスラム教のお祈りも、自室ですることと決められた。ただ、どうしても時間が間に合わないときは教室で祈る場合もあった。祈り始めたイスラムの級友、「ほう、メッカはこの方角か」と思ってたらずと見る日本人学生。

みんながいるロビーでは特定の宗教行事をしてはいけないということになっているので、

逆に日本の他の場所では考えられないような堅苦しい事態も起きる。A Pハウスでは正月の松飾りも、ハロウィーンのかぼちゃもクリスマスツリーも飾らないのだ。

シンガポール出身のマザー・ハミドは、自分の名前を「お母さんじゃないけれど」と言いながら、国際学生としてA Pハウスについてこう述べた。「カレーの匂いが嫌な人だっていたよ。キッチンの一つだし、みんな努力、我慢が大事です」。

こうしたA Pハウスの異文化環境で学んだことについて、R Aを務めた道家麻衣子は次のように語っている。

「世界情勢を見たときに目を覆いたくなるような出来事があった、もしかしたらそれはA Pハウスで暮らした友達の国で起きていたり、友達の国がきっかけになっているかもしれないと身近な出来事として感じられるようになりました。そしてA Pハウスで暮らし、A P Uで学んだみんなが心豊かになって帰国すれば、きっと世界から戦争はなくなるでしょう」

A P U 的特訓演習

死に物狂いで勉強するA P U 学生

「バイト先で休み時間にレポート書いてるのはA P U の学生」と地域の人たちが言ったほど、A P U はレポート提出が多く、試験も多く、みんな遊んでいる暇がなかった。日本人学生は英語を、国際学生は日本語を習得するのに懸命だった。

さらに、日本人学生には自分の勉強だけに専念できない事情があった。国際学生のサポートに多大なエネルギーを使っていたのである。多文化環境とは、つまり、日本の生活習慣を知らない多くの学生がいるということ、それらの学生を支えてこそ、多文化環境は一つのコミュニティになり得たのである。「国際学生をサポートしなさい」と教員も学生に機会あるごとに言っていた。

国際学生には、また彼らの事情があった。奨学金を継続受給できる条件はいい成績をとり続けることである。奨学金を打ち切られれば国に帰らなくてはならない。日本で一年暮らすお金で一〇年暮らせるような国から来ている学生もいたのである。だから、サークルやボランティアに誘われても、なかなかそれに応じられない学生も多かった。日本人学生から見れば、チャッカリしているようだが、彼らにすれば生活がかかっていった。しかし、その環境が日本人学生の刺激になっていた。「私たちもゆるいことはやってられない」と思わせた。

成績優秀者がたくさん出て、成績優秀者表彰制度で奨学金をもらうので、賞金稼ぎの異名を取った清家ゼミの学生たちは、午後四時半から六時の講義時間が終わっても大半が帰らず、午後一〇時くらいまで教室で議論を闘わせた。それから別府市内の家に帰宅するのだが、半分以上は先生の車で飲み屋やファミレスに行き、「今この場でもう一度やれ」などと朝まで、自分の理論を言い、けなされ、突っ込まれ、サファリのような闘いを続けた。

国際学生が、成績評価や受講登録などの大学の措置について、厳しい質問を繰り返すことは先に紹介したが、それは日本人学生にも影響を与えていた。「APUに來た人で黙っ

ている人はおらへん」と齋藤麻衣子が言うように、日本人学生の中にもはつきりものを言う学生が多かった。

APUの授業は朝八時四五分から始まる。最初の頃、授業開始後教員が若干遅れて教室に入るといつかつてあった日本の大学の「慣行」に対して、学生から苦情が出された。「なぜ先生遅れて来るんですか」「時間通り授業を始めてください」。それ以後、始業のチャームを教室で聞くことがAPU教員の慣行となった。それだけではない。「単位制授業料」のおかげで、授業内容に対してもキビシい注文がついた。「私たち、この授業に三万四〇〇〇円払っているんですが、ビデオ見せて終わりですか？」。

齋藤は三年目に立命館大学に内部留学したが、学生たちがあまりにもおとなしく、ゆるいのに呆然とし、あのAPUの死に物狂いで勉強している国際学生たちと比べたら「なんでこんなに勉強せえへんのか」と思って、一年間の予定を半年で切り上げ、さっさとAPUに帰ってきたという。

早期卒業パイオニア

新しいがゆえにつきまとった苦勞

A P Uには早期卒業制度があり、登録しておけば、三年あるいは三年半で卒業することができる。早期卒業を選択して一年か半年早く卒業した一期生は九人いた。

マレーシア出身のリー・エンゴーは高校を卒業してイギリスかオーストラリアに留学したいと考えていた。首都クアラルンプールでA P Uのセミナーがあつたので聞きに行つて、日本で初めての国際大学、英語と日本語のカリキュラムなどが魅力的だったので、A P Uに留学することにした。

セミナーで渡されたパンフレットには、キャンパスや学校を上空から見たC Gの絵が入つていて、キャンパスから同じ目線で海が描かれていたので、すぐ海に行けるんだ！と

思った。福岡空港に着いて、APUまでの道程には深い霧が出ていて何も見えなかった。翌朝、霧が晴れて見たら、エンゴーは自分が山の上にいるのに驚いた。

一年分の生活費も節約できるし、進学するにも就職するにもそれが評価になるだろうと考えて、エンゴーは早期卒業を選択した。一年早く卒業するためには、レポートもたくさん書かねばならないし、授業の前の準備も大変だった。エンゴーはこう言って笑う。

「当時の私のイメージは、朝起きてからずっと言語ラウンジか教室で勉強している。夜も部屋は電気がつきっぱなしだから徹夜してるんだろう。ラーメンしか食べないのだろう……だったみたいなんです」

それほど一生懸命チャレンジして成功した「早期卒業」だったのに、入国管理局で留学ビザから就労ビザに切り替えるとき「事件」が起きた。普通はすぐに許可されるのに、入国管理局の年配の女性職員が頭から疑ってかかり、まるで犯罪者扱い。「あなたは、本当に日本で就労するわけではないでしょう。違法なことをするんじゃない？」と言って、何時間も待たされた。大学から電話してもらってもダメ、内定が決まっていた東芝の採用担当者にも電話して、内定の書類を送ってもらったのに、部署がはっきりしていないから信用できないとまで言われた。

「あのときの、おばちゃんの顔は忘れない」とエンゴーは言う。あんなに一生懸命勉強して早期卒業したのに、しなきゃよかったと後悔した。ビザは後日、大学からの連絡で下りたことが分かったが、東京に出てからも、APUの友達から自分だけ離れていることが、たまらなく寂しくて、早期卒業を悔やんだ時もあったと言う。

東芝での面接試験も、春採用ではなく、特殊な秋採用の形になったので、普通は一次、二次、と進んでいく試験が、エンゴーの場合、一人で朝から晩まで一日中かけて全部行うというものだった。それでも、決してめげない。APUな人だから、採用について強烈なネゴ（交渉）を行い、面接者とやりあった。当時のエンゴーは日本語が今ほどうまくなくて、面接者が「なんとという強心臓」と呆れているように見えた。さすがのエンゴーもこれは「落ちたな」と思った。

ところが、大学に戻ってみると採用の通知が来ていたのだ。うれしいというより驚いたと言う。「振り返ってみると、学生時代にいちばん思い出に残る大きな成長ができました。今でも辛いときAPUに帰りたくてアルバムを見るんです。パンフレットや記事などで写真を見たり。自分は仲間がいるし、支えてくれる人もたくさんいる。APUであんなに頑張れたんだから、辛くてもきつと乗り越えられるって、あの三年間は私にとって大きな励

みになっています」。

APUの伝説を築きたかった

早期卒業プログラムを選択した学生の一人、竹本慎也。「新しいものや今まで世の中になかったものを見たり聞いたり体験したりしたいという思いがすごく強い」好奇心旺盛な性格だと自己分析する竹本は、日本初のプログラムの第一号で卒業できるということに魅力を感じ、早期卒業を選択した。自分の好奇心が大きなモチベーションになり、ただ単に卒業するのではなく、何か目的を持って過ごした方がよりエンジョイできるのがAPUという場。「とても高いハードルを設けられている制度で、点数をハイレベルで取っていないと卒業が認められない。そういう意味では、勉強する環境を自分で作り、目標を設定して自分を追い込んでいけましたし、その結果、誰よりも早く卒業したという自分のヒストリーになり、APUにも名前を残すことができました」と竹本は誇らしく語る。竹本は卒業後、博報堂に勤めている。

二〇〇三年にAPUの校友会が発足したが、発足当初から竹本が会長だ。まだまだ若い組織だが、卒業生が集まれる場を作っていくことを目的に、関東、関西、九州でパーティ

などを開催し、人をつなぎ、接点を持てる場を徐々に作り上げている。

二〇〇八年、入学時に終身会費を納めてもらい、現役学生を準会員にするという制度改革も行った。これまでは卒業生を中心とした校友会だったが、「学生とも接点を持てる、APUに関わるあらゆる人をつなぐ」をコンセプトに、就職懇談会などを開催して、現役学生が先輩の生の声を聞けるようにした。「年々、APUらしさが変わってきていると言われていますから、開学当初の一期、二期生の先輩とふれ合う機会を増やしていったら、学生にとっても幅広い見聞が持てる場を広げていきたいと思います」。

グローバル市民への第一歩

グローバル社会への準備

卒業生たちはこう語っている。

インド出身のチョウドリー・シュラツダがAPUを選んだきっかけは、高校の校長先生からの紹介だった。多様な文化・日英二言語という環境でAPUが保証する世界レベルの教育——このすべてがこれまでほとんど知らなかった国で受けられ、将来の素晴らしい機会につながるように思えたからだ。彼女は家族の中で、最初に外国に行く女性で、しかもインドではまだまだ留学先に選ぶ人が少ない日本に行くことでみんなを驚かせた。開学までもないAPUでの学生生活は、すべてがゼロからのスタートだったが、大学側は学生がAPUに何かしらの足跡を残すよう後押ししてくれた。開学記念式典で学生スタッフの一員として参加したり、世界学生サミットで議長を務めたり、またサークル和太鼓^楽でも活動した。一つ一つの出来事が忘れられない大切な思い出となっている。

このようないろいろな活動のほかに、多様な背景を持つ人々に接したことも、彼女にとってユニークな経験の一つとなっている。多様な文化・習慣を持つ八〇カ国以上の国・地域から学生が集まるAPUで、それまで当たり前と思っていたことを常に問い直さなければならなかった。しかし、その結果、視野が広がり、異なる考えや意見を持つ人々を評価し理解することができるようになった。また、授業や課外活動で世界中の学生たちと協力することで、加速するグローバル社会への準備を整えることができた。



ケニアの国際学生は5000m全日本大学の女王に——毎年、全日本大学女子駅伝大会に出場のAPU女子陸上部

三回生の時に三洋電機でインターンシップをしたことから卒業後も日本で働きたいという意思が固まった。その後、三洋電機の採用試験に合格し、大阪本社の人事・企画戦略部門、東京支社のグローバル・コミュニケーション担当をさせてもらった。APUで修得した言語スキル、コミュニケーションスキルを活用できたこの業務は合っていて、とても充実した日々だった。APUも含め六年間日本で生活し働いたことで、積極的に日本に対する理解を広げ深めることができたが、自分に適した業務に快適さを感じ始めていた時、もっと刺激的な環境に移る時がきたことに気づいた。

そこで、教育を目的とし、世界二〇カ国

以上を船で訪問する「ピース・ボート」というNGOに参加することにした。ピース・ボートでは、さまざまな背景を持つ講師の方々と毎日協力しながら業務を行い、訪問先の国々でそれまで経験したことがないような困難な状況に直面するたびに、自分の適応性・柔軟性が試された。

現在は、新たな課題を求めてアメリカに渡り、Institute of International Educationという世界でも最大級の国際教育・研修を推進している組織で、女性技術者養成プログラムのコーディネーターとして働いている。自分が最もやりたいこと、夢を実現していると実感させてくれる仕事をしているなんて、最高の気分だと言う。

ベトナムでアパレルブランドを起業

ベトナム出身のホアン・ベトナムは幼少期二年間日本にいたため、大学はまた日本で勉強をしたいと思っていた。ちょうどその時、APUの存在を知り、英語力が身につくこと、勉強したいと思っているマネジメントが学べることから、APUへの進学を決めた。APU入学後は、日々たくさんの国の人と接し、異文化空間を存分に体験できたことで専攻の勉強だけでなく、英語力も日本語力も身につけることができた。また、授業では成功して

いる企業家の方々の特別講義を受けることがたくさんあった。そんな講義に興味を持ち、毎回参加しているうちに、自分もいつか企業家になりたいと夢を持つようになった。二〇〇三年一月、初めてAPUで開催された「ベンチャービジネスプラン・コンテスト」に参加し、優勝することができた。APUでの体験一つ一つの出来事が今の自分に結びついていると言う。APU卒業後は、東京で109の店員をしながらファッションの勉強をした。そしてその後ベトナムへ帰り起業。現在は、オリジナルアパレルブランドのオーナーをしながら、日本語のできる司会者としてテレビでも活躍している。

研究者を目指して

フィンランド出身のトイボネン・トゥツカがAPUに入学したのは、いろいろな偶然が重なった結果だった。「Up with people」というアメリカのNGOが主催した世界各地のパフォーマンス・ツアーを終えたばかりだったが、好奇心から何の違和感もなくAPUで学ぶことにした。社会学を学びたいと思っていたが、どちらかといえばAPUの活気に満ちた国際的なイメージに惹かれた。そして、実際にAPUで学んでもこのイメージが決して崩れることはなかった。

A P Uでは、将来研究者になることを目指している者にとって、勉強心を刺激してくれるセミナー、やりがいのある言語クラスやさまざまな文化交流プログラムなど、とてもプラスになる経験ができた。

幸運にも友情を育むこともできた。友人たちと過ごした楽しい時間ほど、大切にしている思い出はない。親友と温泉に入ったり、一緒に料理をしたり、いつまでも会話を楽しんだり、キャンパス内にあるミレニアムホールでのコンサートに参加したりした。また、「泉都大祭」に参加し、お神輿を担いで体中が筋肉痛になったことも決して忘れられない。このお祭は人生の中でもいちばん楽しく、そしていちばん痛かった思い出の一つとなった。トゥツカはまた、A P U時代を振り返って、管理運営をめぐって、ルール重視のヨーロッパ文化と慣行重視の日本的習慣との間に違和感を持ったこともあるという。

彼は、現在、オックスフォード大学の博士課程で社会学を専攻している。研究テーマに日本の若者問題を選び、二〇〇八年の夏には、京都大学に研究のために滞在している。そのとき久しぶりにA P Uの仲間たちや教員と懐かしい時間を送った。今後はさまざまな学術的職業に携わり、社会政策に関する知識を深めたいと考えている。その後は、政府の諮問担当官となり、より公正で維持可能な、人々を活気づけることができる社会システムを

創ることを目指している。

学長、副学長の卒業式

学生たちからの卒業証書

『EXP Oは実験の場だ。人生は博覧会だ!』というproject EXP Oのメンバーが、卒業式にサプライズのイベントを用意した。

二〇〇四年三月一九日、それは一期生の卒業式の日であった。卒業式終了直後、紋付き袴姿の小森勇佑が壇上に上がった。「今から坂本学長と慈道副学長の卒業式を行います」。帰りかけていた卒業生たちが、ざわめいて席に戻った。坂本学長と慈道副学長もこの年を最後に学長と副学長の職を終えることが決まっていた。

project EXP Oのメンバーは、自分たちがもらうばかりでなく、学長と副学

長にも卒業証書を渡そうというのだ。卒業証書の文章はEXPO代表の神谷広行が考えた。「卒業生、壇上へ上がりなさい」。スキンヘッドの小森が重々しく言う会場は笑いに包まれた。

卒業証書

立命館アジア太平洋大学学長 坂本和一様

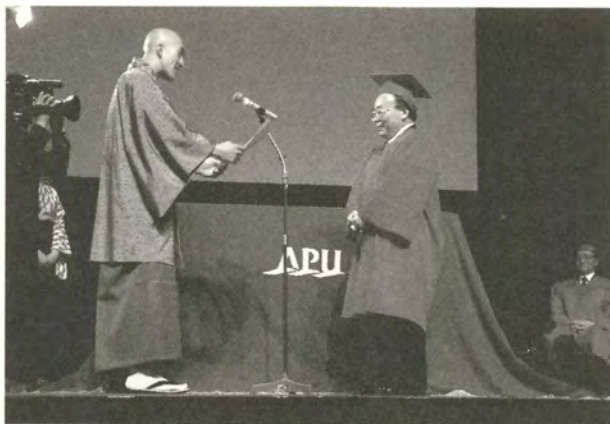
あなたは本学創設者として初代学長として想像を絶する強風、濃霧、積雪にも負けず万物を慈しみ本学の更なる発展を切望し前進し続けた

その功績は絶大でありました

特にあなたのあたたかさ親しみやすさ

それは私共にオアシスのような安らぎを与え心底から癒されました

ここに感謝の意を表しさらなる出会いを希求することを切望すると共に



坂本学長の「卒業式」

本学所定の課程を修めたことを認めます

二〇〇四年三月一九日

立命館アジア太平洋大学

学生代表 小森勇佑

卒業証書

立命館アジア太平洋大学副学長 慈道裕治様

あなたは本学初代副学長として想像を絶する強風、濃霧、積雪の中

職責の遂行に努められたその功績は絶大でありました

特に出過ぎず引つ込み過ぎずに 陰になり日向になり学長を支える

その姿 それは私共の今後の生き方に大きな示唆を与えました

ここに心底から感謝の意を表すると共にさらなる前進を希求することを切望し本学
所定の課程を修めたことを認めます

二〇〇四年三月一九日

立命館アジア太平洋大学

学生代表 小森勇佑

第5章

実録：APU的キャンパスライフ



国際学生も活躍する和太鼓サークル

「うちら入学したとき、先生方が世界規模の理想を熱く語ってた。

一八歳の人にそんなこと言うから、こっちもバンツて、心を開いてしもた」と齋藤麻衣子。

「最初は衝突しないようにキャンパスに仲良しムードが流れてた。

でも、”私の国は……”って本気で話するのは世界中でAPUしかないやん。ここでやって行かへんかったら、どこでやるねん」と、世界歴史教科書博覧会を創った下田亜友美。

世界のどこで災害が起きても「あの子、大丈夫か」と友達のことを心配する。

日本の利害だけではものごとを考えられなくなっている人たち。

真の世界平和を願う人たち。

APUな人たち。

サークル活動開拓史

真つ黒なチューバ

開学すると、ほちほちサークルを立ち上げる学生たちが出てきた。

松本育恵が音楽サークルをつくろうと思ったのは、高校時代、アメリカへ留学したときの体験からだ。ホームステイ先で黒人の英語が聞き取れず、孤独感を味わったのだが、高校で吹奏楽団にいた経験を生かしてマーチング部に入ったときから友達がたくさんできて交流が深まった。APUでも、初めのうち言葉が通じなくても音楽で交流ができるのではないか、と考えたのだ。

いきなり音楽サークル「テキサス」を立ち上げたものの、楽器はどうする？ ジャズは誰が教えるの？ と、難問山積。大学に楽器を買ってくれと交渉を続けたりしていたが、

同じサークルの大分出身の女子学生が大分市のアンドー楽器に頼んでくれた。アンドー楽器の倉庫には、各学校などで廃棄処分になった楽器がたくさん眠っていて、これで良ければと社長の安藤擴さんが快く譲ってくれた。

「その中に、本来は金色だけど真っ黒になったチューバがあったんです。この間、APUの吹奏楽部が大分県大会を通じて九州大会へ行っただんですが、聴きに行ったらあの真っ黒なチューバが出てきて。わあー、なつかしいと思いました。今も音がいいからと大事に使ってくれてたんです」

メンバーにはその後、シンガポールのホテルでアルバイトにピアノを弾いていたという学生や、歌がうまい中国人学生やトンガ出身のフナキなどが、うわさを聞いて集まってきたので「ようやく音になった」という。一期生のサークルはどれも開拓精神に満ちていたというより、自分たちで開拓するしかなかった。

国際学生と「和太鼓」

開学祭などのイベントスタッフを体験する中で国際学生の表現力に魅了された横山芽衣子は、二〇〇一年になって「一緒に和太鼓をはじめませんか」のビラを掲示板で見つけ、

和太鼓サークルに参加した。ピラを書いたのはこの年に入学してきた二期生の沼田れいなだった。地元の和太鼓グループに入っていた経験者だ。

しかし、和太鼓を練習したいメンバーは集まったが、肝心の和太鼓がない。買うには何百万円もして不可能。沼田とともに和太鼓を探すと、別府市役所に眠っている和太鼓があるということで貸してもらえることになった。指導は地元の「八湯太鼓」。衣装は剣道の袴を友人に借りた。○一年五月から練習を始めて、デビューは一〇月に行われた別府ドリムバル。ここでアジアンフェスタの部に出演し、謝礼金として五万円もらえたので早速衣装を買った。さらに別府在住の人が自分の太鼓を無料で貸してくれた。

初期のメンバーは日本人七人、インドネシア人、インド人、ブルガリア人という合計一〇人の組み合わせだった。太鼓のリズムが、言葉の壁を越えて心を一つに通い合わせると、いっても国際学生にとっては疑問符がいっぱい。

「トンコ、ドンドンって何?」。たたき方を音で表現するのが分からない。間を「ツク」で表すのも分からない。「ツクって何?」

この和太鼓サークル「楽」は、学生の間で人気を保ち続け、地元のイベントなどにも出演して、○七年には五周年記念公演を行っている。

悩みに悩んだ学園祭——イベントスタッフの濃い青春

A P U の合格通知には、「入学のとき大学はウエルカムパーティーを開きます」というお知らせと、そのときのイベントスタッフ募集の紙が入っていた。宇侍見勲や小森勇佑たち五〇人のイベントスタッフ希望者は、三月からA P U に集まってウエルカムパーティーの準備をした。このウエルカムパーティーのスタッフを体験した五〇人が、その後、開学してから開かれた「開学祭」と「言語ウィーク」のスタッフに分かれて活躍することになった。

宇侍見ら言語ウィークのスタッフたちは毎週、毎週、違う言語の国際学生たちとコミュニケーションを取って何とかまとめて行かねばならなかった。それは根気のいる仕事で、地味な打ち合わせの連続が七週間も続いたから、言語ウィークを終えたら、ほとんどのメンバーが疲れ果てて、秋の「学園祭」のスタッフには加わらなかった。

続けて「学園祭」のスタッフに加わったのは宇侍見と小森くらいなものだった。その宇侍見がリーダーに選ばれてしまった。副リーダーが小森だった。「いちばん悩んだのがテーマをどうするか」。まず学園祭のテーマを決めることから構成が出来てくると考えた。

国際学生も誘って十数人が参加。毎日夕方五時か六時になると集まり、夜一〇時くらいま

で話し合うのだが、一向に決まらなかった。

言葉の壁も大きかった。今や関西弁がべらべらになっっているインド人のシュラッダだが、「ぼくが喋ると、何を喋っているのかよく分からないとシュラッダが泣く。それを一々通訳していると会議が進まない」。(宇侍見勲)

問題は言葉ばかりではなかった。日本人は夜遅くまで話し合うのは一種の美学、そして満場一致でみんなの意見をまとめねば物事が進められない。国際学生は、「このテーマについて五分考えましょう、ハイ、五分経ちました。結論を言ってください」という方法で会議を進めていく。会議の方法が根本的に違っていた。そのうち、国際学生たちは時間もったいないと会議に出なくなつて二、三人に減つてしまった。

そうこうするうちに夏休みになり、学園祭で紹介しようとしていた各サークルのリーダーを集めた「リーダーズキャンプ」が催された。各サークルの人たちは「あれがしたい」「これがしたい」と元気良く提案してくる。しかし、いちばん大きい団体である学園祭がまだ何も決まっていなかった。宇侍見は考えすぎてリーダーズキャンプの三日間、何も食べられないでいた。そこへ集会があるのでみなさんの意気込みを語ってください、との呼びかけ。宇侍見は中村竜太に、「今、みんなの前に立つたらオレ、学園祭はやりませんと

言つてしまひそうだ」と、その場から走りだした。追う竜太。

「竜太、一発、カツを入れてくれ」。ドラマでは親友に殴られた男が力強く立ち上がるはずだった。ところが竜太の一発で三日食べていかなかった宇侍見はヘナヘナと崩れ、「オレ、もういいわ」。

やはり追つて来た職員が宇侍見を慰めた。「人間な、逃げないかんときもあるで。誰にも許容量があるからな。許容量超えて頑張つたら、後が続かへんねん」。

夏のドラマを知らずにヨーロッパ旅行から帰ってきた小森も、もともと生協の学生代表と掛け持ちだったこともあり、帰つてみたら学園祭には「オレの居場所、ねえなあ」でやめてしまった。リーダーと副リーダーがやめた後、学園祭、APUフェスティバルは挙行された。しかし、みんなほとほと疲れ果てたと見えて、学園祭が終了すると同時に実行委員会は解散。二年目の学園祭は開かれなかった。そして三年目になって「学園祭のない大学なんて」と奮起した川邊裕志や久保元宏たちが中心になって下級生も加わり、天空祭が開催された。これが現在でも続いているAPU学園祭、天空祭のご先祖様になる。

サッカー部、外国人枠に苦しむ——公園での練習から海外遠征！

キムヨンチャン

金容賛は韓国的高校時代からサッカーがいのちだった。APUに入学するとすぐサッカー部を立ち上げた。その立ち上げから手伝ったのが、これもサッカー好きの森若菜だった。京都出身の森若菜は、NGOでバン格拉デシユに行くなど国際交流に関心が深かった。高校三年のとき大学情報誌のほんの片隅にAPUの記事を見つけて、世界中から学生が集まって来るなんて「これ、私のために創られる大学や」と思い込み、APUだけを受験した。開学祭のイベントスタッフを体験した後、サッカー部に。

サッカーは人気があつて、たちまち六〇人くらいが集まった。しかし、グラウンドも更衣室も予算も何もないところからの出発だ。みんなで知恵を出し合った。練習するグラウンドは別府公園や石垣公園にしよう。更衣室はAPUの器具庫。「明日の朝九時に集まるう」と決めたら、部員はバイクやバスで山を下りて街の公園に集合した。

「何もないのが、自分たちで工夫するというエネルギーになった」と容賛は言う。容賛の望みは海外遠征だった。

一方、「サッカーが好きで、いろんなことをちよつと体験したいから入ったのに、週に二回練習、そのうち毎日練習練習で、やめた」とシンガポールのマザーが言うように、練習が本格的になると最初の六〇人が四〇人になり三〇人になって、ようやく闘うクラブ

あったので自衛隊チームと練習試合をしたのだが、強いだろうと思っていた自衛隊チームが、身長一九〇センチ、体重一五〇キロのデリーを見たたんびビッて、「ゴールに黒い大きい人が立ってる」と点を入れられなかった。

放送部をつくる

国外に出たこともないごく普通の高校生だった高橋斉子が親や先生の反対を押し切ってAPUに入学したのは国際大学が楽しそうだし、環境学も勉強できそうと思ったからだ。最初の「地域理解」という授業で中国人、韓国人、マレー人、ヨーロッパからの学生と一つのクラスになったときは、一瞬「ここは、どこだ？」という感覚になったという。

だんだん言葉にも慣れて、環境問題や貧困問題をテーマに話し合ううち、同じ一八歳でこんなにいろんな意見があるのだということに感動。夏休みにふるさとへ帰ったとき日本の大学へ進んだ友達が「大学生活は普通だよ」と言ったので「私の大学は普通じゃないよ」と高橋は言ってしまったという。

「多文化でのコミュニケーションは大変でも面白い!」と感じていた高橋は自主ゼミを立ち上げたり、下級生が入ってきた後、「サークル連合」をまとめたりとエネルギーに

活動。とりわけ、放送部の設立はなかなか大仕事だった。

高校時代に放送部の経験があることを知っていた職員に声をかけられて、高橋は猿渡崇人らと放送部を立ち上げた。ところが、いざ、部を作ってはみたものの、器材は揃っていない、顧問はいないと問題だらけ。日本語の勉強で国際学生は忙しいから最初は日本人学生のみで構成。その後、入学式で国際学生や新入生向けに各サークル紹介のビデオを作るなどしているうちに、少しずつ国際学生も集まるようになってきた。しかし、月三〇〇円の部費について、国際学生から使い道や意味を訊ねられた。彼らにしてみれば「課外活動は余暇的なものなのに、なぜお金がかかるのか」。この質問もまた新鮮だった。

高橋が国の違いを痛烈に感じたのはキッチンで使ったおナベの一件だった。ある日、イスラム教徒の学生と一緒に料理していて、その学生のフライパンで豚肉を料理して「きちんと洗ったからね」と返した。すると彼女は「そのフライパンもういらない。あげるよ」と言った。日本人は普通、宗教について語ることをしないけれど、国際学生はしっかりと自分の宗教観を持ち、それを自分の国の文化として捉えていると高橋は感じた。

高橋は「まさかAPUで働くとは思っていませんでした」が、卒業後APUの職員となっている。

「ふふふふ」

安道幹は立命館の附属高校出身だったから、RAになることを半ば義務づけられていた一人だ。APハウスに初めて韓国人学生の集団がやってきた日のことを安は印象深く覚えている。七〇人の韓国人学生がずらっという、その前にRAが緊張して立っていた。「結局、言葉が誰も分からないので、お互いコミュニケーションが取れないですよ」と安は笑う。「向こうは、もちろん悪い人ではないんですが、じつとこっちを見てるんです。これは民族性なのでしょうが、とにかくじつと……。ほくらRAは萎縮してしまつて」。

このとき韓国語がうまく喋れなかった安は、やがて、「こここりあ」というサークルを立ち上げた。「ぼく自身も在日朝鮮人ですし、韓国人や中国の学生を集めて何かしようか、というのが『こここりあ』を立ち上げたきっかけです」。

週三日ほど集まっては民族問題や差別問題を議論していたが、そのうちに議論する内容もなくなつて「おもろくないな」と、外に向けて発信する方向へと切り替えた。議論した内容を冊子にまとめて配付したり、別府市内に住む在日の子どもたちにいろいろな事を教え、一緒に遊び、交流する機会を増やしていった。

「APUにはあれだけの国の学生がいて、宗教問題や国の問題などさまざまだったけど、もっと本質に迫るような議論ができていても良かったのではないか。本当に闘争が起きてもおかしくない、エネルギーをぶつけ合うことができた環境だったのですからね」

現在、安はサークル活動で経験したことや感じたことを本格的に学問として学ぶために一橋大学大学院に通っている。

We can do it!

アメリカ合衆国オバマ新大統領は、選挙中、聴衆に呼びかけた。Yes, we can! APUの学生たちが、集まると合唱する「We can do it!」これを最初に呼びかけたのは一期生の竹林誠悟である。開学の年の秋期入学式のことだった。誠悟は、入学式の後で行われるサークル紹介のときに、冒頭の代表挨拶を頼まれていた。前日、彼は考えていた。何かAPUのみんなの気持ちが一つになれる、そんなことができないか。誠悟は、高校の早い時期からAPUの説明を聞いて自分の行く大学はここだと決めていた。だから、APUを盛り上げたかった。そこで考え付いたのが、We can do it!だった。なぜそれだったのか、今は思い出せないと誠悟は言う。



We can do it! を合言葉に

当日、水泳部の彼は、スイミングパンツに
スイミングキャップ姿でステージに登場し、
挨拶を終えるや、みんなに呼びかけた。We
can do it! 会場の学生たちはあつけにとら
れ、しばらく啞然^{あぜん}としていた。やがて彼の勢
いに引き込まれた。We can do it! のコール
はしだいに大きくなっていった。

これ以後、学生たちは氣勢を上げるときに
は We can do it! コールをみんなで叫んだ。
こうなるのを後押ししたのは坂本学長である。
学長もいろんな場面でこのコールに大いにノ
ッて、学生たちと一緒に唱和していた。
We can do it! は誠悟が期待したように、学
生たちが心を一つにするフレーズとなったの
である。

サークル連合の成立

大阪のインターナショナルスクールで中学高校ともに英語で授業を受けていた井上大輔は、英語に磨きをかけるためと、日本のことを考えたいと思い、APUに入学した。

井上は別府の温泉にはまり、入学してすぐに温泉サークルを立ち上げた。一年目にいろんなサークルができていったのだが、サークルは施設の使い方、費用など大学側との交渉が大変だった。やがて、一つ一つのサークルがそれぞれの要求をスチューデント・オフィス（学生部）に持つていつて交渉するより、共通する問題は話をまとめて声を大きくして大学側に迫ろうという建設的意見が出て、サークル連合が生まれた。二〇〇〇年一二月のことだった。サークルは全体で三〇くらいあった。

そして、サークル連合として各サークルを束ねるとき、志の高いリーダーが要るよな、ということになった。二〇〇一年二月、湯布院二泊三日のリーダーズキャンプが実現した。サークル連合を作ってから二カ月間の問題点をあらかじめ各サークルに聞き、井上たちがそれに沿って議題を作った。「俺はこんなこと考えてるんや」「こんなことに困ってんねん」。白熱した議論が繰り広げられ、「リーダーという肩書きじゃなく、友達の輪が広がっ

たような気がするし、自分の好きなものを持った連中が集まる場が今まではなかったわけですから、とても有意義でした」と井上は語る。

サークル連合、最初の活動は新入生の歓迎会。「初めての後輩が入学する日に盛り上げよう」と、お堅い入学式が終わった直後、緊張している新入生の顔をいかにほぐすかをテーマに各サークルが自由なパフォーマンスを披露した。

「幕が上がるといきなり海水パンツはいた人が出てきて、We can do it! って叫んだんです。入学式には親も来ていたので、この大学で良かったの？ って感じてました」と、ある卒業生は当時を振り返って笑った。

井上は言う。「それが俺らの個性だ、何かをやりたいと思ったなら諦めるのではなく行動を起こす、というモチベーションの高さしか僕らを支えるものはなかったし、その原動力を信じてやっていたことを後輩に託していくのが大切だと思っていましたね」。

田立圭一は小学校五年生のとき国連の存在を知り、世界の人々が集まって世界のさまざまな問題を解決する場があるんだということに深く感動した。それがAPUという国際大学に入学する動機にもなっている。

田立は二期生だが、新しい大学として、基盤のないところで最初からなにもかも創り上

げるということに非常な魅力を感じた。その思いから学生会を作る動きの準備委員会に参加したのだった。国内学生も国際学生も一つにまとめる学生の自治会を作ろうという動きが起きていた。「大学側に思いをぶつける団体を作るというコンセプト自体は、国内・国際学生の違いはあっても反対する人はほとんどいなかったんです。ただ、そのプロセスや、リーダー決めに難航しました」と、田立は語る。

例えば、「リーダーは国内学生と国際学生の両方を立てるか」「地域別グループに分けるのか、国連のように国別に代表を決めて何かを作るのか」など、いろんな案は出たが、一向にまとまらなかった。一度は全員投票する選挙までこぎつけ、過半数以上で「学生会を作る」という結論には至ったが、そのあとが続かない。「それまでの議論でみんなが疲れてしまったというか、多分、学生会を作る、という結論を出すことがゴールになってしまっていたんだと思います」。そんな理由もあって、現段階でも残念ながら、学生の自治会はできていない。

イベント花盛り

世界学生サミット

二〇〇二年一〇月二十九日から三十一日の間に開催された「世界学生サミット」は、坂本学長の提唱によってAPUで準備され、コスタリカにある平和大学のモーリス・ストロング総長、マーティン・リー同学長、長田立命館総長、坂本学長の連名による呼びかけによって行われた。大学と学生が一緒になって取り組んだ大きな活動であった。「人間の安全保障」と『持続可能な発展』をいかに確立するか・学生・青年の役割」を全体テーマとして、世界各国の大学に学生の参加を呼びかけて行われた。その結果、二五カ国・地域より五八の大学と国内二三の大学から学長推薦を受けた学生代表が参加した。モーリス・ストロング氏は、一九九二年にリオデジャネイロで行われた環境サミットの事務局長を務めており、



APUが中心に「世界学生サミット」開催

このサミットの準備から実際のサミット運営において大きな貢献をされた。

環境問題やテロリズムをめぐる問題、あるいはイノベーションやエイズ問題など、平和的で持続性のある発展をめぐる重要テーマについて、一〇の分科会が設けられ、活発な討論が行われた。分科会の成果を持ちよって開かれた最終の全体会議は、会議声明をめぐって厳しい議論が行われた後、採択された。この全体会議の議長を務めたのがインド出身のチョウドリー・シユラッダである。この声明は発表当時、NHKのニュースでも取り上げられ、注目を浴びるものであった。

準備には、多くの学生が参加している。実行委員会委員長を務めた猿渡崇人や企画運営

の指揮をとった道家麻衣子、議長を務めたシュラツダなど、その名を書き尽くすことはできない。準備の活動でリーダーシップを発揮する学生やロジステイクスなどの裏方的な仕事に打ち込んだ学生など、個性やお国柄が入り乱れるミニ国際舞台がそこにはあった。

また、この学生サミットには、当時の国連事務総長コフィ・アナン氏や緒方貞子国連高等弁務官のメッセージが寄せられている。アナン事務総長は次のようなメッセージで締めくくっている。

「将来皆さんが受け継いでリーダーとなるこの世界を形作る取り組みについて、既に皆さんが参加していることは非常に励みとなります。皆さんが、これからもこのテーマに関心を持ち、国連が現在進めている世界的な使命である全世界の人々がより平和で公平な生活を継続的に確立することに対する支援を希望します。このサミットが協調の精神の下に成功することをお祈りしています」

世界歴史教科書博覧会

開学した後、キャンパスには仲良しムードが流れていた。齋藤麻衣子が言う「ビューティフルとワンダフルとグレイトしか言わへん上っ面の仲良しムード」だった。それは、宗

教、政治、国境など、話せば喧嘩になりそうな問題を避けているのだということが感じられた。「学生が、こんなことでいいのか」と下田亜友美ははがゆく思った。政治家じゃないのだから、今、学生のうちにこそ本音で語れるものがあるはずだ。

「同じテーブルにいろんな国の学生が着いて、私の国について話すとか、歴史について話すとかいうことを、このAPUでやって行かへんかったらどこでやるねん」と思った。

二〇〇二年、サッカー・ワールドカップが日韓共同開催の年だった。日本と韓国には分り合えない問題がある。例えば、従軍慰安婦について日本人と韓国人が話し合ったら、平行線のままだろう。それは親から教えられ、学校で教えられてきた歴史観のバックグラウンドがあるからで、そのバックグラウンドがどういふものであったのかをお互いに知る努力をした方がいい。そのたたき台がないと同じテーブルには着けない、と下田は考えた。それぞれの国の学生たちが、中学高校でどんな歴史を学んできたのかをまず知ってから話そうよ、というのが『世界歴史教科書博覧会』の構想の発端だった。APUに集まってくる世界八〇カ国（当時）の学生たちの歴史教科書を、日本語と英語に翻訳しよう。それが相互理解の最初の一步だ。

下田は、APUの同期生に頼んで歴史教科書を集め始めた。いろんな国の歴史観を調べ



各国の歴史教科書を集めて読み比べる！

ていくと、それぞれの形があった。パラオの学生が一人いたが、パラオの歴史教科書は編年体ではなく、民話や神話、伝記、実話によって作られていた。「ワールド」という言葉でイメージする範囲はとても狭くて、自分たちの生活に関係する島々といった範囲。族長の話や普通の主婦の話、いろんな階層の人々の話が並列的に出てくる。日本の編年体の歴史が勝者の側から書かれているのは、捉え方がまるで違っていた。第二次世界大戦のとき、日本人のスズキさんとかいう普通の二等兵が、村に食べ物がなくなったとき、夜こっそり玄関に食べ物を置いてくれたという話が、歴史の教科書に載っていた。

下田は各国の歴史を比べようと思っただけ

なのに、歴史の概念そのものが違うことに驚かされた。APUの学生たちがそれぞれ自分の国の歴史教科書を持って来て、翻訳していく作業。それは世界のどこもやっていない、APU独自の仕事のはずだ。

世界歴史教科書博覧会は二、三年経つうちに充実してきて、愛知万博に出展したり、社会ビジネス企業プランコンテストで特別賞をもらったりした。下田自身も卒業のとき、安藤百福賞を受け、賞金一〇〇万円でAPUの大学院へ進んだ。今は立命館大学大学院に在籍している。

One's 1、そして世界学生サミット

高原（鈴木） 大海は立命館大学の学生のと看堀田牧太郎教授に強い影響を受け、堀田教授のAPU赴任とともに立命館大学を辞めてAPUに入学した。「一日一〇時間勉強すれば何にでもなれる。将来、国際機関という場所で、責任あるポジションに就いて、責任ある仕事をすれば、君のサイン一つで何万人もの命が救えるようになるのだ」という堀田先生の言葉が、先生の急逝後も規範となり、一生懸命、APUのテーマである「持続可能な発展」を研究した。

高原が初代代表となった伝説のサークル「Ones1」は、メンバー五〇人がさまざまな意見や主張を出し合いながら最終的に二〇〇一年冬のシンポジウムを成功させている。

シンポジウムのテーマは「持続可能な発展」。それは、翌二〇〇二年一〇月に開催される「世界学生サミット」のパイロット的イベントとして位置づけられていた。「世界学生サミット」の呼びかけ人を務めた平和大学総長のモーリス・ストロング氏がAPUを訪れた際、シンポジウムが目指しているものを見せたら「素晴らしいものだ」とコメントしてくれた。シナリオを書いた高原にとって何よりの励ましとなった。

サークル「Ones1」の初期メンバー約五〇人が中心となって進めたシンポジウムの成立過程で、高原はさまざまなことを学んだという。「みんなで仲良くワイワイガヤとやりながら進めるボトムアップ型が日本人の中だとやりやすいのかな」。

一方で、バシッとしたビジョンを持った人物がオレについて来い、とやるトップダウン型がある。「APUという多文化の環境だと文句がしょっちゅう出るし、国際学生が自分たちの意見をなぜ入れてくれないのかとプロセスの話にもなるし、ボトムアップというのが難しくて」。高原は、アメリカなど多文化の社会でリーダーシップが非常に重要視される理由を体験で学んだという。

シンポジウムの提言書は高原の集大成となった。翌〇二年一〇月に開催された「世界学生サミット」は、サークル「One's I」の初期メンバーの数人が高原の活動を引き継ぎ、実行委員としてサミットを成功へと導いている。

卒業後、ソニーに入社した高原は現在、事業戦略一部にいて、ソニーグループの会社戦略を作る部署で働き、〇八年秋から発足した経営改革プロジェクト室のメンバーも兼任している。APUは早期卒業だったので、限られた三年間でがむしゃらにやるというメンタリティーを鍛え上げてきたし、「作っていく姿勢」や「長いものに巻かれない」ということもAPUで学んだ。それが今、社会人生活で生きている、と高原は言う。「会社の年配の方にもあまり遠慮することなく、自分が正しいと思ったことは生意気ながら提言します」。

熊本県の名門高校で大学受験期を迎えた猿渡崇人は、友人が一流大学へ進む中で「自分は何か特別な経験をしないと、自分の意見を持てない大人になってしまう」と考えた。それがAPUを受験した動機だった。ところがAPUに入学してたちまち挫折ざせつしたと言う。理由は「高校生までは、例えば髪型とか服装にちよっとおシャレして、人並みに勉強していれば一目置かれるっていう感じ」だったのに、それはあくまで日本のコミュニティの中

ただだということを思い知らされたからだ。

「APUというワールドワイドな社会の中ではそんなことは評価の対象じゃないというか、あなたは何かができるの？」と自分の価値を厳しく問われてしまいました」。英語が喋れない、特に何もできない、と落ち込み、もがきながら、猿渡はめげるわけではなかった。

何事も一生懸命に、授業もいちばん前で受けるなどしていたら、サークル活動を手伝ってほしい、という声が仲間からかかるようになった。そのうち、先生からも声がかかるようになり、世界学生サミットの実行委員会を立ち上げるときは、「崇人、委員長やってみたら」と周囲から言われて、じゃあ頑張ってみようかな、と委員長を引き受けた。

実行委員は国内、国際の学生たちそれぞれ五〇人ずつが集まった。最初は双方で通訳し合うなど大変さはあったが、最終的には無事、当日を迎え、学生サミットは成功裡に終わった。猿渡は卒業後、大分県庁に勤めている。

「APUでもがいてきて良かったなと思って思います。今も、もがいているんですけどね。自分がやりたいことを見つける貪欲さを身につけられたと思うし、自分にはいろんな可能性があるということをAPUで体験できたと思うし。APUってすごいと今思いますよ」

国際交流スポーツイベント

「中学で考えたことと、APUでやろうとしたことと、今の仕事とがほぼつながっている」というのは大山高。現在はサッカーのヴィッセル神戸ホームタウン事業部スポーツビジネススカレッジに勤める。

大山は親の仕事の関係で中学からニュージーランドに住み、現地の中学に入学して言語には苦労した経験がある。そのとき大好きだった野球を通じて友達ができた。ニュージーランドの高校が立命館宇治高校と提携していたこと、北九州で祖父母の介護をするという目的もあったため、日本へ帰ってAPUに入った。

二〇〇〇年五月二〇日、「立命館創始一三〇年・学園創立一〇〇周年記念・APU開学式典」が別府市のピーコンプラザで開かれるとき、「なぜか大学から電話がかかってきて、学生代表でスピーチすることになった。そのうちAPUに友達も増えていって、大山はこういう構想を抱く。「スポーツで国際学生たちと交流を図りたい。そのためには組織化しないといけない」。それで野球観戦ツアーや駅伝ツアーを発想した。



2002年、世界学生サミットの分科会で発言する学生

ワールドカップの通訳も務めた。通訳になったのには、いきさつがあった。英語教師になる夢を持って別府市の塾で教えていたのだが、〇一年三月にクビになった。それで別の塾に教え子全員と移って、彼らの高校入学を見届けたのち、教師の夢を断念。ちょうど大分県がFIFAワールドカップの会場になったため、通訳を志願したのだった。「そのとき大分県にいたことは、ドンピシャリでした」。

その頃、大学ではゼミの発表が始まっていた。ゼミに入らなくてもいいと言う大山を、志村智が説得し、大山の分まで志願書を書いてくれて通った。それはアジア太平洋マネジメント学部（現・国際経営学部）で最も競争率が高く、六〇人受けて一六人しか通らない

伊藤ゼミだった。「二六人のうち、志村君が二人通ったわけです」。

スポーツビジネスやマーケティングに精通した伊藤ゼミで、大山は中学以来のスポーツの夢を、大人の仕事として捉える方法を学んでいった。志村はマーケティングに関する自主ゼミを立ち上げ、それが〇三年には伊友会という名前になった。

大山はダイエーホークス（現・福岡ソフトバンクホークス）球団の中でスポーツマネジメントの勉強をさせてもらっているとき、別府を二軍のキャンプ地にしないか、と言われた。ここから伊藤ゼミの後輩たちと大山の奮闘が始まる。まず、球場だ。別府市役所へ行き、キャンプ地の話をする、実は実相寺に新球場を建設する構想はあるが、住民の賛同がなければ作れないという話。それなら、スポーツセンターの別府アリーナを使って、住民の人たちとAPUの国際学生と日本人学生の交流を図ろう。そして最終的にダイエーのキャンプ地が実現すれば別府観光も活気づくに違いない。

ダイエーの選手が別府でのイベントに来てくれたら、将来的にはキャンプ地の話も実現するのではないか、それをカフェテリアで坂本学長に話したら「おお、そうか。今、中内さんに電話しよう」。えーッ、オーナーに！と驚いたが中内さんは留守だった。そのすぐ後、坂本学長が電話してくれたのがダイエーのスカウトの人。アリーナのイベントにダ

イエーの選手が来てくれたのは「ぼくがダイエーに出入りしていたせいではなく、坂本学長の電話のおかげです」。

ゼミの教授の出資で京都の立命館へ行つて予算をもらい、さらに「立命館大学出身者の企業に行つて頼め」と知恵をつけられて三洋電機を訪れた。ここで広告費一〇〇万円をいただき、日本リーグ連続優勝の三洋電機のバドミントンチーム全員が参加してくれることになった。綱引きも国際大会で世界一になっていた「大分コスモレディーズ」が参加してくれた。

当日、別府アリーナには野球コーナー、綱引きコーナー、バドミントンコーナーなどが設けられた。あらゆる年代の別府市民の人たちと、APU、そして立命館大学の学生たちと校友会、企業関係者が一流選手を身近に見ながら、自分たちも力いっぱい楽しむ交流が実現した。大山は、一期生としてのAPU最後の奮闘が、いつの日にか、国際交流、別府観光の振興に生きることがあればいいな、と思っている。

多文化食生活を支えたカフェテリア

生協スタッフの異文化交流が始まる

生協のカフェテリア（食堂）の当時の店長によると、カフェテリアは毎日がエキサイティングだったという。多文化環境に対応した食生活の提供を中心とした学生生活支援と、初めてとなる多数の国際学生のアルバイト受け入れは、未体験の連続だった。

まず、各国の学生たちがどんなものを食べるのか分からないまま、できるだけ用意を事前にしておこうと、地元鉄輪在住のインドネシア人の女性に厨房まで来てもらって、見たこともないハーブなどの食材、それを売っている店などを教えてもらった。韓国、ベトナム、タイの料理も別府の街のレストランに飛び込んだり、やって来た国際学生に教わったりしながら充実させていった。別府市にはインドネシアや韓国、中国などの食材を売る

店がちゃんとあることを発見した。

何を食べるのかは、努力すれば何とかかなりそうだったが、問題は「食べてはいけないもの」。インドネシアなどイスラム教の学生たちは、豚などの肉類、アルコールが一切ダメということを知っていた。唯一食べる鳥肉も、ハラル・チキン[〃]といって、認定工場できちんと処理されたものしか食べられないという。その認定工場には、資格を持った人がいて、鶏を捌くときお祈りをするということだった。そこで、ハラル・チキン[〃]はどこで手に入るのか懸命に探した。ところが、中国やタイにはハラル・チキン認定工場というものがあり、日本のニチレイの中国工場の一部も認定工場になっているという。……ということは？「なんと、うちが今まで使ってたのがハラル・チキンやったという、お笑いでした」。

イスラム教で禁止されているのは飲むアルコールだけではない。調味料の中に添加されていていけないという。醤油に添加されている醸造用アルコールもダメだし、みりん[〃]はもちろんダメ。となると、和風ドレッシングには必ず、みりん[〃]が入っているのでダメということになる。

ある日、インドネシアの学生たちに囲まれて、「他の国の子から聞くと、あの豆腐はと

でも美味しいらしい。ぜひ食べたい。だけど醬油にアルコールが入っているから食べられない」という訴え。彼らによると本醸造の醬油なら製造の過程でアルコールが発生するが、それは大丈夫だという。かくしてAPUのカフェテリアは本醸造の醬油を使うことになった。

パン騒動

開学祭のとき、生協の売店でたくさん売れたのは食パンと牛乳だった。安くて美味しいと大人気。ところが、あるイスラム教の学生が食パンの表示を見たことから大騒ぎになった。「添加物に『シヨートニング』と書いてある。シヨートニングは豚のラードから作る。知らないで私たちは今日この食パンを食べてしまった。何ということをしてくれたんだ、と周りを取り囲まれて抗議されましたよ」。

膨張剤のシヨートニングが悪ければ、ポテトチップスもおかきも、ふくらむお菓子類はみな食べられない。肉類アルコール類厳禁の学生たちのために、カフェテリアではバターでなくマーガリンを使ったケーキや、シヨートニングを使わないレアチーズケーキなどを置いた。「あれ食べられる？」と聞きに来て、食べられると分かったらピューツと走って



食文化も多種多様

取りに行く学生たちの嬉しそうな顔で努力が報われた。

カフェテリアの正式オープンの前日には徹夜でメニューを作った。一つ一つに、トリ、ブタ、ウシのイラストを描いたものだ。「あれがなかったら、大混乱だったと思います」。

言語ウィークでは毎週、その国の文化とともに食べ物^がが提供される。カフェテリアの主役はその週の国の食べ物になる。その準備は毎週、夜中までかかった。いろんな国のスパイスをインターネットなどで取り寄せて、夜遅くまでスパイスをグリグリと擦ってみたり、バナナの皮でカゴを編む作業を夜なべで手伝ったり。

学生たちも食材を持ち寄ったり、料理して

みせてくれたりしたので、メニューは二〇〇種くらいに増えた。

日本のお行儀を教える

カフェテリアの従業員は、昼は地元のパートさん、夜は学生アルバイトだった。学生アルバイトの半分は国際学生だったが、国によって流儀が違うので、調理より先にマナーを教えなければならなかった。

時間どおりに来ること、「いらつしやいませ」を言うこと、お金をもらったなら「ありがとうございました」と言うこと。

初めは腕を組んでふんぞりかえっていたり、後片付けをしないで帰ったりする学生たちも「こら、待てーっ」と捕まえて、必ず日本で働くマナーを守らせた。

一期生には非常に厳しくルールを仕込んだ。そして二期生が入って来るとき「ここ言うことをきかなかつたら、他では通用しないと後輩に言うときよ」と伝えておいたら、後はとてもラクだった、という。

第6章

いたるところで地域交流

APU 立命館アジア太平洋大学 企業各位と大学・学生との懇談会



APUは企業との交流を活発に行っている

APU学生による臼杵研究プロジェクトが、中心市街地の景観構想でこう指摘した。

「臼杵市は城下町だと言っけれど、城をまったく意識できない。

天守閣はないし、市民は城跡を城と呼ばずに公園と呼んでいる。

もう一度、城を意識させたらどうか」

これで街のデザインの方向性が決まったと、臼杵市役所の日廻さん。地域に恩返ししたいというAPUの熱意が

大分県のアちこちに息づいている。

地域に出かけて

武家屋敷に泊まり込み

臼杵^{うすき}市とAPUの交流事業が行われたきっかけは、後藤国利臼杵市長（当時）がAPUで講義したことだった。臼杵市は戦国のキリシタン大名大友宗麟が最後の城を造って住んだ場所。江戸時代の城下町が残っている、その町並み保存や中世に歴史を持つポルトガルとの友好交流、オランダとの交流事業に力を入れてきた。「古いものを大事にしつつ、新しいものをどう生かして行くかが、地域づくりの柱になっています」と臼杵市役所の臼杵研究プロジェクトの担当者だった日廻文明さんは言う。

日廻さんによると、APUの学生たちを迎えて、武家屋敷での合宿研修事業を行ったという。「武家屋敷は文化財ですから、通常であれば触ってはいけない、見るだけ」とい

うのが常識なんです、その当時の担当者が『むしろ、武家屋敷を使ってもらった方が、直接肌で感じてもらえるだろうし、実際に人が泊まってくれた方が武家屋敷も嬉しいんじゃないだろうか』という考えを持っていて、市指定文化財の『丸毛家屋敷』を開放することにしたんです」。

その際、国の「都市再生モデル事業」で、五右衛門風呂を造り、くど（かまど）を修理して薪でご飯が炊けるようにした。学生たちは、そういう暮らしを体験しながら、お寺で座禅を組み、朝粥を食べ、街に出て白杵市民と交流した。

「白杵の人たちは自分の地域が大好きで、このまちを守りたい、もっといろんな人に見てもらいたいと思っていて、お年を召した方々のパワーが学生とはまた違うものすごいパワーで、これは負けていられないと思いました」と道家。

APUの学生たちによる調査研究が、報告書としてまとめられている。

『白杵中心市街地構想：白杵市における景観形成の提言』瀬古聡史

『白杵市における都市防災ネットワークの構築』高野哲成・道家麻衣子

『コミュニティガーデンによる緑のまちづくり』宮田真二

白杵市役所の日廻さんは言う。

「現在、臼杵城の周辺建物を整備していますが、実はそのきっかけは『臼杵は城下町だというけれど、城をまったく意識できない。天守閣はなく、地元市民も公園という位置付けで、誰も〃城〃と呼ばない。だから、ここをもう一度〃城〃と意識させることが大事じゃないか』というAPUの学生のプレゼンテーションだったんです。素晴らしい！と思いましたね。」

城中心のまちづくりが、大友宗麟の時代にすでに形作られているにもかかわらず、そういう風に見えていなかったというわけです。もちろん、中心市街地を整備しなければいけない時期ではあったんですが、方向性はそれで固まったという感じでしたね」

二〇〇四年三月には、本文八三頁の『APU学生 臼杵研究プロジェクト 報告書』が出されている。

感染症対策ではトップクラスに

地元での説明会から委員会が発足

開学前の地元説明会は一週間、每晚開かれた。大学側が驚いたのは、APU誘致に反対する人たちがたくさんいたことだった。というよりも、反対する人たちが積極的に説明会に参加したから、「外国人が大勢来ると、娘が危ない」などの、とんでもない意見まで出た。大学側は、開学後、地域貢献の実績で示すしかないと考えた。

地元の意見の中で「感染症対策はどうするのか」という質問があったことから、明石光伸鶴見病院院長や大分医科大学（当時）の三舟求真教授の協力で、大学の中に感染症を中心とした健康に関する懇談の委員会をつくった。

開学した後、結核にかかった学生が数名出たが、国立別府病院（現・別府医療センター）

に入院させて驚いた。そこには戦前からの結核療養所の歴史が生きていて、結核予防法に基づき、長い場合は半年間も、至れり尽くせりの治療を無料で受けられるのだった。「結核対策では別府市は抜群です」と当時のAPUの担当職員。今後の感染症対策でも一〇〇二〇万人規模の都市として別府市は全国トップクラスの対応能力を持っているという。

カンボジアで「ハツタリかました」JCメンバー

APUを地元で紹介しよう

日本JC（青年会議所）は二〇歳から四〇歳までの年齢制限がある若手経営者たちの組織だ。一九九七年、別府JCの松田清理事長たちは、京都会議の折、立命館大学を訪ね、APUへの協力を申し出た。「大南総長が、庭園のついた何やら高そうな料亭で御馳走してくれて、滋賀県草津市のJCは、びわこ・くさつキャンパス（BKC）の設立にも大変

協力してくれましたので、別府もどうかよろしく、と言われました」。別府にAPU開設準備の事務所ができると、職員をJCの卓話に呼んだり、別府JC二五周年に坂本学長の対談を企画したり、JCメンバーとAPUの縁は深くなっていた。

二〇〇〇年、国会議員田英夫氏の「日本カンボジア友好協会」に依頼して、JCがカンボジア訪問ツアーを企画した。全国から三〇人が行く予定だったが、直前にNGOの日本人ボランティアスタッフが銃撃されたため、ツアー参加者の大部分のメンバーがキャンセルした。残ったのは別府JCの三人だけだった。

目的は地雷除去の様子を撮影することだけだったのだが、日本大使館に話をつけたので、軍隊が地雷除去している現場まで入らせてもらった。当時としては貴重な写真が撮れたという。別府JCの安部一郎さんは「日本青年会議所というから、カンボジア側は日本の優秀な若者が来ると誤解したらしいんです。アメリカに留学していたカンボジアのトップクラスの若者三人を用意していて、彼らが英語でガンガン喋って来るので、こりゃあこっちもハッターかまさんと負けるぞと思いました」。

安部さんは「ハッターかまさん」のために、大きな話をした。カンボジア大学の学長に、別府市には世界でも珍しい国際大学APUができて今年開学すること、そして日本の企業の

奨学金が国際学生に出されるのだと話した。学長は感心してくれたが、ここで予想しない反応があった。通訳をしていたカンボジア人の若者テップ・ビスナ君が「ぼくがその大学に行きたい」と言い出したのだ。

「私、こういう性格ですから、よっしゃ、任せちよけ！ と力強く言うたんですわ。けど、日本に帰ってから、どうしようかと思って」。APUに相談に行ったら、出て来た担当職員が以前、安部さんのお店、竹香園でアルバイトしたことのある若者だった。紛争が続いているカンボジアにはAPUも学生募集に行っていない、ぜひお願いしますと言われ、日本カンボジア友好協会に頼んで受け皿になってもらった。かくしてテップ・ビスナ君はAPU初のカンボジア人学生として二〇〇〇年秋に入学したのだった。

APUの職員が冗談を言った。「安部さん、あとブータンからも来てないんですが、今度ブータンに行ってくれませんか」「行かんちゃ」。

〇五年に安部さんがもう一度カンボジアに行ったら、テップ・ビスナ君は国会職員として活躍していた。

亀川も異文化の街に

「楽しく英会話」

A P Uの真下に位置する別府市亀川の街では、A P U開学の一年前から、楽しい集まりが開かれていた。地元はアジアと聞いてもピンとこない。大丈夫か？　くらいの感覚だから、まず楽しく英会話のお勉強でもしますか、という会で、名前も「楽しく英会話」。文具の堀文社長堀高志さんによると「市役所の安部純子ちゃんのマンパワーで人が集まっていきました」。人数は一五人のときもあれば、四〇人集まるときもあり、最初は大人ばかりだったのが、親たちが子どもを連れて来始めて賑やかになった。最後はめちやくちや盛り上がったクリスマスパーティが開かれた。

異文化教室

亀川地域のまちづくりに関わる人たちが入っている。皆さんもく会では、ちょっと渋く、異文化教室[※] というのはを開いた。それはAPUの言語ウィークのように「台湾編」「韓国編」「中国編」などに分けて開催された。旧亀川郵便局の建物を借りて、例えば中国編の日には、現在日本に來ている中国人とか、中国在住の日本人とか、中国に住んだことがある人[※]を呼んで、お互いの「びっくり」体験を話し合い、とても面白かったという。

韓国編のとき、大分トリニータの皇甫官監督^{フアンボカン}（当時）に來てもらったのだが「ぼくらはそのときまで彼がワールドカップで、韓国人として初めてゴールを決めた英雄だということを知らなかったんです。汚い小さな郵便局で一〇分もお待たせしたのに、気持ち良く待ってくださって、そのときの態度に深く打たれて以來、大分トリニータの大ファンになったんです」と堀さんが言う。異文化教室がトリニータ応援団をつくっている。

開学前にはJR亀川駅にカウントダウン・ボードを設置した。駅長さんが「私が毎日数字を替えましょう」。JRの駅長さんも加わって、祝開学ムードが出てきた。

国際学生の到着を迎えるボランティア活動には、堀さんは個人で参加している。福岡空

港で中国人三人の女子学生を迎えたときは夜だった。三人とも日本語が話せる人たちで、高速道を走る間はいろいろと楽しく会話した。インターチェンジを降りて、山道に差しかかるともう真っ暗。後部座席の女子学生たちがシーンとして、やがて中国語でひそひそ話し始めた。「大丈夫かしら、ヘンなおじさんが運転してるし、とか言ってるんだろうな、と思っていると、やがてAPUの時計台が見えたんです。あれはパンフレットにも載ってるでしょうから、彼女たちのホッと安心した様子が分かりましたね」。

開学の年、亀川の夏祭りに招待し、弁当や浴衣を用意し、会場まで案内して、片付けも自分たちでしてしまう地元の人たちの動きを見て、今度は学生の方から声をかけてきた。私たちにも何か手伝わせてください、と。以来、いろんなイベントにAPUの学生たちが関わってきているという。一期生の数人の名前を出すと、堀さんは出身地まで知っていた。

二〇〇二年のサッカー・ワールドカップ、あの中津江村で

ケチャクメンの事故死

サッカーのワールドカップで日本中にその名を馳せたのは、中津江村だった。カメルーン・チームのキャンプ地として、選手の到着を待つこと五日。選手たちはパリでギヤラの値上げ交渉をしていたらしいのだが、中津江村の人々は毎日毎日、決して怒らずに待ち続け、五日目のそれも午前三時に到着したとき、村の人口の七割の人たちが出迎えたということでした。日本中に感動を呼んだのだった。

現在、中津江村地球財団の理事長で当時、村長であった坂本休氏は「ものごとは相手さまと気持ちを合わせていかなば進みませんね。自分のやり方や習慣で押し通すわけにはいかないのです。ましてやお国柄も風習も分らないアフリカの方々ですから」と静かに謙虚に説明する。中津江村のスポーツセンターには、二〇〇一年夏からAPUの国際学生たちがアルバイトに来ていた。中国、韓国、ベトナム、フィリピン、台湾など六人の学生が部屋の掃除や厨房の手伝いなどをした。カメルーンの選手たちがやって来た〇二年、APUには二回生のケチャクメン・レオネールというカメルーン出身の学生がいた。「ケチャクメンさんは本当に人柄が良くて、この村をすごく好きになってくれて、ワールドカップ

が終わっても休みのときはここに来て働いてくれました。翌年の二月、まだ雪が残っているのに植樹の仕事を一生懸命したりして、この寒いのにと感心していましたが」。

坂本氏は現在、朝三時に起きて、午前五時には経営する鯛生たひお金山の駐車場のトイレを冷たい水で掃除するという。ケチャクメンは、働き者の坂本氏の眼鏡にかなったのだった。中津江村のスポーツセンターに就職したいと日本語できちんと書いた手紙をもらい、スポーツセンターは採用を決めていた。ところがその後、ケチャクメンは突然の交通事故で亡くなったのだった。「かわいそうで、かわいそうで」と坂本氏は今でもその話をするとき暗い顔になる。葬儀には三時間ほどかけて多くの村民が参列した。

A P U にはケチャクメンの弟も入学していた。彼の死後、トリニータの試合を見に行くときには、必ず亀川の駅でケチャクメンの弟とその友達の二人を乗せて行ったという。

大分へ“帰る”とみんな言う

どつぶりゝ入湯貸間

二〇〇〇年の秋に入学したのは約四〇〇人で、その中に日本人が二〇人いた。国際学生はAPハウスの住むのだが、日本人学生はマンションの空きがなく、鉄輪の旅館に住んだ。横浜出身の濱口健一は上富士屋旅館だった。鉄輪温泉は昔からゝ入湯貸間で知られている。長期滞在する人たちのために部屋を安く貸して、共同の炊事場を用意している。農村の人などは農閑期に米を担いで来て、自分でご飯を炊いて湯治を楽しんだ。そういう宿がAPUの学生を受け入れたのだから、風景は『三丁目の夕日』である。

「毎日、好きなきに温泉に入れるし、週末はみんなを呼んでわいわい言いながら自炊して楽しみました。うるさいと怒られたりもしましたけど」（濱口健一）

鉄輪の旅館住まいは半年に及んだ。濱口はその後三回生のとき交換留学で中国へ行き、交換留学の学生に与えられる資格としてAPハウスに入ってRAになっている。

コミュニケーション能力

APU卒業生の特徴を「強いて言えばコミュニケーション能力かな」と言う小沼智史は、

REXというサークルを立ち上げた。理由は、学生たちは入学してしばらくは国際的に交流しているが、やがて自国の友達どうしで固まる傾向がある、と見たからだ。REXはまず言語ラウンジに掲示板を作り、「中国語教えます」とか「モンゴル語を教えます、代わりに日本語教えて」とかいうカードを貼れるようにした。そこから派生して、日本人学生と国際学生の交流、地元の人との交流、障害を持つ人たちとの交流などが生まれた。

地域交流では、地元の人たちに案内されて国際学生を連れて田植えに加わった。この田圃には夏の草刈りにも出掛け、夏祭りにも呼ばれ、秋の収穫も最後の餅つきも体験させてもらった。「非常に楽しかった。いちばんAPUらしいサークルだったと今でも思っています」(小沼智史)。

小沼は地域交流以来、大分県がすっかり好きになって車で全市町村を回った。水汲みも、塚原の霧島神社の水、黒岳の男池の水、白水の炭酸泉、山香の出水など、いろんなところを知っている。湧き水を汲んで、地元の友達に頼んで調達した米を炊き、地元の卵を食べた。超ゼイタクな日々。今でも休みになると、実家の埼玉に帰るより別府へ帰っている。APUの下のもみじ温泉で硫黄の匂いを嗅ぐと、ああ帰ったな、と思う。帰った感覚は小沼ばかりではない。シンガポール出身のマザーは、現在、日本公文教育研究会(KUMO

N)に勤めているが、「四月に仕事で別府に帰ったよ」と言う。

地域連携ネットワーク型大学

APUは開学前の一九九九年六月に「APUからの提案」を発表した。「人づくり」「まちづくり」「えんづくり」を柱にして、「大分県・別府市の発展に寄与することがAPUの使命の一つである」。さらに「地域への貢献をAPUのすべての学生が実践すべき信条の一つにしたい」と約束した。

APUは開学以来、大分県、別府市、三重町（現・豊後大野市三重）、佐伯市、臼杵市、中津市、日出町、国東市、日田市、由布市、長野県飯田市と交流協定を締結して、さまざまな交流を展開している。

APUは「地域連携ネットワーク型大学」という新しい教育テーマを打ち出していた。全学的な地域貢献の確立、課外活動としての枠組みを越えて正課教育と課外活動との結合・組み合わせに取り組みたい、と。

「入学したとき、この大学は別府市が補助金を出してくれて、土地も提供してくれた、大分県の補助金で建物と道路ができた、地域の人々に感謝しなさいと、教職員から耳にタコ

ができるくらい言われました」と道家麻衣子。純朴な大学生はその後、何とか地域の人々に御恩返しをしたいと努力し始める。APU一期生の日本人学生はほとんどそういう思いに駆られていた。

田中奈津子が部長、下益田和花が副部長のサークル、Wダッチも地域との交流を目的につくられていた。道家はWダッチにも加わり、RAとして地域の人々と国際学生の懸け橋になろうと活動した。

地域との連携の中でいちばん大掛かりなプロジェクトになったのが、前述の臼杵市でまちづくりの調査をした「臼杵研究プロジェクト」である。

APUな別府市民のみなさん

田中俊一さん（ホストファミリー）

今までに受け入れたAPUの国際学生は概算で二〇人以上です。モンゴルやウガンダ、タイ、フィリピン、マレーシア、シリアなど国籍はさまざまで、受け入れた子の国（インド、インドネシア、カナダ、スリランカ、中国、タイ、ベトナムなど）にも遊びに行きましたよ。我が家と所有しているアパートでの受け入れが中心ですが、九重の別荘にも泊まってもらって、音楽会も開催するんです。

インドやモンゴル、インドネシアの学生が踊ったり自国の料理を作ってくれたり、そんな交流がとても楽しいですね。私達の知り合いも参加して、ものすごく喜んでくれました。思い出に残っているエピソードと言えば、タイの女の子が二年生のときにホームシックにかかって「もうやめる」って相談に来たんです。

それで、いろいろと話をしたり説得したりしているうちに「また頑張ろう」という気持ちになつてくれて、ちゃんと卒業したんですよ。しばらくしてその子のお父さんと弟がここに来たときは「残って良かったね」っていう話をしました。

もう一つは、スリランカの男の子と女の子が結婚してすぐ近くに住んでいるんですが、ある年の年末の夜に電話がかかってきて「熱があるから病院に連れてって」って頼ってきました。

だから鶴見病院に連れて行つたし、年始も三、四回くらいはお世話にかけつけたりしました。遠い国から別府にやって来た学生にとっては、ホストファミリーというのは頼りたい、頼れる存在なんだと思いますよ。

筑浜直さん、大久保智さん（別府市役所清掃課職員・当時）

物価高などがあって、国際学生がその年に国には帰れないから何かアルバイトを提供してほしい、という申し込みがAPUからあったんです。清掃課は夏に夏期研修があるので職員が休んでいる間は清掃車が地域を回らなくなります。そこで、清掃課としても働いてくれるなら、と受け入れました。

「いろんな国の学生と一緒に回るのは楽しい」と乗務員さんは喜んでいましたよ。最初に写真を撮って、下に愛称を書き、「今度、この学生さんが来られますので、取り組みの際にはこの名前で呼んでください」と一、二週間前から掲示したりしましたね。

現場の業務員さんは、言葉は荒いけど心の優しい人がいっぱいいるんです。そういう方達が国際学生に対して朝夕の送り迎えに行ったり、夕食をご馳走してあげたりしていたようです。

車には運転手と回収する人の三人が乗り込むんですが、乗り込むチームはいつもだいたい同じですから、自然と連帯感が生まれたようです。路線バスの運転手さんも、清掃課前のバス停のところで少しだけ待っていてくれたりして。バス停以外のところでも乗り降りさせてあげたり（本当はやってはいけないことですが）。

開学の際はみんな何かしてあげたいという思いがあったんじゃないでしょうか。国際学生が困っていたら手を貸してあげよう、みたいな雰囲気が別府全体にあったと思います。

佐竹建一さん（城島後楽園ホテル料飲マネジャー・当時）

スチューデント・オフィスに向いていると話をさせてもらい、実質的には開学一年後からAPUの学生をアルバイトとして雇うようになりました。その最初の学生さんたちが非常に真面目に働いてくれたので二年目、三年目と続いて来ていただきました。

最初の年の四〜五カ月ほど経った頃から、一部の学生さんに社員寮に住んでもらうようにしたんです。

なぜかと言うと、私が送り迎えをしていたんですが、土曜の夜なんかは一軒ずつ送り届けていたら一二時を過ぎてしまい、翌日の朝は五時に起きて五時半に出発、六時前に迎え

に行つて、六時にはここに入るようにしていたら、もうたまらなくなりました。ピーク時には多い日で二〇人ほど、朝、婚礼、夜の宴会とまるでピストン輸送で、私の方が持たなくなつてしまったから「これは寮に入ってもらうしかないかな」と。何せ寮は敷地内ですからね。

寮に入った子は、朝、学校まで送り、夕方六時に迎えに行くようにしたんです。そのかわり、寮に帰ってきたら、ホテルのレストランで洗い物をしてくれたりしてましたよ。

ガーナや中国、リトアニアに、ネパール、ベトナム、スリランカと、アルバイトに来た学生の国籍は本当にさまざまでしたね。

日本語が少ししか喋れなくて意思疎通ができない子もいました。こちらは片言の英語で会話して、それでは分からなければ通訳できる子を呼んできて……。日本語が喋れる子はどこでもアルバイトできるんですが、裏方（洗い物やセッティングなど）の子はそこまで喋れなくてもいい。こういうことをやってほしいとか、手順とか、こちらが一緒にやっていけば理解してくれる。

私を含め、ほかの社員にとっても日本人以外の人と接するなんて、滅多にないことですから、最初は物珍しいという感じはありましたが、そのうち「隣の県から来た学生さん」

という認識になりましたよ。

それにしても、いろんなことをやってもらいました。草刈りとか。「これ、好きなの」といって自ら進んでやってくれる子がいたし、婚礼ではスポットライトの役割を与えたり、宴会では料理出しなども。レストランでは料理の補充やオーダーなども普通に入ってもらいました。

力が強くて、重たい道具を運ぶときには一人で三、四人分の働きをする子もいました。

印象に残っているのは、仕事がよくできるといふより、一生懸命やっていた子ですね。

スピードは遅いけど一生懸命やっていたな、とか。ガーナの男の子で日本語が上手に喋れなくて最後まで洗い場から出られなかった子がいたんですが、何か言われたらコツコツやり続けるタイプで、洗い場のおばちゃんとも仲良くなつて可愛がってもらっていました。

インドネシア人なのに「隣の田舎町から来た」という雰囲気の子、あまり騒がず、いつも隅にいるけど、何かやるときはきちつとやっていた韓国の子。一年間で一〇〇人以上の学生に会っていました、それでもそんな子はずっと覚えているんですよ。

お金がなくて国に帰らなければいけない状況の子もたくさんいました。性格が良くて一生懸命頑張る子が、お金の問題で学校を辞めて国に帰らざるを得ないというのは、あまり

にも可哀想ですからね。そういう意味で、アルバイトに雇うということで、役に立てるお手伝いが少しはできたのではないでしょうか。

安心院久徳さん（山口コーポ・亀の井自動車学校）

亀の井自動車学校の関連事業として「山口コーポ」が八九棟あり、その中から別府市観海寺の三棟を学生の住居として提供したんです。「山口コーポ」は普通の賃貸アパートとして建てましたが、開学した二〇〇〇年時は、結構空き部屋が多く、当社としても稼働率を上げなければと思案していたんです。

そんなときAPUの国際学生に利用してもらう話をいただき、何か特典をつけようということで、比較的安い家賃にすることや、大学とアパート間、または教習所までの送迎バスを運行することを実施しました。

大学側からも大変喜んでいただきましたが、こちらも空き部屋の対策になり大変感謝をしています。新規事業ではなく、既存のものを活用していただけて、当社も大変助かりました。まさに企業と大学それぞれの思いが合致して、現在に至っているという感じです。

入居の選考については特にはなく、大学から紹介をいただいたり、友達で紹介でという

学生もいます。保証人などの問題は連名にしてもらっています。何せ国際学生ですし、あまり縛りが厳しすぎても難しいので、双方の信頼関係を大切にしているんですよ。APハウスですっかり日本の文化や習慣などを身につけているので、あまり近隣の方とのトラブルなどもないようです。

ただ、ゴミは分別するのが日本の常識ですが、その習慣がない国際学生は、ゴミ置き場に食べた物をそのまま捨てたりとか……。もちろん指導すればきちんとしてくれますし、中には日本人よりも優秀な学生もたくさんいましたよ。少々言葉の壁がある学生もいますが、みんな素直だし、真面目だし、本当にみんないい子たちばかりです。

近藤研二さん、好優さん（美容室「ぼにいてーる」）

亀川地域には多くの学生が住んでいるが、美容室「ぼにいてーる」を経営している近藤さん夫妻は、日々の生活の中から自然と学生との国際交流が始まった。

「美容室の待合スペースにパソコンを置き自由に学生が使えるようにしたり、格安でカットしてあげたり、学生やその家族が日本へ来た時に一緒に食事をしているうちに、スリランカやインド、南アジアの学生が私たちのことを『日本のお父さん、お母さん』と慕うよ

うになっていきました」

また、お金がない学生のために、「ぼにいてーる」隣の二〇年以上誰も住んでいない下宿を買い取って格安アパート「K-House」を始めた。全室インターネット、家具完備である。

近藤さん夫妻は、「特別なことは何もしていない。国際学生とか関係なく『学生』として付き合っている」と、あくまでも自然体で頑張らない国際交流を実践している。

アフジャー・バルティーさん（別府でインド料理店を経営する卒業生）

APUの一期生で最初に勇名を馳せたのはアフジャー・バルティーだった。

大分県の留学生向け奨学金の申請書は日本語で書くようになっていたが、私たちは英語で書きたい、という要求を持って、日曜日に平松知事がいる公舎に単身乗り込み直談判したのだ。以来、奨学金の書類は英語で書いてもいいことになった。

バルティーは卒業後も別府市に在住し、インド料理のレストランを経営している。関西弁と大分弁がちよっとまじった日本語で、バルティーはこう語った。

「私は観光学が専門だったから、日本の、しかも別府という町が魅力的やなと思ったんで

す。でも、最初にAPUに来たときは、だまされた！ って思いましたね。だって、パンフレットが海のすぐそばの大学だと思わせるようなイメージ写真だったから。あんな山の上で、海は見えるけど遠いし。でも、実際に学生生活が始まると、この場所だからこ良かったのかなと思えることがたくさんありました。周りには何もないし、学校で過ごす時間もたくさんあったから、勉強したり、友達と過ごしたりするのには、いい環境だったんです」

在学中は県内各地で開催される祭りなど、ありとあらゆるイベントに参加した。インドの民族舞踊も三〇〇回は踊っているし、屋台でインド料理を作ったりということも積極的にしてきた。そうすることが楽しかったし、意味があると思っていた、と言う。地域の人たちと話をし交流することは、観光学を学ぶ者としてとてもいい体験ができた、と。

卒業後は「バルティー・アフジャー有限会社」を立ち上げて、別府の商店街の中で「アフジャー・レストラン」を経営している。

「卒業したら国に帰る、とか、卒業したら日本の大都市に行くという選択肢は初めからなくて、別府という町で生きようと決めていました。日本の中の別府という町にあるAPUに通いましたが、ただ卒業するだけでは私は納得できないんです。まずは自分が魅力を感じ

じて学んだ土地に根を張ってベストを尽くしたいから」
夢は企業家として成功することだそうだ。

ホームステイの感動

ホストファミリー募集

開学前から、地域交流のキーワードの一つとして考えられたのはホームステイだった。大学がまだできる前から受け入れてくれるホストファミリーを募集するという取り組みで、そのことを通して住民と対話していこうという方針を立てた。

当時、大分県のホームステイ活動の親分のような存在が県庁OBの平野昭光さん。その他、県や市が話してくれた人たちが、やりましようと言ってくれた。民生委員などに集まってもらって、各町内で、みんな得手分けして、ホームステイの説明をして回るといこ



ホームステイのAPU国際学生（大分合同新聞社提供）

とをしばらく続けた。好意的な人も中にはいたが、防犯や差別に関わる理解はまだまだ遠かった。

開学した後、五月に立命館の学園創立一〇〇周年記念式典を別府で開き、同時に「APU開学祭」も催した。そのときに初めてAPUの学生たちと市民がふれ合い、それを契機にホームステイの受け入れ先がどんどん増えて行った。

同じ時期に他大学の中国人留学生が山香町（現・杵築市）で老夫婦を殺傷する事件、福岡の大学でも留学生が殺人を犯すという事件が起きた。そのときに福岡の放送局がAPUに取材に来た。福岡ではその事件を機に街全体が留学生を非常に冷たい目で見るようになって

たのに、大分県はあんな事件があっても基本的には変わらない。なぜか、ということに興味を持って来たと言う。それはやはり、万全の準備をして開学し、努力してきたし、街のみなさんも支えてくれたから信頼が築かれているのだとAPU側は話した。

学生部の語り草になっている話がある。殺傷事件が起きて、大分県中が衝撃を受け、APUもホストファミリーの減少があるかもしれないと不安を感じていたとき、ホストファミリーが増えたのだ。殺傷事件が起きた直後に家族会議を開いて「こういうときだからこそ」と言って申し込んでくれた家が二世帯あったのだ。そうしたことにAPUの教職員は励まされてきた。

第7章

APUは成長する



恒例となった卒業式の帽子投げ

学長室からは、毎朝、A P ハウスから授業に向かうたくさんの学生が見える。みんな昨夜は遅くまで勉強したに違いない。

少し睡眠不足のようだが、教室へ向かう足取りは力強い。

開学以来A P Uの門をくぐった国際学生は一〇六カ国・地域から、学生数は約五四〇〇名。「アジア太平洋地域における人材育成への貢献」というA P Uの志は確かであった。

政府や経済界からも関心を寄せてもらっている。

A P Uの第二期計画である「ニューチャレンジ」を学長として推進してきたモンテ・カセムは

「今やA P Uは一私学ではなく、公共財となった」と実感している。

同時に、次世代のA P Uの礎を築かねばならない。

モンテ・カセム学長は語る――

APUの開学は、立命館学園にとってのみならず、日本の高等教育界の大きなエポックとなりました。日本国内はもとより、海外からも数多くの見学者がAPUを訪れます。二〇〇七年度だけをとってみても、元国連事務次長の明石康先生、国連難民高等弁務官（UNHCR）駐日事務所の滝澤三郎所長など、国際機関の方々、中華人民共和国、大韓民国、アメリカ合衆国、インドネシア共和国、マレーシア、インド、タイ王国、シンガポール共和国、ボツワナ共和国、マラウイ共和国、ラオス人民民主共和国、キルギス共和国、マーシャル諸島共和国などの現・元の閣僚、外交官の方々がお見えになりました。また、国内外の大学からの視察は数え上げることができないくらいお越しいただいております。APUを訪問された方々が共通に感心されることがいくつもあります。

マルチカルチュラル&エデュケーション・コミュニティⅡAPハウス

その第一が国際学生寮、APハウスです。二〇〇八年秋現在、国内学生約四〇〇名、国際学生約九〇〇名が生活しています。レジデント・アシスタント(RA)諸君の頑張りもあり、APハウスは単なる生活の場を超えて、国際交流、国際理解、言語運用能力向上の場として機能しています。共同キッチンで行われる各国料理による食事会、寮祭に見られる多様なイベントはその象徴的な表れです。

二〇〇七年度に竣工したAPハウス3は、こうした教育機能をさらに強化するために、シェア・タイプの部屋を用意しました。これは二部屋を一ペアとし、部屋の壁の一部にドアを設けたタイプの居室です。ペアは国内学生と国際学生のペアです。シェア・タイプの寮では、寮生どうしが共同生活を通じて互いに高め合い、交流し合う、素晴らしい毎日が続けられています。

学生が真剣に学習する大学ⅡAPU

見学者の方が感心される第二の点は、APUの学生が本当によく勉強している、という

ことです。文部科学省の中央教育審議会を始め、学校関係者、マスコミ、企業のみなさん方がよく指摘される、「日本の大学生は勉強しない」という姿はAPUにはありません。APUが目指している「真の国際大学」とは、単に国際学生や外国人数員が多かったり、英語でも授業が受けられることを指しません。APUの提供する教育は国際通用性があるべきだ、と考えています。こうした考えから、日常の学習なしには単位が習得できない制度をたくさん組み入れています。宿題や授業での発表を重視する成績評価制度、少ない科目を密度濃く学習できるクォーター制度、シラバスの充実などがそうした制度です。

それら制度の成果もあって、APU学生の自宅での学習時間は毎日平均二時間弱となっており、約五〇%の学生が自宅学習をほとんどしないという平均的な日本の大学生の学習時間と比べると際立った学習状況となっています。毎日の宿題や授業での発表は、学生諸君にはきびしいかもしれないけれど、こうした努力は将来必ず生きてくると確信しています。

また、海外留学を始めとする海外での学習機会が多いのもこの大学の特徴です。二〇〇六年度に入学した日本人学生は、卒業までにはほぼ半数の学生が何らかの海外学習を体験する見込みです。そのための英語能力、海外で学習するモチベーション、海外で生活できる

能力、いずれもAPUの環境と教育が育てた力といえるでしょう。

こうした「学生が学習する大学」において、真摯な態度で学ぼうとする多くの国際学生の姿が好影響を与えていることも大きいと考えています。

「継続的な学習による確かな学力」は進路・就職においても好結果を生むでしょう。APUには毎年四〇〇社近い企業の方々が、APUの学生を採用するためにこのキャンパスにお見えになっています。こうした社会の期待にも応え続けねばならないと思っています。

APUの次の飛躍を目指して

政府は「留学生一〇万人計画」に次いで新たな「留学生三〇万人計画」を提起しています。「真の国際大学」として出発したAPUですが、私たちのミッションに照らして考えると、初期の成功に満足するわけにはいきません。

二〇〇六年度から二〇〇九年度まで、APUでは「ニューチャレンジ」と称する第二期計画に取り組んでいます。ニューチャレンジ計画では、国際社会が求める教育課題を分析し、新しい五つの教育プログラムを開設しました。「ツーリズム&ホスピタリティ」「国際戦略」「言語・文化」「ICT=Information & Communications Technology」「健康・環

境・生命」の分野であり、この教育プログラムは「Crossover Advanced Program」と名づけられました。開学以来のAPU教学の強みである分野をさらに充実させるとともに、国際社会・国際学生のニーズの高い、ICT、環境など、文理総合分野の教育にも挑戦しました。さきほど述べたシェア・タイプの国際教育寮、APハウス3もニューチャレンジ計画の中で建設されたものです。また、APUの国際社会への貢献を量的に拡大する意味で、学生定員を一・五倍にしました。

現在APUでは、ポスト・ニューチャレンジ、すなわちAPUの第三期計画の策定に向けて検討を開始しています。国際社会からのAPUへの期待、日本の高等教育の国際化におけるAPUへの期待をひしひしと感じています。これらに応えとともに、APUの重点教育分野である「専門」「国際理解」「言語能力」の三領域について、多文化・多言語環境を生かして、さらなる取り組みを検討しています。さらに、教育分野の取り組みとともに、政治、経済、文化においてますます重要性が増しているアジア太平洋地域の発展を目指す研究を推進し、「アジア太平洋学」の構築を目指します。また、こうした計画づくりには、卒業生、学生、地域の方々にも加わってほしいと考えています。

APUのDNAを引き継ぐ

「APU誕生物語」ではAPUがどのような志で構想され、関係者のどのような努力で開学されたか、また地域の方々の絶大なるご支援を賜ったことを振り返りました。平岩外四元経団連会長を始めとするACの方々、平松守彦前大分県知事、井上信幸前別府市長を始めとする地域の方々のご尽力に感謝の気持ちを新たにしました。そしてこの大学に飛び込んできた初期の学生たちの熱い想いにも改めて感動しました。私たちは第三期計画に臨むにあたって、もう一度確認すべきことがあると考え、この書を出版することにしました。開学一〇周年を迎えるAPUがさらに高い峰に挑戦するためには、解決しなければならぬ多くの問題があります。しかし私たちは、「解決策は常に原点にある」と信じています。APUの開学をもう一度振り返り、そのDNAを受け取り、継承することが私たちの責務だと思っています。

開学以降、APUが受け入れた国際学生の出身国は一〇六カ国・地域から、学生数は約五四〇〇名にのぼっています。私は世界各国を訪問する機会が多いのですが、UAE（アラブ首長国連邦）の地元テレビ局を訪ねた際に、「学長！」と声をかけられ、びっくりして

振り返ると記者として働いているAPU卒業生だったり、ある国の大使館を訪ねると卒業生が大使館員だったり、APU卒業生のネットワークの世界的な広がりを実感しています。この広がりには、APUの人材育成が地球的規模であることを示しています。こうしたことに私たちは勇気づけられます。

私たちには一つの夢があります。地球上のある地域で争いごとが起き、その解決のための当事者間での協議が始まったとき、紛争国の相互の代表者がAPU卒業生どうしであり、海と湯煙りを眼下におさめる懐かしいAPUのキャンパスで平和について語り合うのです。争いごとは避けられないにしても、その解決の担い手はAPUである。どうです、正夢の予感だと考えるのは私だけでしょいか？

おわりに

二〇一〇年四月一日、APUは開学から満一〇年を迎えます。その間に、世界の情勢も、日本の高等教育も大きな変化の波に洗われました。こうした中、APUがこれからも国際大学として歩み続けるにはどうあるべきなのか、その新しい試みを始めています。APUに関わっている人、関わった人のすべての意見を聞いてみたい、この本は、APUがどのように設立されたかを振り返ることを目的として編集されましたが、発行の真意はこの点にあります。明日のAPUのために、この本はあるのです。

こうしたことから、APUの開学においてお世話になった多くの方にインタビューをお願いしました。快く応じてくださったみなさんに、改めてお礼を申し上げます。APUの誕生、創造、支援に関わっていたすべての方々にお話を聞くことができなかったことは誠に残念でした。

インタビューを通じて、あるいは日頃の交流を通じて、私たちは、APUへの熱い想いを受け取ることができました。読者のみなさんにその情熱を共有していただけるなら幸いです。とりわけAPUを始めとする立命館学園の教職員には日々の教育・研究、仕事の点検と改善に役立ててほしいと思います。卒業生や学生には、それぞれの学生生活がどのような哲学と人々に支えられていたのかについて、改めて確信を深めてほしいのです。そうした中で、APUはnext decadeへの胎動を確かなものにしていくことでしよう。

発行に際して、私どもの遅々とした作業を励ましながら制作にご尽力いただいた中央公論新社書籍編集局書籍第一部長の中田哲史さん、編集担当の星加泰さん、大学側の意をくんでインタビューや執筆に協力してくださったハヌマン代表の三浦祥子さん、ライターの樋口和美さん、株式会社エイエフビイ営業開発部プロジェクトマネジャーの伊良部公博さんに感謝申し上げます。

二〇〇九年三月

APU誕生物語編集委員会

立命館アジア太平洋大学開学宣言

人類は有史以来、地球上のさまざまな地域において自らの文化を築き、文明の進化を求めて多様な営みを繰り広げてきた。人類はまた、さまざまな制約と障壁を超えて、自由と平和とヒューマニズムの実現を求め、望ましい社会のあり方を追求してきた。

20世紀は政治・経済・文化のすべての領域においてかつてない進歩と飛躍の時代であり、人間の諸活動は地球的規模で展開されるに至った。また、二度にわたる世界大戦の経験を通して、国際連合をはじめとする国際協力のための機関が設立され、平和維持と国際理解に向けての取り組みが大きく前進した。

我々は、21世紀の来るべき地球社会を展望する時、アジア太平洋地域の平和的で持続可能な発展と、人間と自然、多様な文化の共生が不可欠であると認識する。この認識に立ち、我々は、いまここにアジア太平洋の未来創造に貢献する有為の人材の養成と新たな学問の創造のために立命館アジア太平洋大学を設立する。

立命館アジア太平洋大学は、「自由・平和・ヒューマニズム」、「国際相互理解」、「アジア太平洋の未来創造」を基本理念として、2000年4月1日、大分県と別府市、さらに国内外の広範な人々の協力を得て、別府市十文字原に誕生した。世界各国・地域から未来を担う若者が集い、ともに学び、生活し、相互の文化や習慣を理解し合い、人類共通の目標を目指す知的創造の場として、立命館アジア太平洋大学の開学をここに宣言する。

2000年4月1日

世界からAPUへ (国際学生の国・地域別数)

	国・地域	2008年11月1日				2000年10月31日		
		学部 学生数	大学院 学生数	交換・短期 留学生数	合計	APS 学生数	APM 学生数	合計
1	中国	634	42	1	677	23	69	92
2	韓国	658	4	12	674	45	41	86
3	タイ	242	10	0	252	4	8	12
4	ベトナム	194	26	1	221	11	21	32
5	インドネシア	151	35	0	186	12	15	27
6	台湾	93	7	4	104	16	17	33
7	モンゴル	97	6	0	103	1	2	3
8	ミャンマー	70	4	0	74	2	4	6
9	バングラデシュ	54	12	0	66	3	1	4
10	インド	29	12	0	41	6	11	17
11	スリランカ	30	7	0	37	3	10	13
12	ネパール	33	3	0	36	2	2	4
13	マレーシア	10	9	1	20	5	8	13
14	フィリピン	6	8	2	16	1	1	2
15	パキスタン	8	2	0	10		2	2
16	カンボジア	1	8	0	9		1	1
17	シンガポール	3	3	3	9	3	3	6
18	ラオス	0	6	0	6	3	4	7
19	サウジアラビア	6	1	0	7			
20	トルコ	0	2	0	2			
21	バーレーン	1	0	0	1			
22	オマーン	1	0	0	1			
23	シリア	1	0	0	1			
24	アラブ首長国連邦	0	1	0	1			
	イラン					1		1
25	ケニア	11	1	0	12			
26	ガーナ	4	5	0	9		3	3
27	ナイジェリア	7	1	0	8	1	1	2

注：国際学生とは在留資格が「留学」である学生をいう。国内学生には在留資格が「留学」ではない在日外国人を含む。APSはアジア太平洋学部、APMはアジア太平洋マネジメント学部

	国・地域	2008年11月1日				2000年10月31日		
		学部 学生数	大学院 学生数	交換・短期 留学生数	合計	APS 学生数	APM 学生数	合計
28	マリ	4	0	0	4		1	1
29	ウガンダ	3	1	0	4		1	1
30	ベナン	2	1	0	3			
31	マラウイ	2	1	0	3			
32	タンザニア	3	0	0	3			
33	カメルーン	1	1	0	2			
34	アンゴラ	0	1	0	1			
35	ボツワナ	1	0	0	1			
36	コートジボアール	0	1	0	1			
37	エチオピア	0	1	0	1	1	1	2
38	ガボン	1	0	0	1			
39	ギニア	1	0	0	1			
40	リベリア	1	0	0	1			
41	マダガスカル	0	1	0	1	1		1
42	モザンビーク	1	0	0	1			
43	南アフリカ	0	1	0	1			
44	ジンバブエ	0	1	0	1	1	1	2
	ジブチ						1	1
45	アメリカ合衆国	26	11	7	44	3	5	8
46	カナダ	4	1	5	10	2	4	6
47	メキシコ	2	5	2	9			
48	キューバ	0	2	0	2			
49	エクアドル	0	2	0	2		1	1
50	ガイアナ	0	2	0	2			
51	ホンジュラス	0	2	0	2			
52	ペルー	0	2	0	2	1		1
53	ボリビア	1	0	0	1			
54	コスタリカ	0	1	0	1			
55	グアテマラ	0	1	0	1			
56	トリニダード・トバゴ	0	1	0	1			
57	ウルグアイ	0	1	0	1			
58	ベネズエラ	0	1	0	1			
59	オーストラリア	5	1	5	11	3	1	4
60	トンガ	1	2	0	3		1	1

資料

	国・地域	2008年11月1日				2000年10月31日		
		学部 学生数	大学院 学生数	交換・短期 留学生数	合計	APS 学生数	APM 学生数	合計
61	ニュージーランド	1	0	0	1		1	1
62	バプアニューギニア	0	1	0	1	1		1
63	サモア	0	1	0	1			
	バラオ						1	1
64	ウズベキスタン	15	5	0	20			
65	ブルガリア	7	5	0	12	2	1	3
66	ドイツ	5	6	1	12			
67	フィンランド	2	0	5	7	2		2
68	フランス	2	0	5	7			
69	ノルウェー	4	0	2	6			
70	スウェーデン	3	0	3	6			
71	キルギス	1	4	0	5			
72	エストニア	3	1	0	4		1	1
73	オランダ	0	0	4	4			
74	オーストリア	0	0	3	3			
75	リトアニア	2	1	0	3		3	3
76	ハンガリー	0	2	0	2	1	1	2
77	カザフスタン	1	1	0	2			
78	ベルギー	2	0	0	2			
79	スイス	2	0	0	2			
80	イギリス	2	0	0	2	3	2	5
81	クロアチア	0	1	0	1		1	1
82	チェコ	1	0	0	1			
83	デンマーク	0	0	1	1			
84	ラトビア	1	0	0	1			
85	ルーマニア	1	0	0	1	1		1
86	ロシア連邦	0	1	0	1		3	3
87	トルクメニスタン	0	1	0	1			
	ポーランド					1	1	2
国際学生(留学生)合計		2,458	290	67	2,815	165	256	421
国内学生		3,125	16	12	3,153	270	214	484
APU学生総計		5,583	306	79	5,968	435	470	905

注：表の左端は2008年11月1日現在、APUに在籍する国際学生の国・地域名に番号をつけたもので、総数は87カ国・地域に及んでいる

開学時の
アドバイザリー・
コミッティ名簿

●名譽委員

樋口廣太郎
アサヒビール株式会社
名誉会長／経済戦略会
議長
ジャン クレティエン
カナダ首相
バハルディン ユスフ
ハビビ
前インドネシア共和国
大統領
ダト セリ Dr. マハ
ティール モハマッド
マレーシア首相
ナッギン バガバン
ディ
モンゴル国大統領
アンドレアス ファ

ン アフト
元オランダ王国首相
アルベルト フジモリ
F.
ベルー共和国大統領
フィデル V. ラモス
前フィリピン共和国大
統領
チュアン リークバイ
タイ王国首相
グエン ティ ビン
ベトナム社会主義共和
国国家副主席
竹下 登
元内閣総理大臣／衆議
院議員

●インターナショナル
ル委員

汪 道涵
海峡兩岸關係协会会长
／元上海市長
ハッサン ビン タラ
ール

ヨルダン ハシミテ王
国王子
アルフオンソ T. ユ
ーチエンコ
ユーチエンコ・グルー
プ会長／前駐日フィリ
ピン共和国特命全權大
使
鄭 夢準
國際サツカー連盟副会
長／現代重工業顧問
辜 振甫
勸海峽交流基金会董事
長／台湾セメント株式
会社社長

●アンバサダー
メンバー

アルフレド V. キヤ
ラディア
駐日アルゼンチン共和
国特命全權大使
ビーター C. グレー
駐日オーストラリア特

命全權大使
ジャミル マジッド

駐日バングラデシユ人
民共和国特命全權大使
フェルナンド ギマラ
エンス ヘイス
駐日ブラジル連邦共和
国特命全權大使
イン キエツト

駐日カンボジア王国特
命全權大使
レナード J. エドワ
ーズ

駐日カナダ特命全權大
使
オスカル フェンテス

駐日チリ共和国特命全
權大使
陳 健

駐日中華人民共和国特
命全權大使
マハディ アーメッド
ガディド

駐日エチオピア連邦民
主共和国特命全權大使

イリアス カツアレア
ス

駐日ギリシャ共和国特
命全權大使
セルダハイ イシュト
ヴァーン

駐日ハンガリー共和国
特命全權大使
シッダールタ シン

駐日インド共和国特命
全權大使
スマディ D. M. ブ
ロトディニンラット

駐日インドネシア共和
国特命全權大使
ファルーク カスラウ
イ

駐日ヨルダン ハシミ
テ王国特命全權大使
エスタ ムシャイト
ーレ

前駐日ケニア共和国特
命全權大使
トンサイ ボーディサ
ン

駐日ラオス人民民主共
和国特命全權大使
ダト M. N. マルスキ
駐日マレーシア特命全
權大使
マヌエル ウリベ カ
スタニエーダ
駐日メキシコ合衆国特
命全權大使
S. フレルバートル
駐日モンゴル国特命全
權大使
オン ナイン
駐日ミャンマー連邦特
命全權大使
ケダール バクタ マ
テマ
駐日ネパール王国特命
全權大使
フィリップ ギブソン
駐日ニュージーランド
国特命全權大使
モハメド アリ アル
フセイビ
駐日オマーン国特命全

權大使
アイワ オルミ
駐日バブアニューギニ
ア特命全權大使
ビクトル アリトミ
シント
駐日ペルー共和国特命
全權大使
ロメオ A. アルグエ
リエス
駐日フィリピン共和国
特命全權大使
金 爽圭
前駐日大韓民国特命全
權大使
エウジェン デイジマ
レスク
前駐日ルーマニア特命
全權大使
アレクサンドル N.
バノフ
駐日ロシア連邦特命全
權大使
チュウ タイ スー
駐日シンガポール共和

国特命全權大使
ネヴィル ビヤディガ
マ
駐日スリランカ民主社
会主義共和国特命全權
大使
サクティップ グライ
ラーク
駐日タイ王国特命全權
大使
トーマス S. フォー
リー
駐日アメリカ合衆国特
命全權大使
アリシエル シャイホ
フ
駐日ウズベキスタン共
和国特命全權大使
ブー ズン
駐日ベトナム社会主義
共和国特命全權大使
アンドリュウ H. ム
テトウフ
駐日ジンバブエ共和国
特命全權大使

●世話人

豊田章一郎
トヨタ自動車株式会社
取締役名譽会長／(社)経
済団体連合会名譽会長
末松謙一
株式会社さくら銀行常
任顧問
西島安則
京都市立芸術大学学長
／元京都大学総長
佐藤研一郎
ローム株式会社代表取
締役社長
河原四郎
大同生命保険相互会社
相談役
●委員
赤澤璋一
(財)世界平和研究所副会
長／(財)機械産業記念事

業財団顧問／(社)日本・
南太平洋経済交流協会
名譽会長／元日本貿易
振興會理事長
明石 康
前国際連合事務次長／
日本予防外交センター
会長
秋沢 晏
石原産業株式会社代表
取締役会長
秋山富一
住友商事株式会社相談
役
穂吉敏子
ジャズピアニスト
明間輝行
東北電力株式会社取締
役会長／(社)東北経済連
合會会長
安部浩平
中部電力株式会社取締
役会長／(社)中部経済連
合會会長
新井正明

住友生命保険相互会社
名誉顧問・名誉会長
荒巻恭士
株式会社きんでん取締役
役会長
安西邦夫
東京ガス株式会社代表
取締役会長
安藤百福
日清食品株式会社代表
取締役会長
飯塚真玄
株式会社TKC代表取締役
社長
井植敏
三洋電機株式会社代表
取締役会長
五十嵐力
株式会社栗本鐵工所取
締役相談役
池坊専永
華道家元四十五世／財
池坊華道会理事長
磯邊律男
株式会社博報堂取締役

相談役
井手正敬
西日本旅客鉄道株式会
社代表取締役会長
伊藤助成
日本生命保険相互会社
代表取締役会長／(株)経
済団体連合会評議員会
副議長
伊奈輝三
株式会社INAX取締
役会長
稲葉興作
石川島播磨重工業株式
会社代表取締役会長
稲村一弘
三井建設株式会社代表
取締役社長
井上礼之
ダイキン工業株式会社
取締役社長／(株)関西経
済同友会代表幹事
井口武雄
三井海上火災保険株式
会社取締役社長

井原國芳
東急建設株式会社取締
役社長
今井敬
新日本製鐵株式会社代
表取締役会長／(株)経済
団体連合会会長
岩谷徹郎
岩谷産業株式会社代表
取締役会長
牛尾治朗
ウシオ電機株式会社代
表取締役会長
宇野收
東洋紡績株式会社名誉
顧問
梅田貞夫
鹿島建設株式会社代表
取締役社長
梅田善司
川崎重工工業株式会社相
談役
枝村純郎
住友商事株式会社顧問
／株式会社大和総研顧

問／元駐インドネシア
共和国特命全權大使／
元駐ロシア連邦特命全
權大使
大賀典雄
ソニー株式会社代表取
締役会長／(株)経済団体
連合会副会長
大河原良雄
元駐米国大使／(財)国際
協力推進協会理事長／
(財)世界平和研究所理事
長／(財)ワイ・エフ・ユ
ウ日本国際交流財団理
事長／(財)日米協会会長
大國昌彦
王子製紙株式会社代表
取締役社長／日本経営
者団体連盟副会長
大澤弘之
リモートセンシング技
術センター理事長／宇
宙開発事業団顧問／前
科学技術会議議員／元
科学技術事務次官

大竹美喜
アメリカンファミリー
生命保険会社日本にお
ける代表者・会長
大西正文
大阪ガス株式会社相談
役
大西實
富士写真フイルム株式
会社取締役会長
岡崎真雄
同和火災海上保険株式
会社取締役会長
岡部敬一郎
コスモ石油株式会社取
締役会長兼社長
岡村泰孝
弁護士／元検事総長
小川進
東邦ガス株式会社取締
役会長
奥井功
積水ハウス株式会社代
表取締役会長／関西経
営者協会会長／日本経

當者団体連盟副会長

小澤三敏

住友重機械工業株式会
社代表取締役会長

小野田 隆

住友海上火災保険株式
会社代表取締役会長

鹿取泰衛

国際交流基金顧問／財
国際開発高等教育機構
理事長／元駐中華人民
共和国特命全權大使／
元駐ソヴィエト連邦特
命全權大使

河合良一

株式会社小松製作所相
談役

川上哲郎

住友電気工業株式会
社代表取締役

河村喜典

三共株式会社取締役社
長

岸本泰延

昭和電工株式会社顧問

北岡 隆

三菱電機株式会社常任
相談役

北島義俊

大日本印刷株式会社代
表取締役社長

木田 宏

財新国立劇場運営財団
顧問／元文部事務次官

金馬昭郎

京阪電気鉄道株式会
社代表取締役社長

國廣道彦

株式会社NTTデー
タ顧問／元駐中華人民共
和国特命全權大使／元
駐インドネシア共和国
特命全權大使

久米 豊

日産自動車株式会社元
相談役

河野俊二

東京海上火災保険株式
会社取締役会長／日本
経営者団体連盟副会長

鴻池一季

株式会社鴻池組取締役
社長

後藤康男

安田火災海上保険株式
会社名誉会長

小長啓一

アラビヤ石油株式会
社代表取締役社長／元通
産事務次官

小林公平

阪急電鉄株式会社代表
取締役会長

小林庄一郎

関西電力株式会社相談
役

小林陽太郎

富士ゼロックス株式会
社代表取締役会長／財
経済同友会代表幹事

小山榮一

タバイエスベック株式
会社代表取締役会長

近藤 晃

日本航空株式会社常任

顧問

坂田浩一

日本テレコム株式会
社代表取締役会長

坂田耕四郎

三井生命保険相互会
社代表取締役会長

坂本 卓

日鉱金属株式会社代表
取締役会長

櫻井孝順

第一生命保険相互会
社代表取締役会長

佐藤文夫

株式会社東芝相談役

佐野一夫

小野薬品工業株式会
社取締役相談役

澤田茂生

日本電信電話株式会
社代表取締役会長

椎名武雄

日本アイ・ビー・エム
株式会社最高顧問

塩野元三

塩野義製薬株式会社代
表取締役社長

篠崎昭彦

住友金属鉱山株式会
社相談役

柴田寛二

株式会社山下設計代表
取締役社長

守隨武雄

日本ビクター株式会
社代表取締役社長

新宮康男

住友金属工業株式会
社相談役名誉会長

杉浦喬也

全日本空輸株式会社顧
問

杉田力之

株式会社第一勧業銀行
頭取

鈴木 正

第一製薬株式会社取締
役会長

鈴木敏文

株式会社イトーヨーカ

堂代表取締役社長／株式會社セブンイレブ
 ン・ジャパン代表取締
 役會長／(財)經濟団体連
 合會副會長
 鈴木信夫
 丸善株式會社代表取締
 役會長
 鈴木治雄
 昭和電工株式會社名譽
 會長
 関本忠弘
 日本電氣株式會社取締
 役相談役
 千宗室
 茶道裏千家家元／哲学
 博士／ハワイ大學歴史
 學部教授
 高橋 靖
 大日精化工業株式會社
 取締役社長
 高原慶一朗
 ユニ・チャーム株式會
 社代表取締役社長
 武内伸允

東洋信託銀行株式會社
 取締役會長
 田嶋英雄
 ミノルタ株式會社名譽
 會長
 田代 和
 近畿日本鐵道株式會社
 代表取締役會長／大阪
 商工會議所會頭
 多田公照
 中國電力株式會社取締
 役會長／中國經濟連合
 會會長
 巽 外夫
 株式會社住友銀行特別
 顧問
 立元正一
 住友大阪セメント株式
 會社會長
 田中益夫
 關西バイント株式會社
 名譽顧問
 田中義巳
 ニチメン株式會社相談
 役

谷村 隆
 株式會社ジェーシービ
 ー相談役
 垂水公正
 國際協力事業団・國際
 協力総合研究所特別顧
 問／元アジア開發銀行
 總裁
 千畑一郎
 田辺製菓株式會社相談
 役・名譽會長
 辻 晴雄
 シヤープ株式會社相談
 役
 堤 清二
 (財)セゾン文化財団理事
 長
 寺澤正雄
 日本ヒューレット・パ
 ッカード株式會社代表
 取締役社長
 戸田一夫
 北海道電力株式會社取
 締役相談役／北海道經
 濟連合會會長

戸田守二
 戸田建設株式會社代表
 取締役社長
 豊島 格
 (財)國際經濟交流財団會
 長／前日本貿易振興會
 理事長
 中里良彦
 富士電機株式會社相談
 役
 長島一成
 株式會社ジャパンエナ
 ジー代表取締役會長
 中村寛之助
 協和発酵工業株式會社
 取締役相談役
 中村泰三
 KDD株式會社代表取
 締役會長
 那須 翔
 東京電力株式會社相談
 役／(財)經濟団体連合會
 評議員會議長
 成田 豊
 株式會社電通代表取締

役社長／(財)經濟同友會
 副代表幹事
 西尾 哲
 日商岩井株式會社相談
 役
 羽倉信也
 株式會社第一勸業銀行
 元頭取
 畠山 襄
 日本貿易振興會(ジェ
 トロ)理事長
 濱中昭一郎
 日本通運株式會社代表
 取締役會長
 早崎 博
 住友信託銀行株式會社
 特別顧問
 平島 治
 大成建設株式會社代表
 取締役社長
 深田祐介
 作家
 福原義春
 株式會社資生堂代表取
 締役會長／(財)經濟団体

連合会評議員会副議長
藤井義弘日立造船株式会社代表
取締役会長／日本経営
者団体連盟副会長

藤澤友吉郎

藤沢薬品工業株式会社
取締役相談役

藤田弘道

凸版印刷株式会社代表
取締役社長

藤村宏幸

株式会社荏原製作所代
表取締役会長

藤村正哉

三菱マテリアル株式会
社相談役

藤原富男

大日本製薬株式会社取
締役相談役

古河潤之助

古河電気工業株式会
社代表取締役社長

古川昌彦

三菱化学株式会社相談
役／(社)経済団体連合会
副会長

前田勝之助

東レ株式会社代表取締
役会長／(社)経済団体連
合会副会長

牧 冬彦

神戸商工会議所名誉会
頭

松下正治

松下電器産業株式会
社代表取締役会長

松橋 功

JTB代表取締役会長

松本良夫

株式会社熊谷組代表取
締役社長

三重野 康

元日本銀行総裁

三田勝茂

株式会社日立製作所相
談役

御手洗富士夫

キヤノン株式会社代表
取締役社長

水口弘一

株式会社野村総合研究
所顧問／(社)経済同友会
副代表幹事・専務理事

三野重和

株式会社クボタ相談役

宮内義彦

オリックス株式会
社取締役会長／(社)経済同
友会副代表幹事

宮村眞平

三井金属鉱業株式会
社代表取締役社長

三好俊夫

松下電工株式会
社取締役名譽会長

茂木友三郎

キッコーマン株式会
社取締役社長／(社)経済同
友会副代表幹事

森 金次郎

日本税理士会連合会
長

森 英雄

住友化学工業株式会
社

會長

森岡茂夫
山之内製薬株式会
社相談役

諸井 虔

太平洋セメント株式
会社取締役相談役

諸橋晋六

三菱商事株式会
社相談役

八尋俊邦

三井物産株式会
社特別顧問

山口信夫

旭化成工業株式会
社代表取締役会長

山田菊男

日石三菱株式会
社相談役

山田安邦

ロート製薬株式会
社社長

山本卓眞

富士通株式会
社名譽會長

湯淺暉久

株式会社ユアサコーポ
レーション取締役名譽
會長

米倉 功

伊藤忠商事株式会
社相談役／(社)経済団体連
合会評議員会副議長

若原泰之

朝日生命保険相互会
社代表取締役会長

渡辺 晃

株式会社三和銀行相
談役

●京都・滋賀経済界

秋元 満

株式会社京都銀行會
長

石田 明

大日本スクリーン製
造株式会社取締役社長

稲盛和夫

京セラ株式会
社取締役名譽會長／京都商工
會

議所会頭
小松 新
日新電機株式会社相談
役／京都経営者協会会長
坂部三次郎
ダイニツク株式会社取
締役相談役
寿栄松憲昭
日本電池株式会社相談
役
鈴木正三
日本写真印刷株式会社
代表取締役会長
高橋宗治郎
株式会社滋賀銀行取締
役会長／滋賀県商工会
議所連合会会長／滋賀
経済同友会代表幹事
武田 一平
ニチコン株式会社代表
取締役社長
立石義雄
オムロン株式会社代表
取締役社長
夏原平和

株式会社平和堂代表取
締役社長
西八條 實
株式会社島津製作所相
談役
堀場雅夫
株式会社堀場製作所取
締役会長
道端 進
京都中央信用金庫理事
長／(旧)京都経済同友会
代表幹事
南 莊郎
株式会社川島織物取締
役相談役
村田純一
村田機械株式会社代表
取締役社長
村田泰隆
株式会社村田製作所取
締役社長

株式会社大分銀行代表
取締役会長／大分商工
会議所会頭
石井幸孝
九州旅客鉄道株式会社
代表取締役会長
岩切達郎
宮崎交通株式会社取締
役社長
江副 茂
東陶機器株式会社代表
取締役会長
大野 茂
九州電力株式会社代表
取締役会長／(旧)九州・
山口経済連合会会長
小野 浩
大分交通株式会社代表
取締役会長／大分朝日
放送株式会社代表取締
役社長／大分県経営者
協会会長
神近義邦
ハウステンボス株式会
社代表取締役社長

菊池 功
株式会社安川電機特別
顧問
上妻 亨
株式会社トキハ代表取
締役名誉会長
後藤達太
株式会社西日本銀行代
表取締役会長
坂井 隴
九州松下電器株式会社
取締役社長
佐藤諄之助
株式会社さとうベネッ
ク代表取締役社長
四島 司
株式会社福岡シテイ銀
行代表取締役頭取
白石 司
株式会社九電工業代表
取締役会長
佃 亮二
株式会社福岡銀行取締
役会長
布江彌之助

西日本鉄道株式会社取
締役会長
福島親比古
大分瓦斯株式会社代表
取締役社長
嶺井政治
沖縄電力株式会社代表
取締役会長
村山富市
元内閣総理大臣／衆議
院議員(大分県出身)
吉村恭彰
株式会社アステム代表
取締役社長
和智午郎
西部瓦斯株式会社相談
役
(役職名等を含めすべ
て二〇〇〇年四月一日
現在、「APU開学」のあ
ゆみ」より転記。なお、
平岩外四氏はAC設立
総会から九八年二月末
まで名誉委員をつとめ
ていただきました)

りつめいかん たいへいようだいがくたんじょうものがたり
立命館アジア太平洋大学誕生物語
せかいきょうがく だいがく
—世界協学の大学づくり—

2009年4月10日 初版発行

著者 立命館アジア太平洋大学誕生物語編集委員会

発行者 浅海保

発行所 中央公論新社

〒104-8320 東京都中央区京橋2-8-7

電話 販売 03-3563-1431

編集 03-3563-3664

URL <http://www.chuko.co.jp/>

印刷 三晃印刷

製本 小泉製本

©2009 Ritsumeikan Asia Pacific University

Published by CHUOKORON-SHINSHA, INC.

Printed in Japan ISBN978-4-12-004025-2 C0037

定価はカバーに表示しております。

落丁本・乱丁本はお手数ですが小社販売部宛お送りください。

送料小社負担にてお取り替えいたします。



9784120040252

ISBN978-4-12-004025-2

C0037 ¥1150E



1920037011505

定価 本体1150円＋税



世界106カ国・地域からやってきた学生が
地域に支えられ、地域とともに学ぶAPU。

日本発のグローバルな大学が
いかにして大分県別府の地に誕生したのか、
学生たちは何を期待し、いかに活躍したのか、
APU開学に関わった熱い人たちが語る。

立命館アジア太平洋大学誕生物語
世界協学の大学づくり